ル 4
3218
18

門ル
3219
巻 18

江戸名所圖會卷之七

搖光之部目録

富賀岡八幡宮
洲崎弁天
海福寺
本誓寺
大木松
八間堀神明宮
岡向院
猿江泉養寺蓮
日先社
三所堂
梅屋敷
花園社
八月十八日祭礼
永代紀世話
泳勒寺
蓮池
圓光大師堂
三重堂
天王祠
岡山堂
硯宮神社
八百羅漢寺
善慶寺
一言紀寺
阿弥陀仏
岡崎
本尊
江戸天満宮
二月廿八日
善門院
入神明宮
仏殿梅
妙村元八幡宮
採茶庵舊蹟
一蝶寺
源八幡宮
源八幡宮本殿
浄心寺
七面堂
法禪寺
靈雲院
源八幡宮新殿
一之橋稲荷天祠
三十三間堂
陽嶽寺
靈嶽寺
芭蕉庵舊址
光明寺
善門院

昭和九年七月六日購求

東覚寺　武蔵野
移植松

香取大神宮

慈光院

薬師寺庭中の井

蒙古退治日蓮大菩薩曼荼羅縁起英井

霊山寺　菅空法祝五寺廟
紀音堂

法恩寺　番神堂

第六天祠

本久寺

大法寺　番神社
鹿島神

中の郷尾花の井

多田薬師堂

さらし井

太子堂

法華経石碑
古文書

常光寺　六阿弥陀
六番目
東迎松
神木柳
棹

宝蓮寺

吾嬬権現社　水宮
古跡

柳窪妙見堂　七面堂
鏡の松

押上最敬寺

中の郷八幡宮

業平天神社

遠州秋葉山寺　本堂
又在

最勝寺

妙源寺

大川橋の図

三囲稲荷社

長命寺　牛島
長命天
長命の堤
漢詩
自在庵田址
柳樹

白髭明神社

請地秋葉権現

隅田の宿

隅田の宿

隅田川

寺島蓮華寺　太子
堂

隅田川の堤　堤春
景

梅若丸塚　田縁起

都鳥

水神社

庵崎

牛田薬師堂

浩宮稲荷寺

本所川薬師堂　白髭明神祠
太神宮
浅草祠
地蔵

平井聖天宮　不動堂
平井の渡

善賢寺

一の江妙音寺　寛政
盧舎那

今井渡

彩宿渡し

牛田稲荷社

小弓寺書子墓

彩徳八幡宮

関屋の里

若宮八幡宮

清宮稲荷社

葛西九郎墳墓

二の江妙音寺　水神
文

藤田水福寺　元禄上人築十字名号
架渡装掛
多賀神堂

猿江の渡

松戸の津

弁財天祠

全別院廃址

丹頂の池

綾瀬川

関屋天満宮　元天神

真福寺縁起之旧跡

山王宮
二王門
立石

若通寺　牛宮
中将姫製
弥陀像
上人筆十字名号
琴深松

善無寺

小泉氏家小窓跡の井

宗又村帝釈天社

猿江八幡宮

神明宮

茶載畑

猿の橋

葛西花菖蒲の井

古製山茶掛の井

中川　同釣魚の井

越野権現祠

猿江の堤

相撲場

若狭寺　紅葉宮

徳願寺　岡魔堂

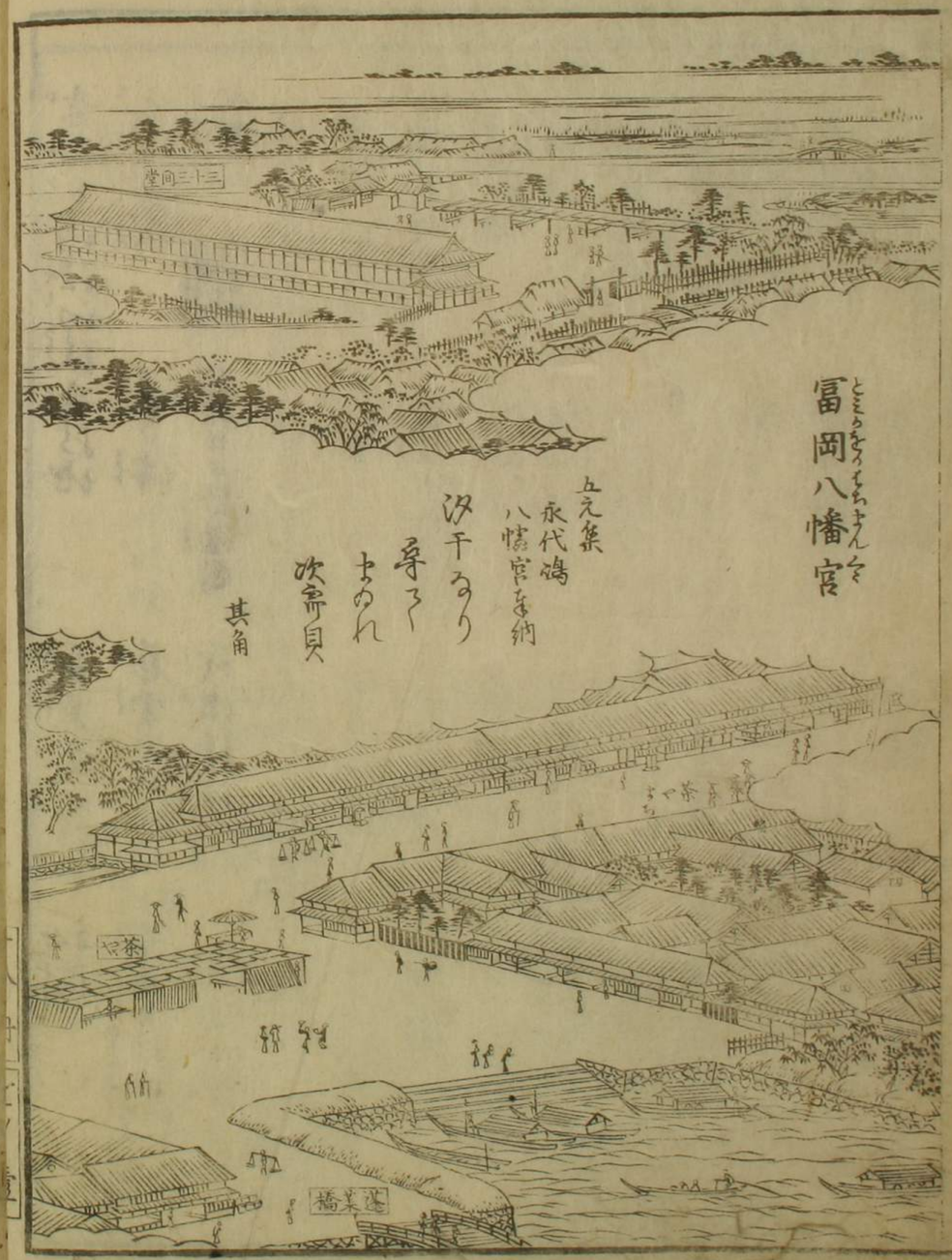
和泉寺廃址

弁財天祠

全別院廃址

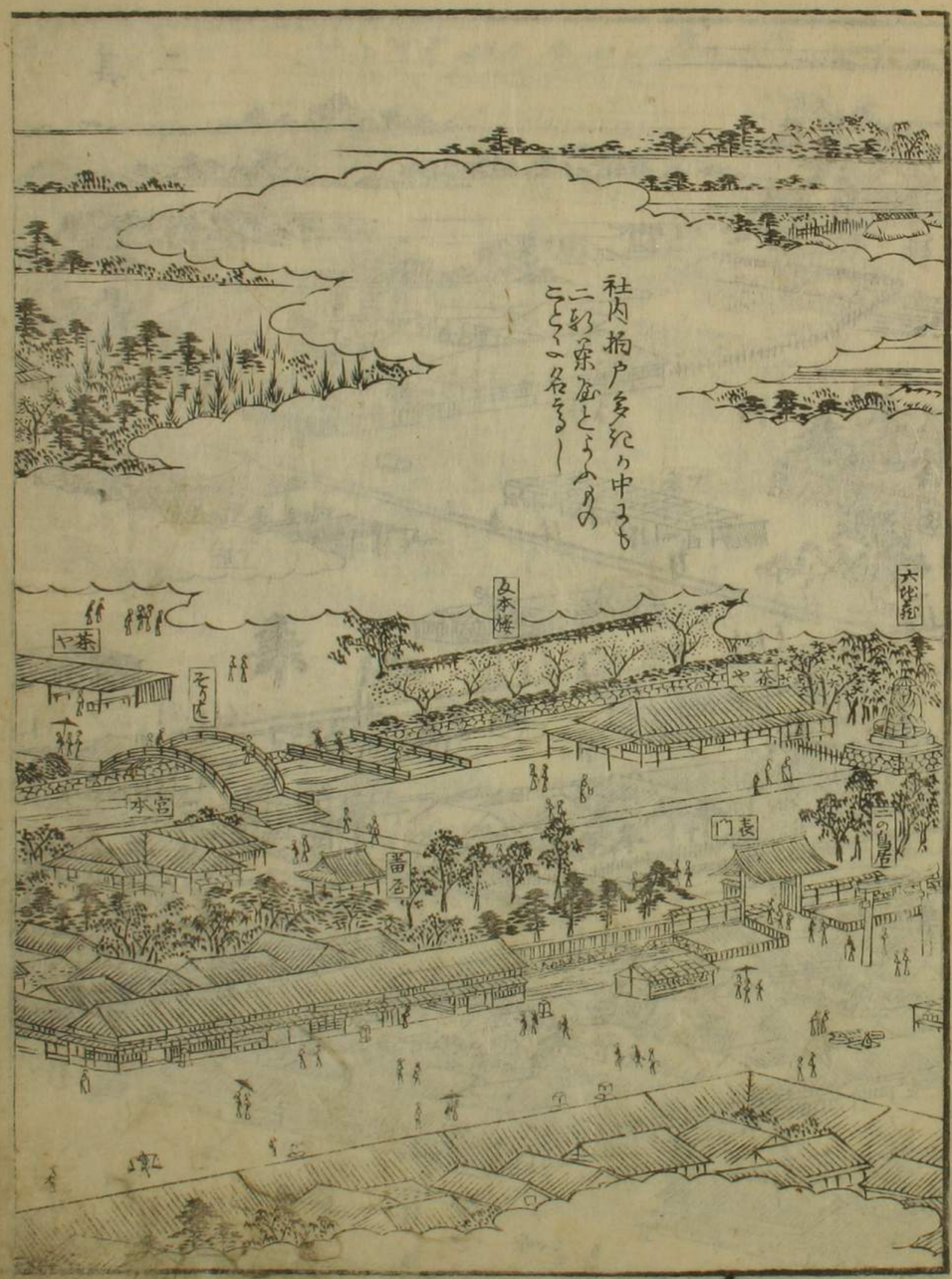
行徳浦濱
長浦湊
市河城趾
國府臺 羅漢井 石橋
玉府城址
境石
真間浦
真間継橋
葛飾八幡宮
安房須賀神社 八房岩 二王門 番神社 中興日祐上人墓
妙正池
勝間田池 熊野宮
意富比神社初詣座地
天通念佛 神宮 欲殿
遠ヶ澤
九月廿日祭禮圖
裏見薬
慈雲寺
義倶神社

同渟竈圖
新利根川
根本橋
同古戦場 殿ヶ原旧址 断崖の石 法華社 古墳
金光明寺
持玉坂
真間濱
真間手児奈旧跡
八幡不知森
正中山法華経寺 宗門最初説法輪旧地 奥の院
妙正大明神祠
洗川
甲宮
迦羅堂起瀬
総寧寺 太田道灌手植松 同梅
同古戦場 義倶社 什宝
真間入江
真間の井
芳谷妙見堂 仏殿 経蔵 誕生橋 文殊堂 宝庫 開山墓
葛飾八幡宮 葛の井 宝蔵
須賀浦八幡社
石芽
圓光大師遺蹟
市川渡し
真間の継橋 楊門
真間の入江 楓古樹 手児奈明神社
真間手児奈旧跡
梨園
高石明神社 法花堂 鬼子母神堂 考閣堂 法浪香樹
若宮八幡宮 万葉碑



富岡八幡宮

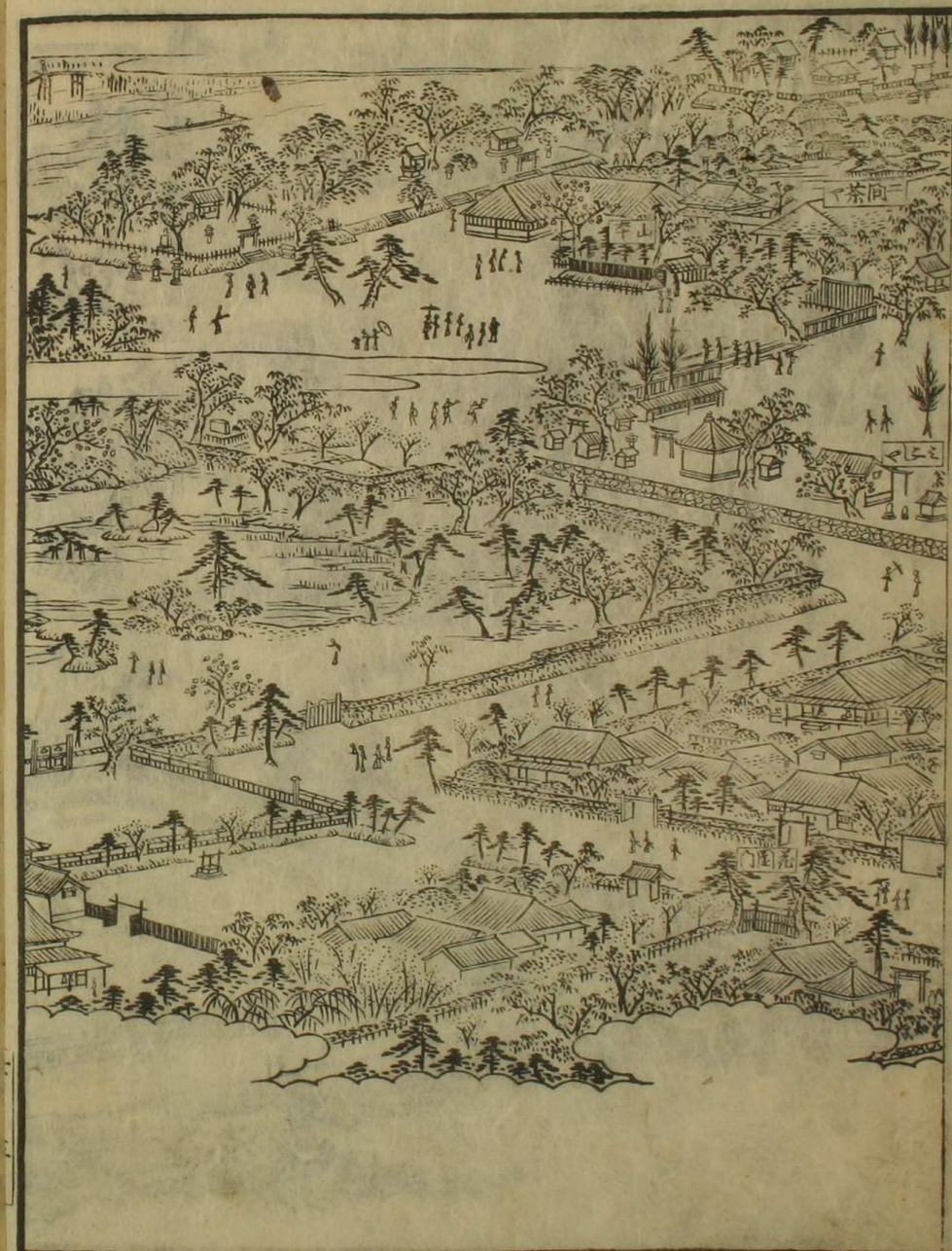
五元集
永代鴻
八幡宮を納
汐干のり
寿ろ
よめれ
次奇貝
其角



松平
社本
不供内
動不
門表
天空

其二
天矢
富岡
観音
茶や
茶や
茶

三其
永代寺
五月雨のそらもいろそくてきまる御代のうるき代のちら
仁和寺宮


一向茶
山王
花屋敷

富岡八幡宮　深川永代嶋にあり　別當八真言宗にして大栄山金剛神院永代寺と號す　江戸名所記に寛永五年の夏弘法大師の靈示あるすなわち高野山の両門主碩學其外東國一流の納僧此永代嶋に集会し一夏九旬の間法会あり列に弘法大師の御影堂を建て真言三密の秘蹟を講ぜられ以後神前に龍燈のあるゆえありと云云

本社　祭神　應神天皇　神影八幡菅神作　相殿　右　天照大神宮　八幡大明神　左　三座

相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信し其後千葉家及び足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又官領上杉等の家々に伝へ太田道灌崇敬殊に厚かりしより道灌没すゝの後八神像の所在も定あらはれ寛永年間長盛法印靈示によりて感得せ　今尚社内十二所にあり

東の方砂村の海濱に元八幡宮と称する宮居あり尚社の同地とのゝ　依此地に當社を創建せしとのゝ

華構の餝に於ては唯茅茨の営をなすのみ然るに大和國生駒山の麓基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法弟となり寛文四年の頃霊夢を感じ宮社を経営せんと日あらずして落成し結搆備はるあらずして以降神光日々に新なり　河東第一の宮居と

なるべし當社の額に八幡宮と書したる青蓮院宮尊證法親王の真蹟なり社内末社多し依悉く是を略す

當社四隅鎮守　艮隅　蛭子宮　巽隅　荒神宮　宮川町の川際にあり　入船町の道の傍にあり

坤隅　摩利支天宮　永代寺門前仲町の角にあり　乾隅　大勝金剛宮　同所玉石町にあり

園女桜　永代寺林泉のうちにあり　享和年間金毫女とのゝ俳諧を好める婦かこれを植たりと　仙桜とも名づく今は枯ぬ　二華表　熱田の社にあり石をもて製せり　左右の柱に銘文を刻せり此文は鳴嶋氏撰せりと不審と書る

冨賀岡八幡神祠石華表銘　並序

維著雍敦牂之歳都下人某等拾渠名麩力率錢建冨岡八幡祠前石華表凡厥高壹丈伍尺尺右中間稱焉石以代木備不朽也厥石取諸相之土肥山馬蓋此擧也欽所國家旁及自禱云廼具狀來諏可薦於亀神忠信鳳卿以文之鳳卿閑之采慈采蘋可薦於亀神忠信由中也而況於不朽周之所歸風之所自於是乎観人載上之心矣神之歆可知也因叙厥載勒右柱以繫左柱亦其所需也

銘云

繫昔應神　帝惠惝天　蔑跡于豊　男山之遷
威霊顯赫　奕世且千　邀矣東海　齋祠壹公
惟石之柱　懇祈皷壑　私禱相延
敦忠祗肅　神監昭然　幽宮陟隲　福聲永年

元文戊午夏五月

東都中秘書監源鳳卿子陽甫撰
得水赤井啟拜書

山開　毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行し此日うり同廿八日中ゝ尚社列尚永代寺の林泉をひらき諸人に見物をゆるし俳人集まる

祭禮　隔年八月十九日より執行し此日神輿三基本所一の橋の南藏舟浦の前へうる行列へ神幸同日帰輿とゝの祭祀い寛永二十年癸未八月十九日初ゝ執行あり乃ゝ連綿ゝ江戸名所記よゝゝゝゝゝ慶安四年の秋天下泰平の御禱のお相別鎌倉鶴岡八幡宮の法式を摸しゝ尚社より流鏑馬をもちひたゝより假屋桟敷をとりまゝへゝ是を見物を貴賤市をなすゝゝゝより後ゝよりうり浅草の三十三間堂をゝよ迄ゝゝゝゝるも其流鏑馬の餘風ゝゝるらん歟

當社門前一華表うり内三四町ゝ間い両側茶肆酒肉店軒を並へて常ゝ絃哥のあゝ絶と殊ゝ社頭ゝゝ二軒茶屋と称する貨食屋抔ゝゝゝ遂客絶と牡蠣蜆花蛤鰻鱺魚の類ひを此地の名産とせり

三十三間堂　同所二町ゝあり東の方ゝあり相傳寛永年間或人云九年大江戸の弓師備後といゝる者射術稽古の為京師蓮華王院を摸しゝ三十三間堂を創立せん事を乞依浅草ゝおいて地を揚ひ諸家ゝ勸進ゝゝゝ建立の功を募るゝ小於ゝ同十九年壬午十月普請落成と

山中
其二

其三

の辺を俗知崎と称せるは三十三間堂の田地なるを今は町名となれるを俗間堂前と唱へるも三十三間堂の前と云ふ略語なり

田緑の名に羅る灰燼せるは其後今の地に移されたりとなり

江戸三十三間堂矢数帳に慈眼大師の發起なりとあり又一説に刑部直義とあり紀州一流の武士なれを建立し江戸紀州の違へ故なりと苦よりかを見るべし不審なりともいつり

洲崎辯財天社　同所東の方洲崎にあり列當を吉祥院と号す本尊

辯財天女の像は弘法大師の作といふ相傳元禄年間深津氏正隆

台命を奉り八幡宮を東の方の海濱を築立て陸地とし依同

十三年庚辰護持院の大僧正隆光河辺氏字崇春此地に天女の宮居を建立せ

ることを

此地は海岸にて佳景なり殊更弥生の潮盡には都下の貴賤袖を連

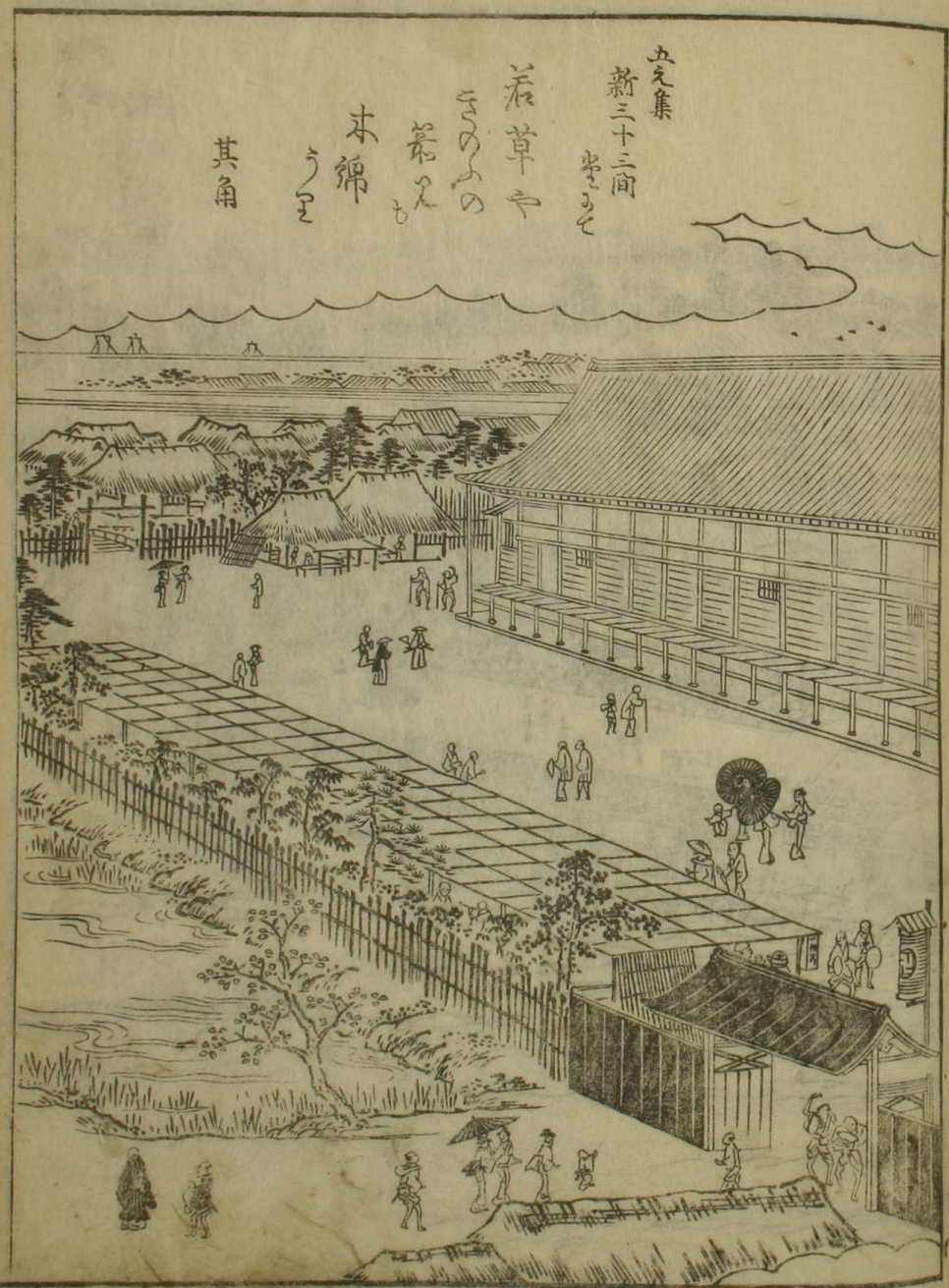
ね真砂の文蛤を拾ひ又は楼船を浮へて妓婦の絃歌に興を催

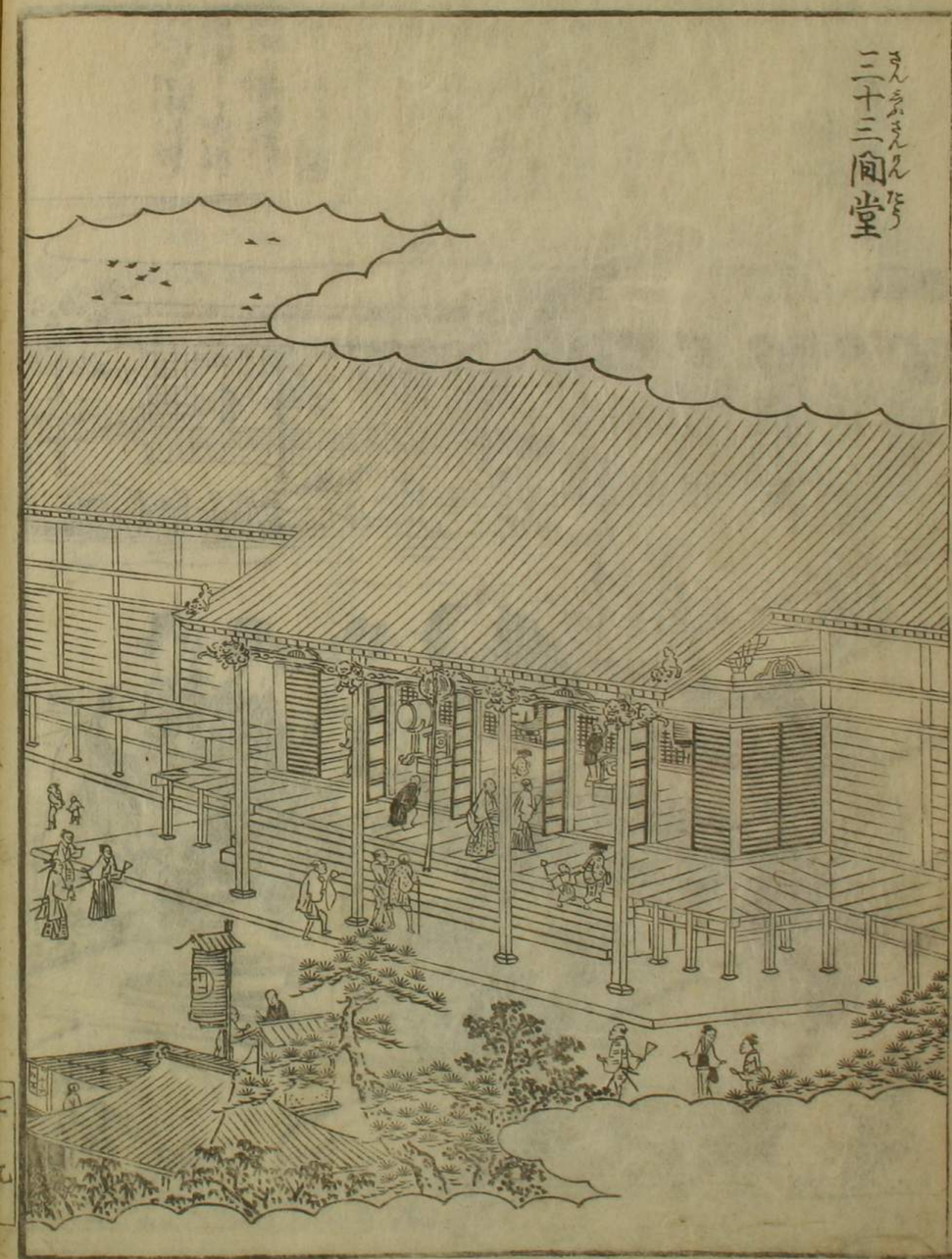
さもあり〳〵む春色を添るの一奇観たり又冬を月千鳥も名を伯うり

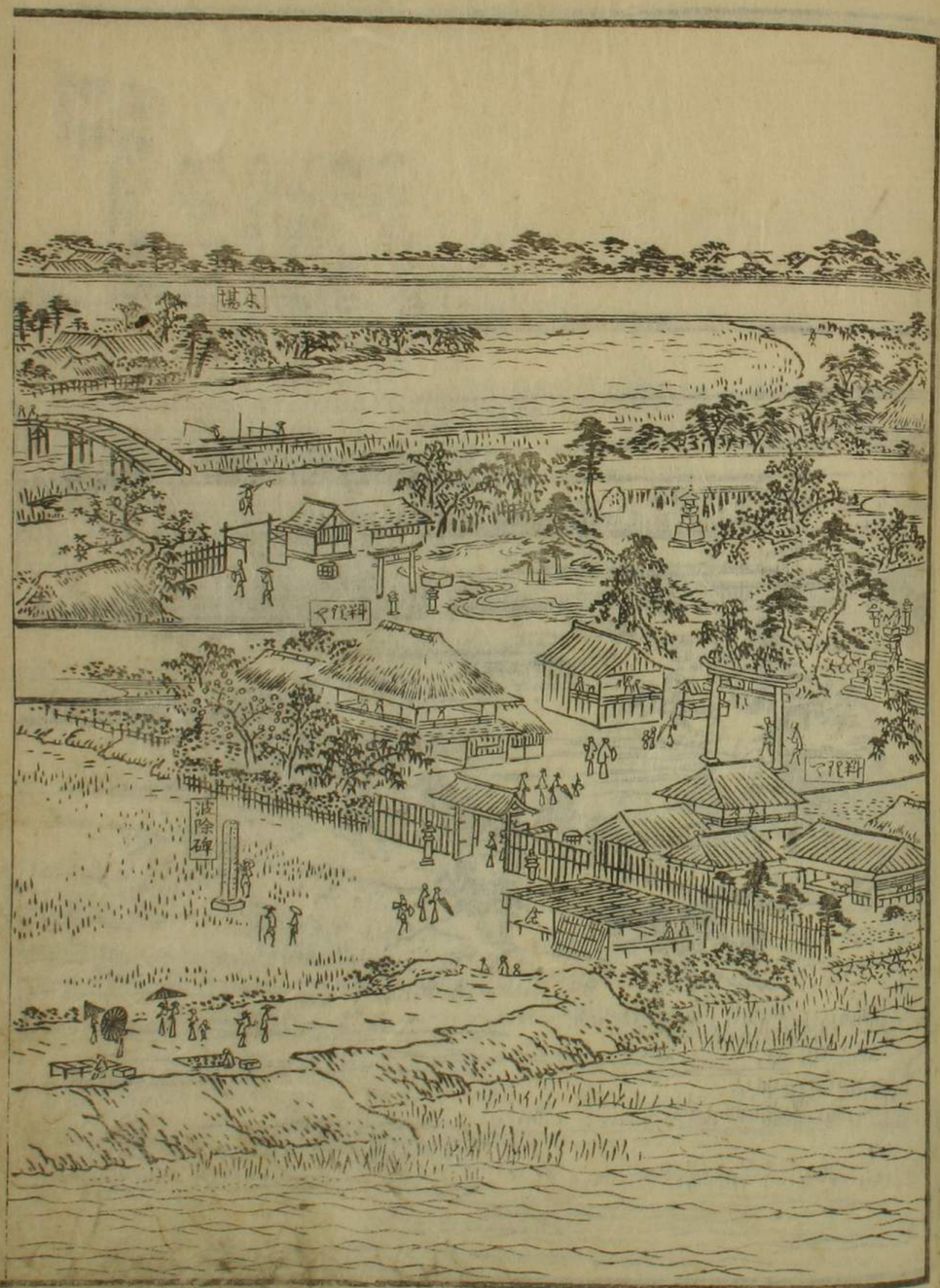
長光山陽嶽寺　深川冨岡橋の北結横小路にあり妙心寺派の禅宗な

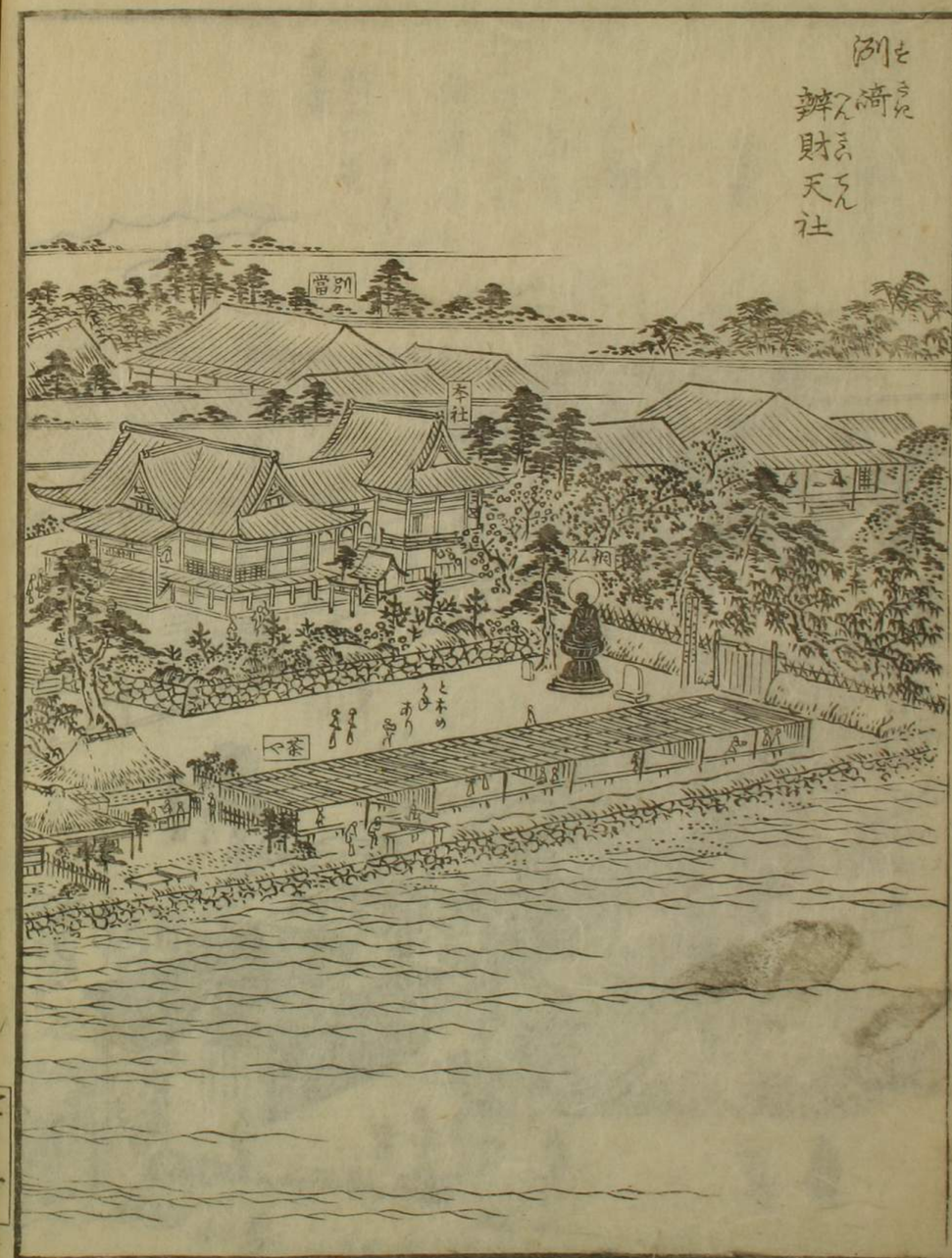
り本尊観音大士の像は恵心僧都の作なりと云向井氏忠勝用

二軒茶屋
雪中遊宴之図


五元集
新三十三間
若草や
きのふの
蕎麦も
水綿
其角

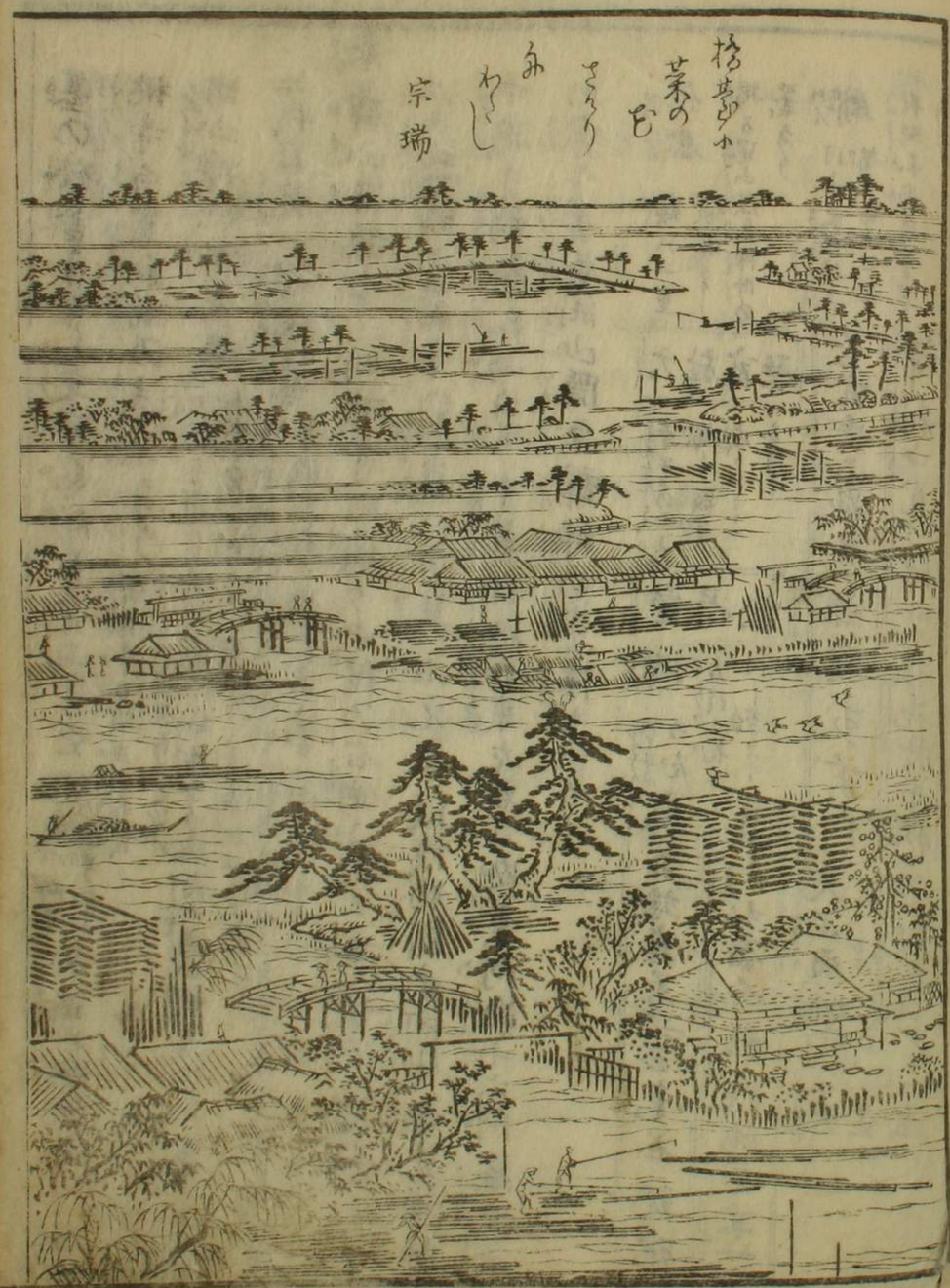

三十三間堂

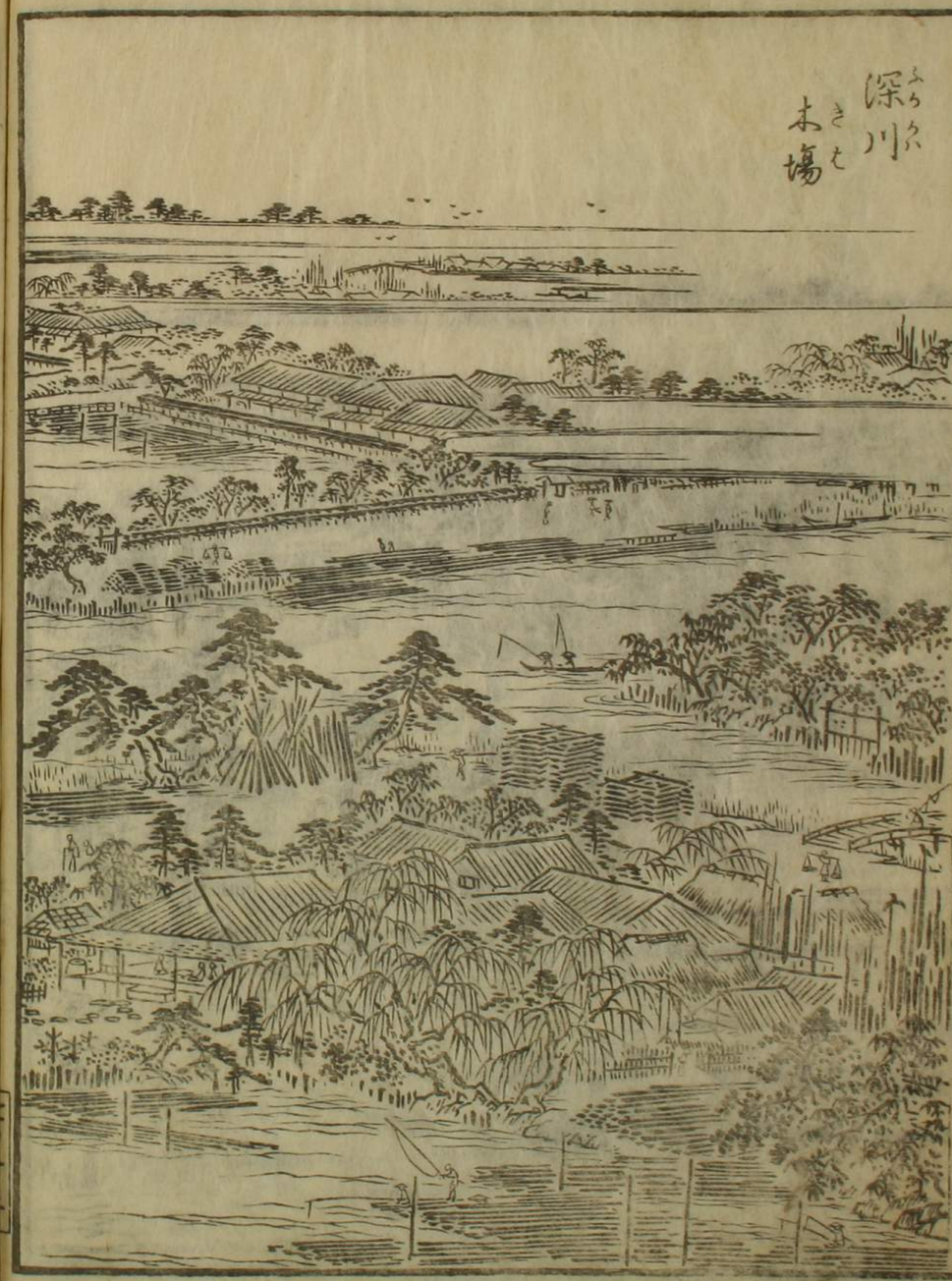




洲崎天神
弁財天社

砂村
富岡元八幡宮
洲崎弁天より
十八丁あまりを東
の海濱よりあり
深川八幡宮の
同地なり


格夢ホ
茅の
ど
さくり
み
わ
し
宗瑞


ふかゝ
深川
きし
木場

墓の精舎あり文室和尚を屈山とも陽嶽ハ向井和尚ハ相州三崎見桃寺領主向井氏の法号なり桃寺白室和尚の法弟なり

出山釋迦如来像 立像二尺ばかりあり和尚の需に応じて拙工幼作なり坪内大隅四郎と云る人尚寺文室見桃寺も布施金の道場なりとの事

二代目英一蝶墳墓 当寺卵塔の中あり碑面に槐外道輪信士元文二年丁巳閏十一月十三日と記してあり通称ハ長八名ハ信勝とのよし

永壽山海福寺 同所寺町通り中程の右側にあり黄檗派の禅林なり

江戸鰐頭二箇寺の一員なり萬治元年戊戌の創建開山ハ隱元禅師

中興之獨本和尚なり本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢木の像を安置開山隱元禅師の肖像もあり

佛殿 額ハ二重 京根ノ一掲る開山隱元禅師の筆なり

大雄寶殿 幸そるの上に掲る額筆者ハ不詳

聯 ほし筆の杉に掲る当る七立 対則和尚の筆なり

聯 ほし筆の杉に掲る当る七立 対則和尚の筆なり

妙和端貴美玉毫長現瑞

蓋門弘願不朽慈海等無邪

空裏平六無邊弥陀如来

祥利中興法雲振乾坤千秋

天王殿 内に関帝像と安置ハ二階の軒にあり

聯 左右の大鵬の筆

法國衣氏風高雲面闊

聯 左右の大鵬の筆

埠鬱捕正法遠又以安宇

鐘樓 天王殿の右にあり大鵬和尚の筆なり

樓 花鯨の流文ハ陽元禅師の筆なり其文左のごとし

當山洪鐘者覽文壬子年石川政勝本住居士捐之爲大福田因請銘乎 開山隱老和尚永令垂不朽也時天和二年壬戌之冬劫火俄起炎燎殿宇巨器之本願忻然鳩金重新造焉等祿者同氏思失先亡之及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鐫其上銘曰

大化爐内一火鑄成中虛而寂有扣則鳴洪音嘹喨醒覺群生禪林令振地府業輕返聞自性寂寂惺惺壽源綿衍福海澄清

化風永扇家國昇平覺王聲教大矣難名

開山八十一翁隱元琦謹題

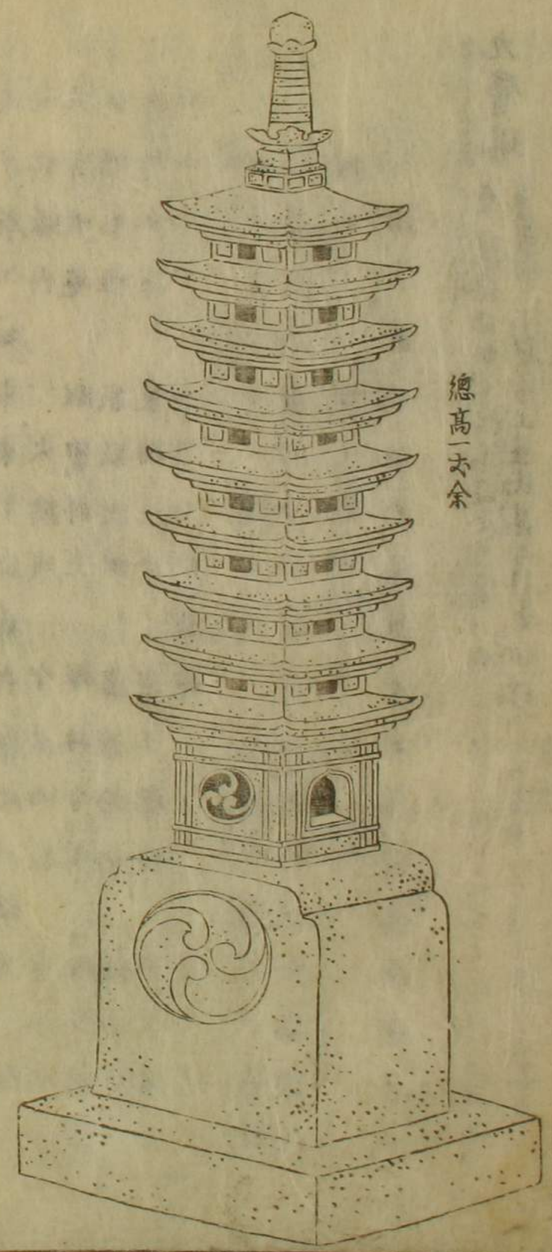
天和三年癸亥小陽吉日臨濟正宗三十三世

永壽山海福禪寺住持沙門獨本源和南謹識

檀主 石川氏 正之 正茂

治工 武州江戸居住中村喜兵衛藤原正次

九層塔 寺境池のかたらにあり高一丈ばかりの石の塔なり相傳ふ武田信玄の上屋氏某これを持伝へしの尚寺にはすべ建るとぞ



總高一丈余

採茶庵舊蹟　同所平野町より能諧師枳風子の庵室なり枳風本國い參州刈谷の人枳山氏なり鯉屋と唱へ大江戸の小田原町に住て奥害なり後隱栖して一元と号す裏翁裏村常に能諧を好み擅林風を慕ひのち芭蕉翁式師として此仏延に遊ぶ寛元六十年翁常に奥せられ又云く去未八西三十三箇國枳風い東三十三箇國の能諧奉行なり

と次の芭蕉翁の条に詳なり享保十七年壬子六月十三日八十六歳にて没せり西本願寺の中興塔なり

枳風句集　予所居採茶庵それの初秋の風のうつり

秋萩をうつしうゑそ初秋の風のうつり

家あたりうつしうゑそ

白雪もちらはとぬ萩のうつりかな

うつのあられよひらとて

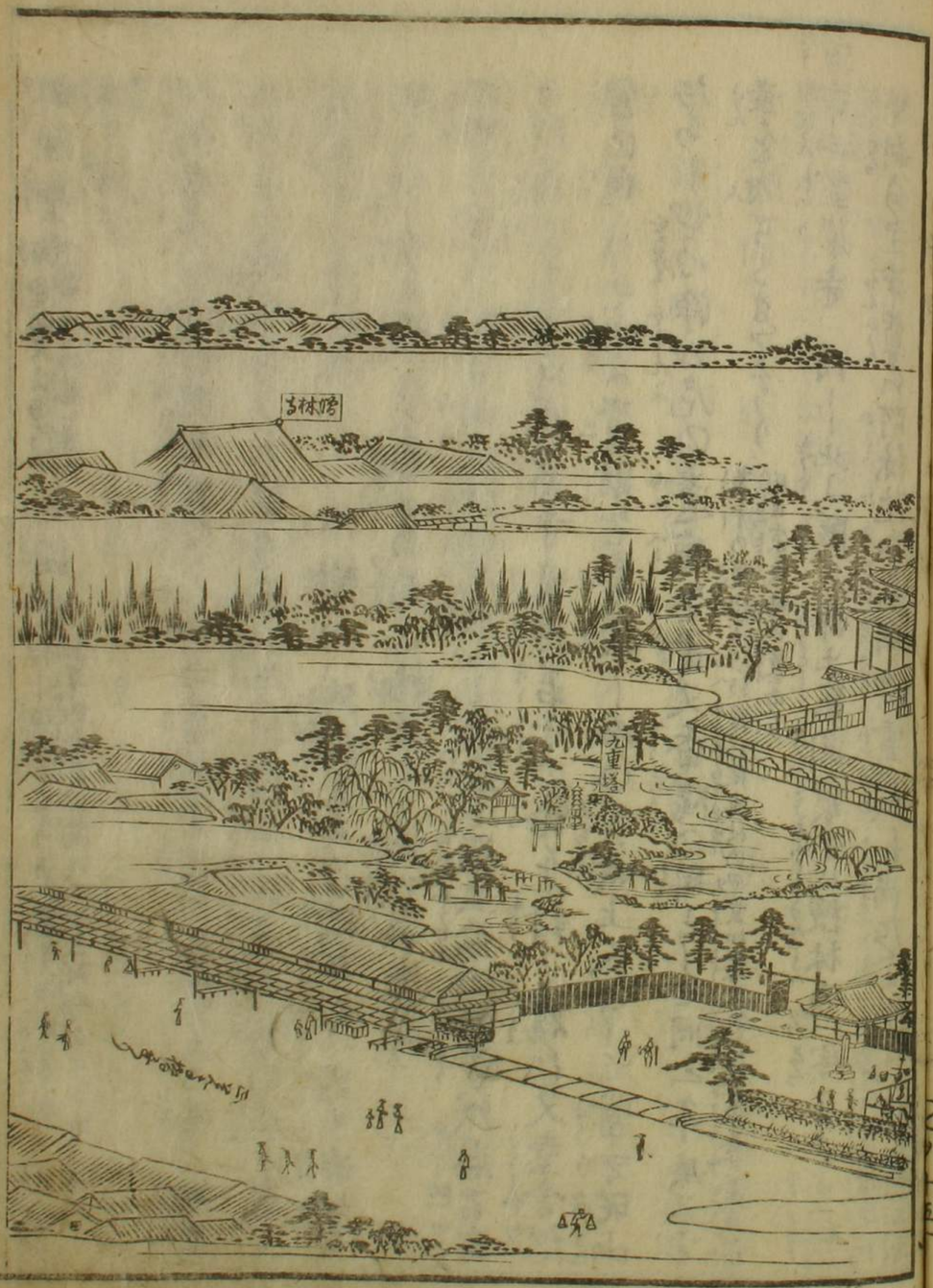
萩うゑてひとりうれしらんうつり時雨　枳風

深川や月も時雨るる萩こうの角

海川よりうつりて　仝

川の音萩の起臥うつりかな　仝

法苑山浄心寺　同所通り西覺寺橋より北の方右側にあり日蓮宗中興文國対延山に屬し乃身延山の弘通所と称せり萬治元年戊戌創建の寺院なり開山は通遠院日義上人と号し中興は覺成院日念上人たり本尊は釋迦如来の像を安置し當寺にて



海福寺

武田信玄の持つてゝたゝと
ラつゞの塔
壹基
堂前池の傍ら

祖師堂（本堂の左にあり）　七面堂（同堂前にあり）
（日蓮上人の像を安置　延山奥の院の七面と同作なり）
（当寺は法華宗なり）

相傳当寺は浄心院殿妙秀大姉の菩提を吊はせんとて御建立あり〳〵精舍なりと当時浄心尼は小堀正一入道宗甫の妾なり

寛永十八年辛巳　大樹御誕生あり　頃正一入道の忠心を御乳母となり

補ふの一分に備んと春日の局に託て

大樹を育〳〵なる故に浄心尼卒するの後も猶生前の勤労を思召出さん萬治元年戊戌當寺境内若干の地を封〳〵賜ひ又堂舎經營の料として大に貨財を喜捨〳〵ありしかは浄心尼の遺廟を建又香燭の料として同之年庚子寺産を附せらるる

道中山霊巌寺　は〳〵北に隙る浄土宗関東十八檀林の一室にして宏壮の梵刹なる本尊は阿弥陀如来開山は霊巌和尚なり

（尚寺の境内に阿弥陀堂あり　俗称忠心の母堂加藤主計氏清正の息女蓮成院殿日宗大姉の墓あり）

傳に姓は里見氏南総小梁の産なり十三歳同郡清龍寺の秀岩所の室に入剃髪し其性聰敏にして寛に檀林の慧しかり寛永十八年丙子又浄土傳燈系譜に南総天羽郡佐貫の人或云後列海中の老姓は今川氏沼津浄運院開山の法嗣なりとも和尚開創の精舎故当寺あり牧峯よりとあらを依是を略せ

寺産を附せらる寮舎僧房甍を連ねて巍然たるを正え坊を造立せり銅像の地蔵尊は大江戸六地蔵の一員なり

（台青よりうて）

對〳〵毎歳四月朔日より同十日に至て阿弥陀経千部讀誦修行あるを

（へに道俗群詣せり）

相傳寛永年間当寺開山霊巌和尚或日大江戸の東浦を顧て侍者に謂て云く我大盤を此地に建む侍者の云く江潮浪高く鉢盂底空〳〵爭巨楹碩梁を架せん師笑て俟夫日あらん於是師化疏を筆〳〵諸檀家を勧励し一簀毎に十念して脈譜に結縁する故小四輩競廉廣汀日あらとそ〳〵陸地となる（今霊巌島と稱する其日也）其地早く成て梵刹を開創〳〵霊巌寺と号せしに於て学資五十石を賜ふ爾法幢盛に起て五百の義龍頂に蟠る若に阿山和尚の世（尚寺第二世松蓮社大参）

頑魯と号せ泉列堰の人こ　明暦丁酉の回録に羅漢悉灰燼とあるの後今の地に移さるゝとあり其頃は今の地も海濱にして輒寺院構営もなりがたしと云阿頼和尚　阿山和尚の弟子にして奥澤九品佛の冠基を十方に勧進して地を築固め諸堂伽藍建立せらるゝとあり

當知山本誓寺　重願院と号せ同通りの向側にあり浄土宗江戸四箇寺の一員たり　京都知恩院に属せり　唐佛の阿弥陀如来を本尊とせ相傳此本尊は相州小田原の漁者其名を詳にせず魚網を洗ふに彼地の海中に得て後霊示に仍て當寺に安置するとあり往古は小田原にありて傳蓮社曜誉西岡和尚　西岡師は此徳飯沼弘経寺の第二世創建し藤枝氏開基の浄舎なり〻文禄四年丁未　厳命に依寺を大江戸に移せ其頃今の市郭内昆布市門の辺なり　貞蓮社大誉上人文賀和尚中興の開祖とす　傳燈系譜に念誉と俗姓は田中氏相州小田原の人なり〻妻双の碩学なりしに門人に名僧おゝしとせり　其後馬喰町の辺に地を賜ひしに水戸中納言頼房卿の御母堂英勝院殿當寺を修造せり　當寺は馬喰町より

鄭軍孤寺と称す朝鮮人の筆跡に定めり　天和二年四月の後今の地に移りたり　天和二年四月の後今の地に移りたり　鮮の三使来聘のこたりの海路都たり

沈藏尊石像　當寺境内に安置せり　卵塔の中にあり人の印の石なり〻享保のため霊験ありとて方に群集せり　今一宇の香堂を建てこれを安置せり

一蝶寺　同所東の方海辺新田数の内にあり京師妙心寺流の禅宗蒼龍山宣雲寺と号せ元禄七年甲戌創建の林園にして卓禅和尚開山たり英一蝶翁曾當寺に寓居せ其頃の遊とて佛殿僧房等の屏障悉く翁の畫なり故に世俗一蝶寺と学せり　一蝶の伝第三巻に見る

日照山法禅寺　同所南の小路にあり浄土宗にして京師紫恩院に属せ本尊阿弥陀如来の像は佛工安阿弥の作なり　左右二十五菩薩の像は雲中に羅列して常に行者を護念し湯山和の鮮紅を摸擬せ　興院と称せるもまた極楽上品上生の荘厳を写せり故に世俗極楽寺と学せ　慶長七年九月廿二日に化寂せ　開山長蓮社英誉上人と号せ　濃州恵那郡鵜塚の住人俗姓は伊賀氏小〻三郎五郎則俊と号せ　伊賀氏は源門佐則吉の三男なり後伊賀を小改む　弘治元年乙卯鵜塚に

一城を築き江田の郷と号けめとよ居住を（後多山湖寺の縁下たりしを永禄三年織田家の領よ信長の孫よ信長の）と号け雲頂と改めて浄業を修行しるよ（後良庵今多良庵院と云）天正十八年関東御打入の頃道徳殊勝の空へある故以大江戸より呂川よりひと寺境を湯へ（今呂川寺も法禅寺なり）其後文禄二年癸巳道三河岸へ移され又柳生へ北を習さをられたりしを孫よ天和三年よ至りて今の地へ移るに（所城辺よりし頃に正月三ヶ日の間いてもりて鉦鼓を鳴さること其間鳴ることなし今も正月三ヶ日の空い鉦鼓を鳴さることと）

龍徳山雲光院　光巌教寺と号を同所西よ離る浄土宗江戸四箇寺の一よ〻本尊阿弥陀如来の像い京師東山獅子谷恵徴上人の作とい〻開山い還蓮社往誉上人潮呑和尚と号を（観智國師の法嗣よ甲州武田家の臣飯田氏後ちの孫同文左衛門景の女よりて後別今川氏義元の士神尾孫兵衛文家の室とす）

同刑部少輔守世の母　局い　大将軍家泥近の侍女よりて元和六年庚午

女御　入内の時供奉の功よりて後一位よ叙せらる当寺創開の

御も黄金二ヶ枚をもひ堂材をとり〻〻湯へ（雲光院厨後一位尼公松平周防大炊頭と云）と号をしり〻柳原堤の南よりし頃い尚寺を光巌寺と号せり天和二年田縁の災よりて依かすり〻三年人々の地へ移せり　雲光院の三大なの額い　後水尾帝の勅を奉りて良恕法親皇筆を添られ〻と

いへ　昔い本堂へ掲る今い宝山堂へ収る〻〻

五本松　図所小名木川通り大嶋小あり（或人云四名女木と容るりと古江戸の景ようるき沢とも書て江戸鑑）

小名木川へ作る又世地へ渇通の家ある九鬼家の構の中より道路を越て水路へ俗間宗〻〻渇家家と号へ

面を霊へ和の古松をいへ　昔い此川筋へ用〻程の古松の株をそのり

川を隔て南岸の地い知恩院宮尊空法親皇御幽棲の舊跡な

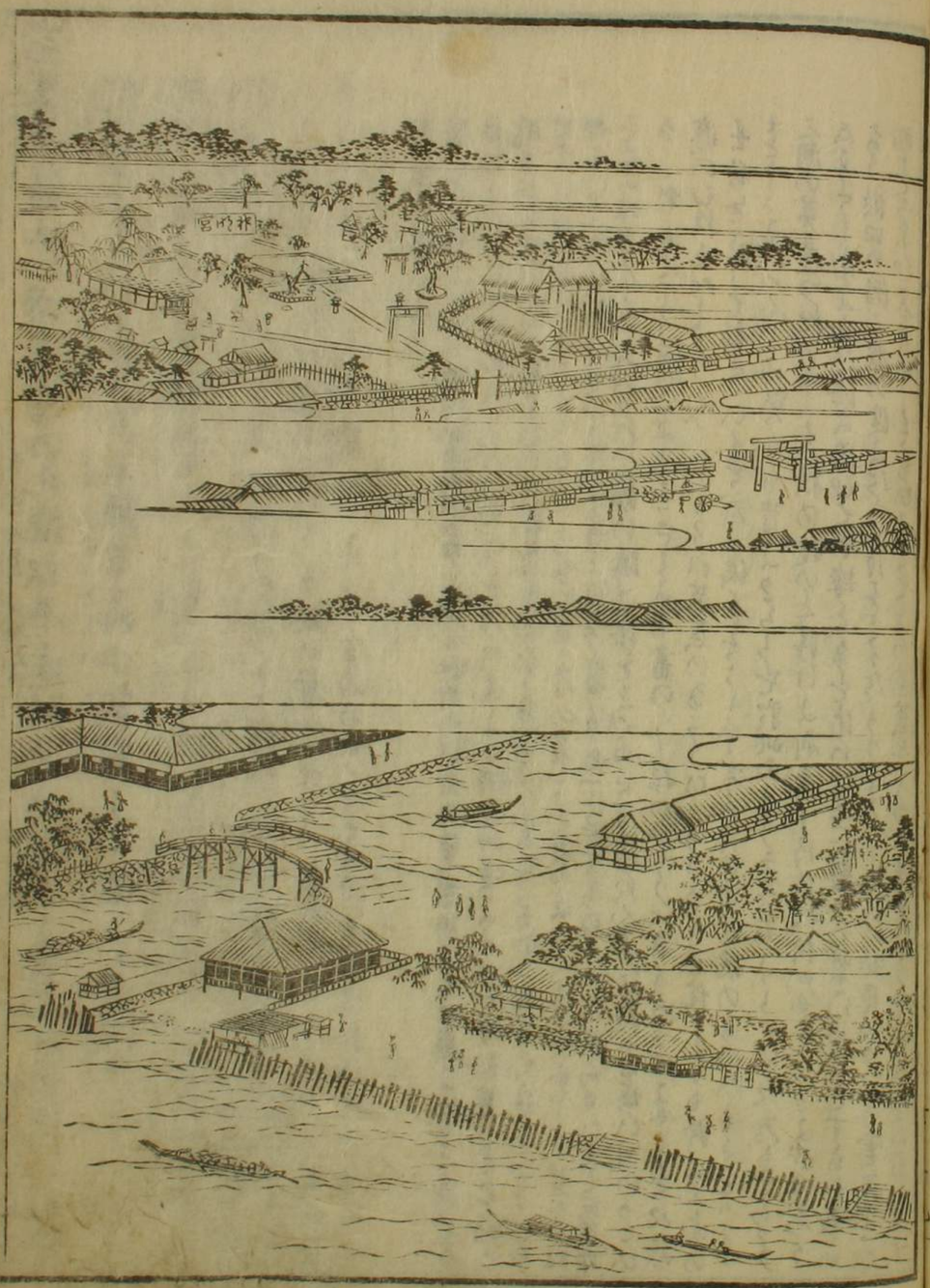
（巻本和霊山まの余ちを合せるへ）

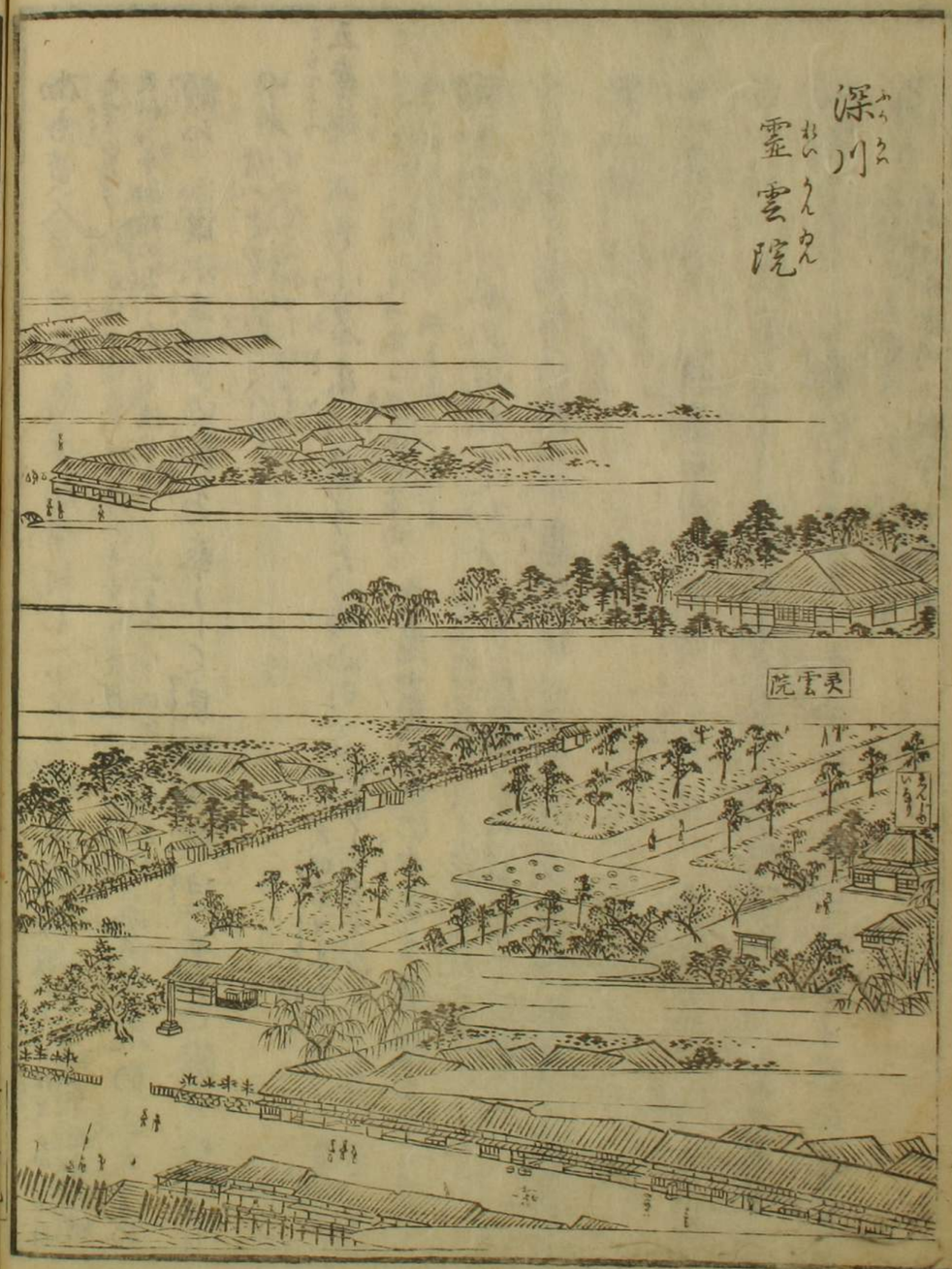
天王山霊雲院　清澄町大川の堤百年橋の南詰へあり禅宗にて

武州越生の龍穏寺へ属を本尊い聖観世音開山放光的東明

和尚と号く宝暦七年丁巳　台命あり依創建をる不の薊若

開基の年歴久〻れへあらさるを以て世俗深川の新寺と称へ




深川
霊雲院
霊雲院

芭蕉庵舊址　同し樹の北結松平遠州候の庭中にあり古池の形今猶存ちりとゝの延宝の末桃青翁伊賀國より始て大江戸に帰り枚風の家に入後剃髪して素宣と改む又枚風ゑらぶを芭蕉庵の号を譲請夫こゝを後此地に庵を結ひ泊船堂と号す

とゝの江戸小田原町の魚屋なり下頃の黛ゆたかなり後此葉をもてりしの生涯に奥もあり自水面に浮草覆ひしこゝろ古池の如くこゝろにしめる古池のにちなみあり

芭蕉を稱ゑ辞

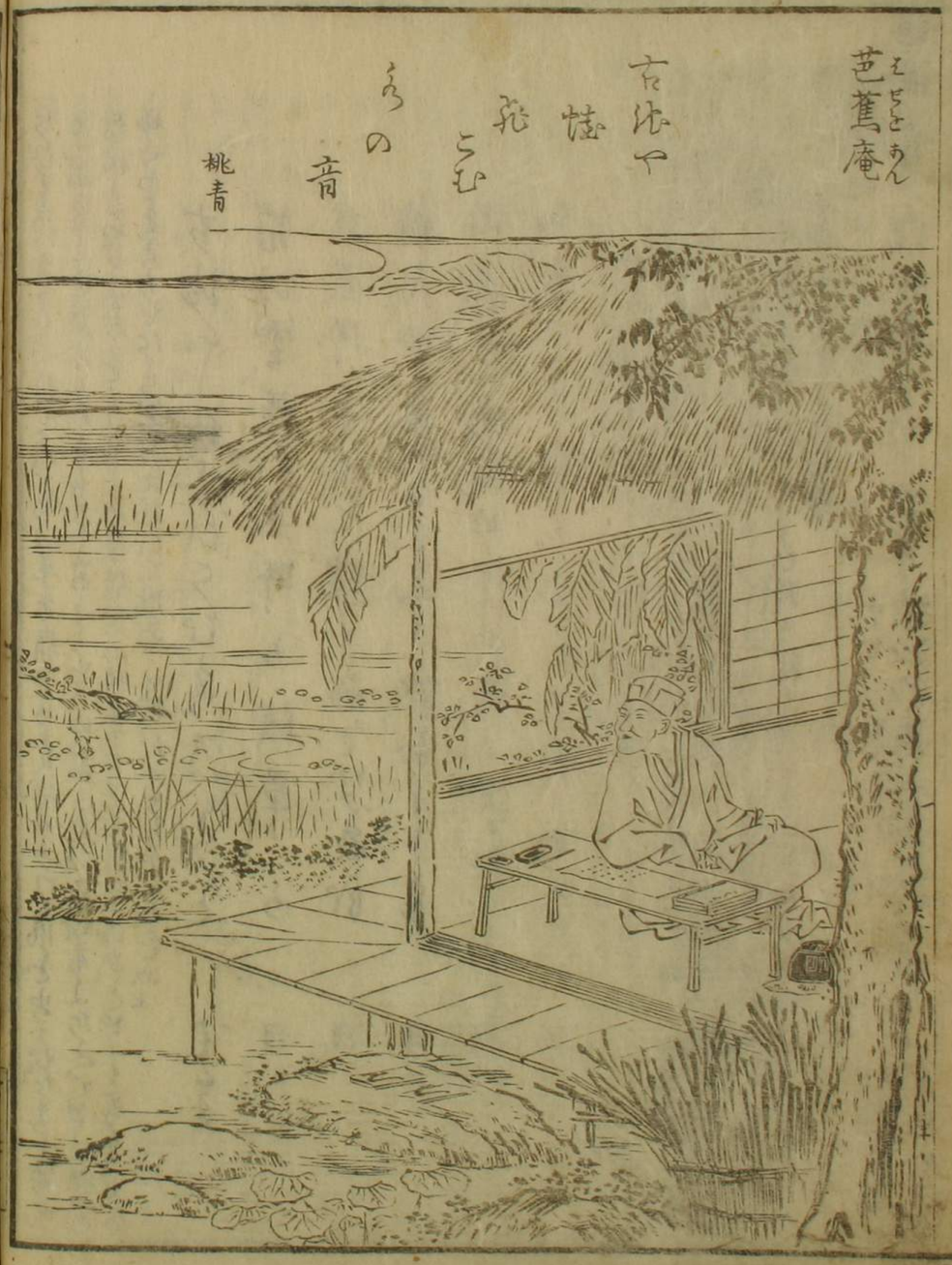
菊は東籬にさかり竹は北窓の君とあり牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる荷葉は平地にたゝ水清からされは花咲ことの稀なるや栖を此境にうゝを時芭蕉一株を植る風に芭蕉のゝゝやあるひけん枚株葉をあさうそ葉茂をあさうそ庭こをせんめ萱の影陽もあつてゝうるゝ草庵の名とゝ蕉友門人とりよせ草一そ芽をとりて根をうゝちてゝゝをくるゝ年〳〵ゝるゝ年〳〵ゝるんゝりぬ一とせゝちの〳〵の行脚ありひえて芭蕉庵むそゝ破れんとゝられいられい離の隣ゝ池をゝゝてゝさゝるゝ紀笠の中さゝゝゝゝも書のゝ〳〵松ゝひとりにゝりぬゝ紀ゝ年ゝゝを紀籠寝のゝ移ゝたゝりゝ〳〵のゝられ芭蕉のゝこゝりひとゝゝゝゝぬ侘しゝも移ゝゝ年の長秋をゝゝて物ゝひゝゝ紀ゝ涙をゝゝく今年ゝ月のゝ花橋のゝほひもゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝれゝゝゝ〳〵の髪ゝも昔ゝゝゝゝゝ牧此ゝゝゝゝゝゝ

芭蕉庵

古池や
蛙
飛
こむ
水の
音

桃青



湯殿の池より靜謐の井上家

毎歲正月と九月の十三日より舊式の祭祀あり

是を歩射と號く 相傳へ昔此地開創の里正深川八郎右衛門某

宅地より伊勢兩皇太神宮を勸請奉り泉養寺の開山秀須法

印をして奉祀せしむるといへり此地の深川氏宅地の四方をいつり隔て

泉養寺記佛に深川の起立のる實を載其墨書に云く深川の地往古の廣くたる原野なりし

其須拂列の差ふ深川八郎たる基と稱せるくあり此の地に居住と称するる慶長元年丙申

年軍れ寺めて此地に寺せたまひ此八郎たる地名を問せたまひしと問ふ此八郎たる

あり住人もなかれ荒廣の地なれば地名もなかりしに此地を開創し苗字

深川の文字のを地名に唱へまりと云ふ

嚴命ありしより深川の地名發とのこの八郎たるの

る孫教立て地に住して里正たりしに宝暦の頃被ありて其教斷絶せりされと泉養寺八郎たるの

香花院なる人開發せし故の名なり今も狸深川氏累立の墳墓存せり日野砂村新田の東に八郎たる新田と稱る耕地

のるも此人開發せし故の名なり今土俗なるして其地を四十丁村とつる

因に云ふ泉養寺の地に重瓣紅花の蓮あり花形牡丹に髣髴たり故に牡花の蓮と稱

めるるくあるらを寛政十年の夏初て此花開生せり今に至り年々たるに奇觀とす

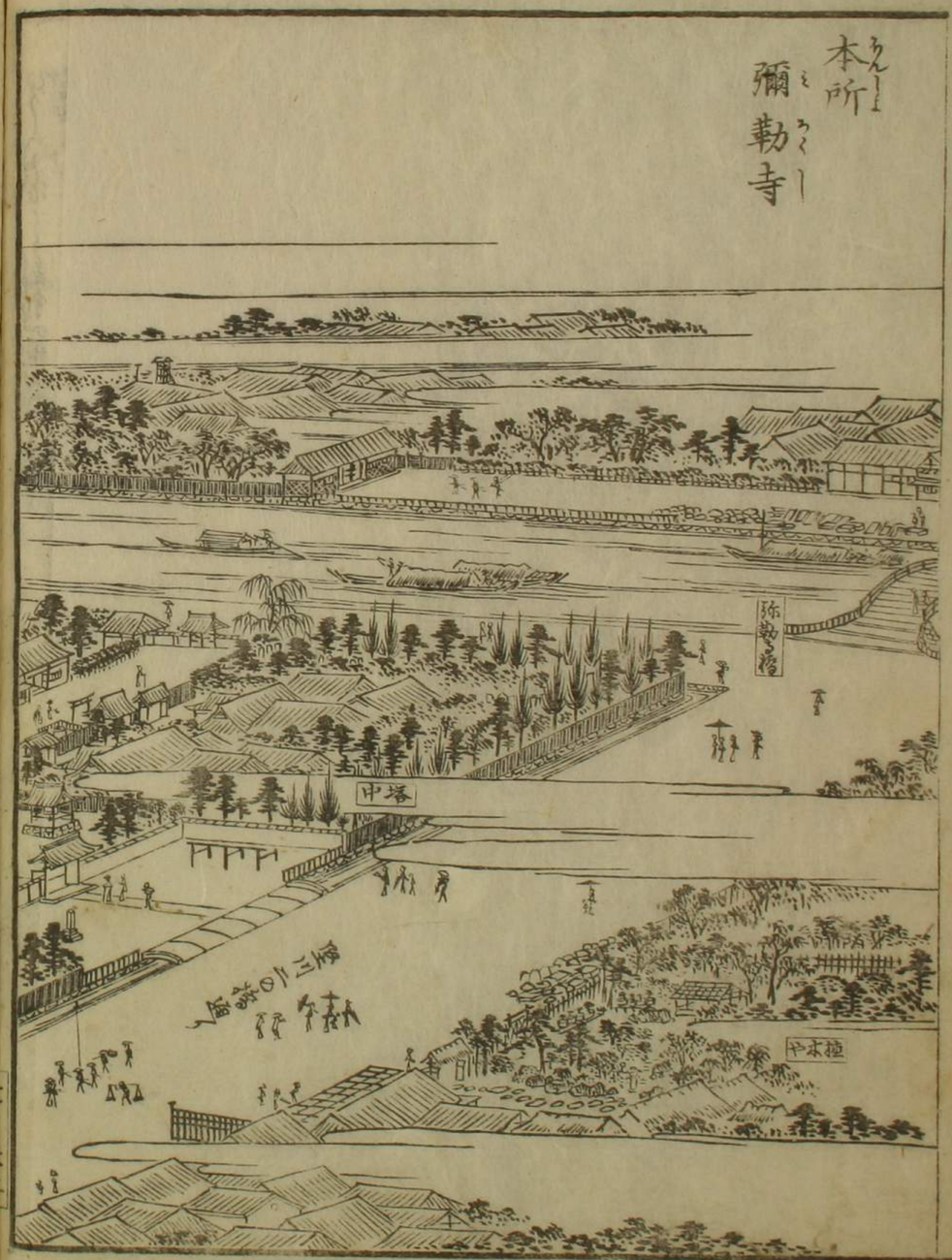
萬德山彌勒寺 日野二丁目まりを隔て弥勒寺橋の北詰にあり真言新

義の觸頭江戸四箇寺の一室なり本尊八藥師如来

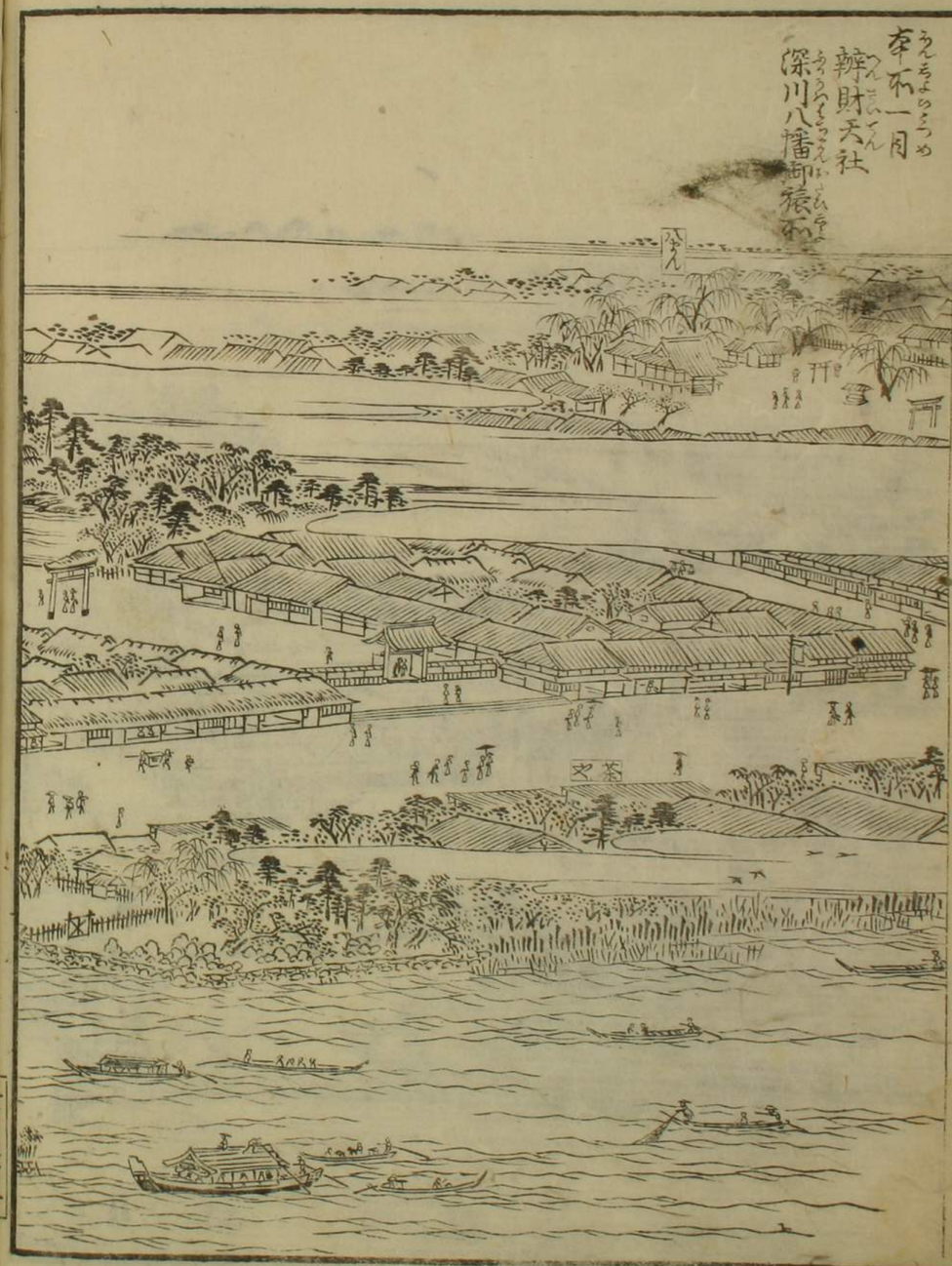
中興開山成肯鏡上人と共に總門の額に弥勒寺と書せり朝鮮

國雪月堂の筆跡なり當寺日野柳原の地にありしを天和二年田祿

中塔
本堂
大方


本所
彌勒寺
中塔
弥勒堂
植木や

茶屋
金ひら
茶院料


えちごやこうめ
本所一目
辨財天社
ふかがわやはちまんぐう
深川八幡宮
茶屋

の後此地へ移されたり毎月八日十日を祭日として参詣多し

深川八幡宮御旅所　大川端大船倉の前よりあつて富賀岡八幡宮祭

禮の砌八神輿此地へ渡らせらるる

辨財天社　同所一の橋の南の詰よりあり祭所相別江嶋より同じ元禄

の始惣換校松山氏勧請と已の日参詣多し

相伝ふ松山換校い奥別の志天王社をのさんうとを後〜三七日の写飲食を断て相別江嶋より天女崎より参詣

至りよ其ゆを祈請せに果て霊験あるとなり　京都とりかその

松山流といふ慶安の頃　台命を蒙り霊嶽中に移れ尼近と云ふ禄のうち今の池二丁四方

を湯ひ聲者の總帰とあさしめられるとなり京師より清聚庵の池たりなどをいて

一流の親矩傳つまり毎年二月十六日六月十九日あ、聲者宝前よ集舎して琵琶を弾し平曲を

奏し京師祇園会ふるまつて行ふあるなり

國豊山同向院　両國橋の東詰よあり

昔ハ此辺も柳鳥の中よりて大西と称つたる由事跡合考とある冊子よりも

称念上人の遺風ゆ〜て捨世一汎の佛域たり明暦三年丁酉の春大火

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎年七月七日大施餓鬼法會を

修行と又月八日佛餉施入の檀主現當両益の法ゆ多し總門の額

又國豊山とあるハ縁山定月和尚の筆なり

本堂　本尊阿彌陀如来座像壹丈許あり

胴の阿弥陀仏縁ハ名ゆ高る第四世観誉上人祐盛和尚ゆ〜ひ今の本尊を造立と堂あり存する

不の胴像の清ゆをひて本尊ととの堂むゆハ今の方丈の北よりあり〜を天和二年四月の後始る

第二世唱霊和尚の

備中千體阿弥陀如来

後堂ゆ安置と俗称して奥の院とゆ

地よりうつされたりといふ

本尊と同體なりとゆ縁山三十三世の貫首遵誉貴屋上人念仏ゆて明暦の大火焼死

溺死せる不の十萬八千餘人の亡者を回向ゆる八代首

命ぜられ其頃

官府より假の佛堂を造営

せりあたまひしゆ六の霊像を本尊とゆて回向ゆ〜ひしと

三佛堂　本堂の右よあり弥陀観世大日

等の三尊を安置と堂あり其首建立

ゆ〜ひ焼死溺死の亡魂得脱の如来とも称

寛延年間

彫刻られてあり当寺ゆ小石川の市街を巡行

建立ゆ〜たまひ堂内の石塔婆ゆ其首建立を

字元刑死の者の幽魂追福のため方治年間

佛餉を乞ひの僧徒十六口常ゆとの堂中ゆ居住

ひとことゆ南都招提寺より迎ゆとの有信の

一言観音　沈の傍よあり本尊観音恵心僧都の作なり

其祈願一言ゆて成就ゆる故ゆ霊應の著を

表〜〜

辨財天祠　日本よあり世ゆ稀ゆ畏敬ゆ才天と称と昔尚寺の開山上人勤行念仏の

〜〜法大師の作ゆ〜ゆ推知〜新ゆ佛餉を

馬頭観世音

幕十　佛慈愛の名馬塑〜

剛剥〜小刻を宮〜尚ゆの護法神とあ〜ゆ

ゆ〜あられませたゆ〜ひ尚ゆ〜ゆ

圓光大師堂　日〜あらひ〜ゆ

台命ゆ〜〜ゆ〜〜宛山上人る改記

播列宝ゆ

拝女某ゆ〜ゆ〜〜て作りたまゆ〜ゆ

其後彼拝女

さをつるねて全身を造りたりとゆ〜ゆ

拝女ゆ〜ゆ〜ゆ七十五歳ゆて大往生

を遂たり

蓮池　信誉上人常ゆ蓮実をゆて念珠ゆ代て称名と其蓮実の積るゆ三十五ゆ

〜と

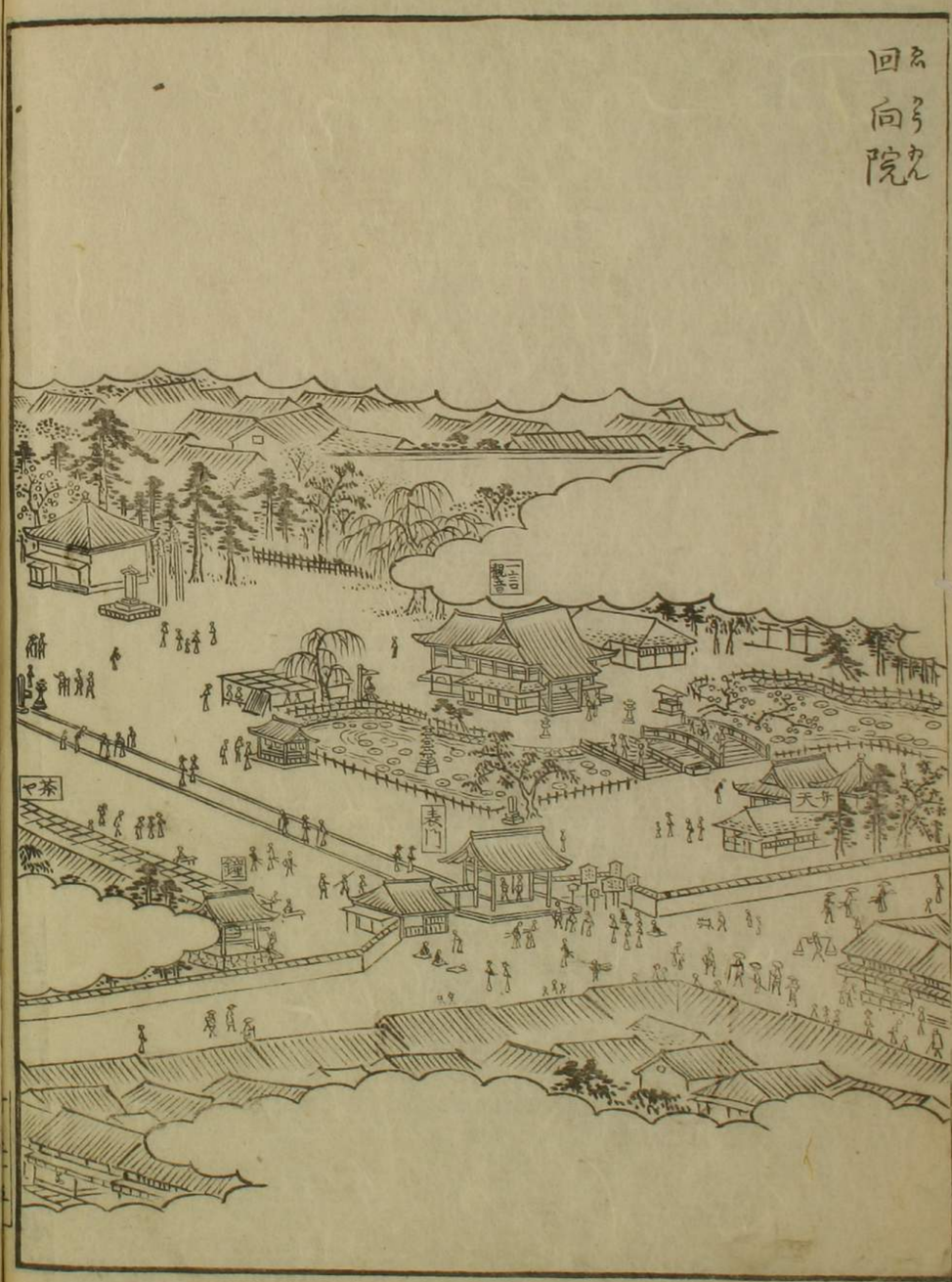
樟　是も信誉上人手自植られ〜

とて日〜池のうちにあり

阿弥陀如来銅像　本堂の西面よあり

坐像一丈六尺あり

不見烟中寺
但聞烟外鐘
江城秋色遠
落日隱高峯
白石



回向院

諸国の霊仏霊神等結縁の為
大にぎわひ
啓金龍せんと
欲るるの多くい
回院に於て
結せしむ仮方
うり使りうき
比るる故
殊に
糸請
多し

回向院開帳条

相傳明暦三年丁酉の春正月十八日十九日大江戸大火に仍て焼死する者凡十萬八千餘人なり時に台命ありて此地をトして方六十許歩の地に件の焼死骸を埋藏し上に一堆の塚を築き號けて漏澤園と唱へ乃亡魂追福の為増上寺第二十三世貴屋大和尚代に一宇の梵刹を創基せしめらる當寺是なり

黄檗の諸宗山惣寺とのみとなる

此暦大火の事実録に詳なり

諸宗の僧を集め一七日の間塚の前に於て千部の経を讀誦せしめ大法會執行ありされども住持なりしに其頃小石川智香寺の信誉自心上人道光世に隱れなきを當寺に招住せしめ第二世とし向山と称し此上人彼塚上小堂宇を建營し長く幽魂の冥福を助むる為不断念佛の道場とせらるる

刹に髪髢たり當院に安置する所の佛像い悉く此上人の彫造なりと云り

因に云信誉上人佛像を造るに小形を得て恵心僧都の彫

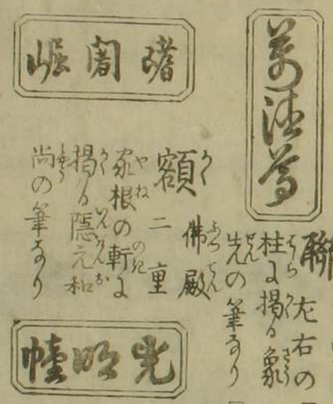
天恩山五百大阿羅漢禅寺　本所五目竪川より南にあり黄檗派の禅林にして河東第一の名藍たり向山の獄眼禅師中興の象先和尚又

猿江泉源寺の池に生ずるところの蓮花の重瓣紅花すべて花瓣牡丹に髪髢たり故に奇観と称し寛政九年の晩春

この花を愛しむ
今に至り
年々に
ちるり

猿江
摩利支天祠
霊験炳然とそ
信人常に絶ゑ
来由は拾遺江戸
名所記に詳なり

松雲禅師を以開基の大祖と称ス
佛殿 本尊釋迦牟尼佛拈華像 長一丈六尺 下に巨石を 畳く 坐を 倣く 脇士 文殊
普賢 八尺 阿難 迦葉 各高 九尺 左右の階壇に列ル所の五百阿羅漢
の像は各等身にして共に松雲禅師彫刻する処なり
額 本尊の上に掲る 黄檗隠元老人の筆なり
額 堂内の正面に掲る 黄檗即非の筆なり
額 佛殿二重 宗根の軒に掲る 隠元和尚の筆なり
額 同堂内 左右の柱に掲る 象先の筆なり



一百羅漢造立之来由
松雲禅師は京兆の人寛雄にして正信を具し
佛法に俗物を 寛文九年己酉 歳十二 摂の端龍精舎に入て鐵眼禅師に
隨ひ薙髪して僧となる後游方の懐のよろし師の許を辭して

をなきの
小名木川
五本松

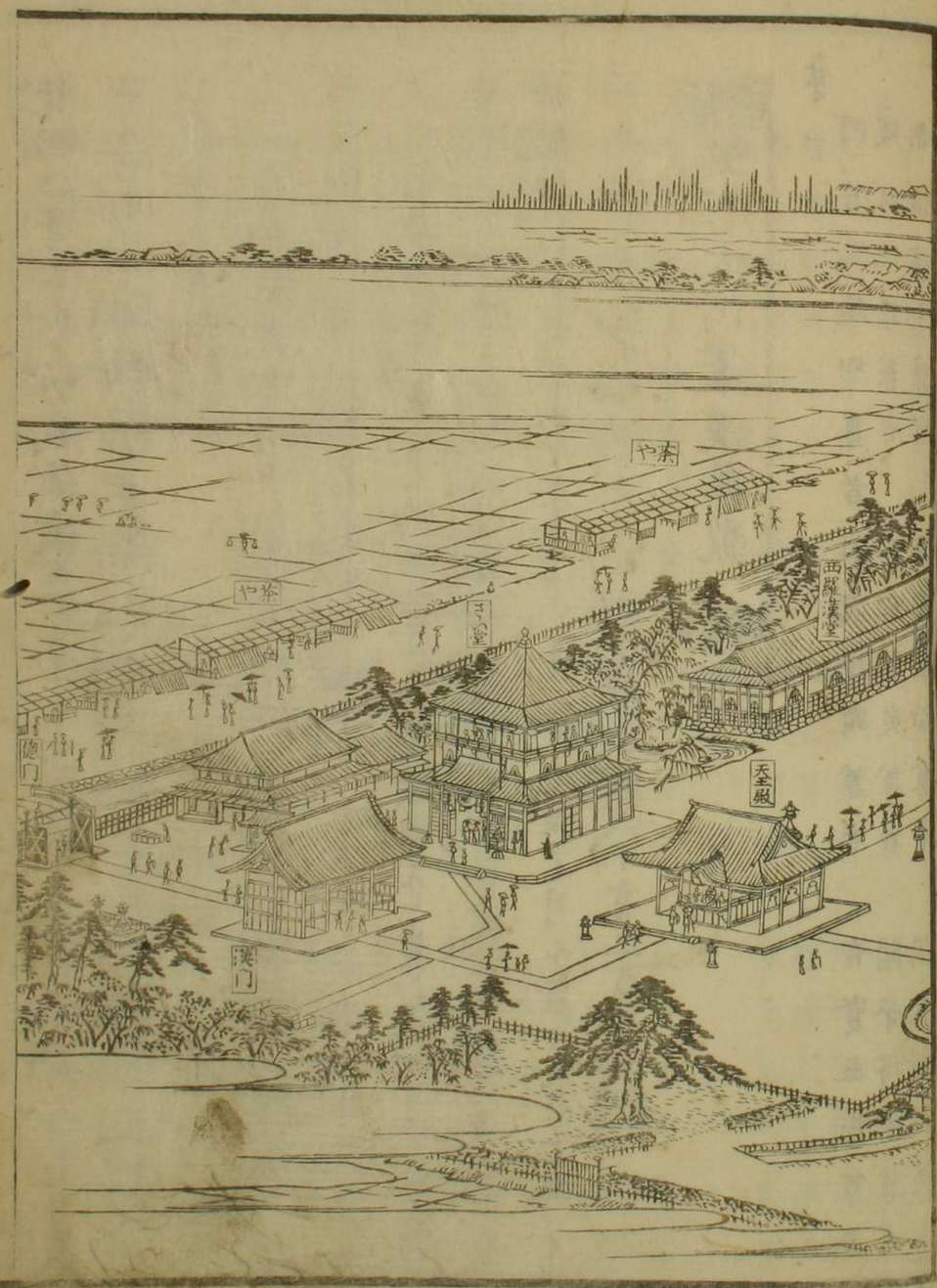
深川の末
五本松とや
舟を
さして

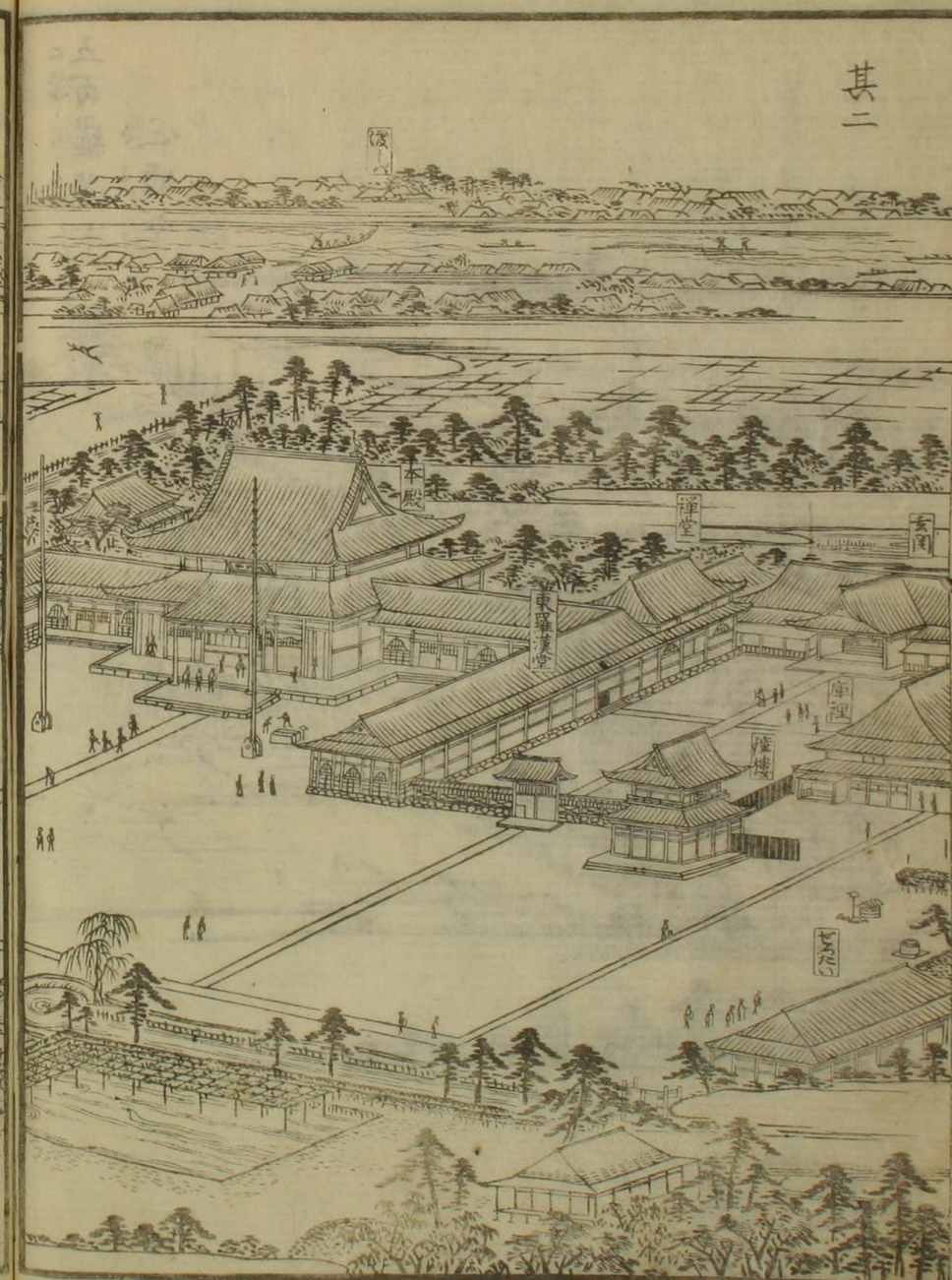
川上を
この
うをしもや

月の
友

芭蕉

海西小飄歴〻豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並び賢順といへる二僧一夜に造立せりといへる五百聖者の石像を瞻禮し恭敬日〻小厚く其後潮に五百羅漢の像を手彫せんとすの意あり歸省の日鐵眼禅師果して其命あるを以遂に貞享年間江戸小未り元禄辛未始て淺草寺の境内壽松院に就て假屋を設け衆人をさそめ羅漢の木像を彫刻せ弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜捨し一尊を刻まむとせしに時至りて施あるの微〻たる歳月を歴たりを鉦る小同壬申の年大倉前一十六負の道俗結盟輔佐せ癸酉孟春に至り五十尊成甲戌三月朶も御國母桂昌一位尼公金を湯に佛像造立の資とるるの此時十尊我彫嘗せるの比より縁化響の愈〻るる如く施財日〻小多く竟に一十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及ひ阿羅漢等せくて五百三千有餘餘の佛像縹緲〻て現せ其


茶や
茶や
西蓮華堂
天王殿
陽門


其二
後人
本殿
禪堂
玄関
東蓮華堂
庫裏
僧堂
客殿

梵相の奇古坐立の威儀儼然として生ける如く其妙手常人のをよ
さる所あり瞻禮する者をして靈山一會未散の嘆あらしむ日八年
乙亥夏五月 鐘の銘より 七月とも 以聽小達一本境一千五百畝を湯ひ
又天恩山羅漢寺の号を湯に依假して堂宇を造立して佛像を遷
せり同年八月黄檗高泉和尚偶東行あり遂て點眼の導師とせ
又先師鐵眼和尚をして開山祖とせ是其原を貴むの故なり又其時
黄檗山の未寺となる松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありとい
時緣至りて宝永七年庚寅一旦疾よ罹て月を越て起を絶て
同年秋七月十日奄然として化せ時よ歳六十有三なり 法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號

第一
阿若憍陳如尊者 有賢無垢尊者
須跋陀羅尊者 迦留陀夷尊者 聞聲得果尊者
栴檀藏王尊者 施僮無垢尊者 憍梵般提尊者

因陀得慧尊者

第十一
迦那行那尊者 婆蘇槃豆尊者 法思四樂尊者
優樓頻螺尊者 佛陀密多尊者 那提迦葉尊者
那延羅目尊者 佛陀難提尊者 末田底迦尊者
難陀多化尊者

第二十一
優波毱多尊者 僧迦耶舍尊者 教説常住尊者
商那和修尊者 達磨婆羅尊者 迦耶伽葉尊者
定果德業尊者 莊嚴無憂尊者 憶持因緣尊者
迦那提婆尊者

第三十一
破耶神通尊者 堅持三字尊者 阿寃樓駄尊者
鳩摩羅多尊者 毒龍飯依尊者 同聲聲首尊者
毘羅昵子尊者 伐蘇密多尊者 闍提首那尊者
僧法耶舍尊者

第四十一
悲密世間尊者 獻花提記尊者 眼光定力尊者
伽耶舍那尊者 莎底莎蔕尊者 婆闍提婆尊者
解空無垢尊者 伏陀密多尊者 富那夜舍尊者
伽耶天眼尊者

第五十一
不著世間尊者 解空第一尊者 羅度無盡尊者
金剛破魔尊者 額蘿世間尊者 無憂禪定尊者
無作慧善尊者 牛刻慧善尊者 栴檀德香尊者
金山覺意尊者

第六十一 無葉宿盡尊者 摩訶刹利尊者 無量本行尊者

第七十一 一念解空尊者 觀身無常尊者 千劫悲願尊者

第八十一 畢陵伽蹉尊者 摩訶薩陀波崙尊者 乾陀訶利尊者 解空自在尊者

第九十一 摩訶俱絺羅尊者 佛塵三昧尊者 周利槃特尊者 見人飛騰尊者 不空不有尊者

第百一 除憂尊者 妙懼尊者 雷德尊者 馬頭尊者

第百十一 善注尊者 具壽俱提尊者 思惟尊者 修行不著尊者 比丘尊者 師子比丘尊者

方便法藏尊者 觀行月輪尊者 七佛難提尊者 利不動尊者 阿那邠提尊者 金剛精進尊者 三昧耳露尊者

解空定空尊者 聖道精進尊者 堅固精進尊者 瞿沙比丘尊者 成就因緣尊者

第百二十一 馬勝尊者 自淨尊者 調達尊者 實憧尊者 善慧尊者 寶見尊者 寶勝尊者 明綱尊者 寶光尊者 修道尊者 持世尊者 善思尊者 泫眼尊者 直意尊者 無勝尊者 遊戲尊者

第百六十一 道世尊者

明首尊者 衆首尊者 悟達尊者 境界尊者 金首尊者 辨德尊者 泫燈尊者 天尊尊者 不動尊者 普光尊者 善眼尊者 慧積尊者 道仙尊者 善調尊者 大相尊者 光英尊者 梵勝尊者 摩帝尊者 曇摩尊者

第百四十一 敬首尊者 屠提尊者 離垢尊者 無勝尊者 休息尊者 智積尊者 勇寶尊者 慧持尊者 帝綱尊者 奮迅尊者 善住尊者 權教尊者 光曜尊者 慧寬尊者 歡喜尊者

明照尊者 普等尊者

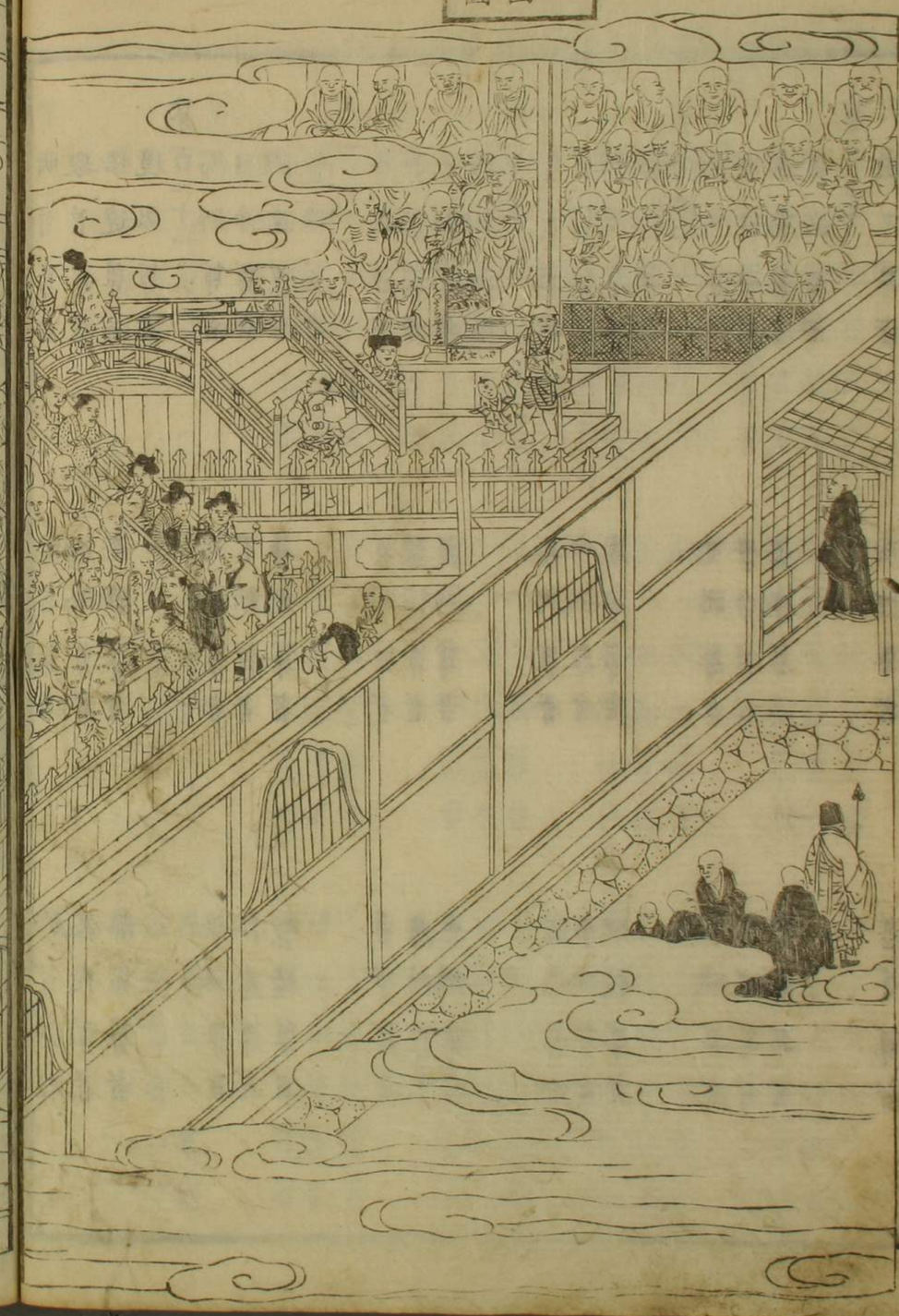
一裏

第百十一 大忍尊者 嚴土尊者 雷音尊者 泫王菩提尊者 辟支賓覆藏尊者 切轉智尊者 山項龍聚尊者 神通億具尊者 泫藏永切尊者 無憂自在尊者 金髻尊者 香象尊者

五百羅漢堂
内相之圖
共五枚

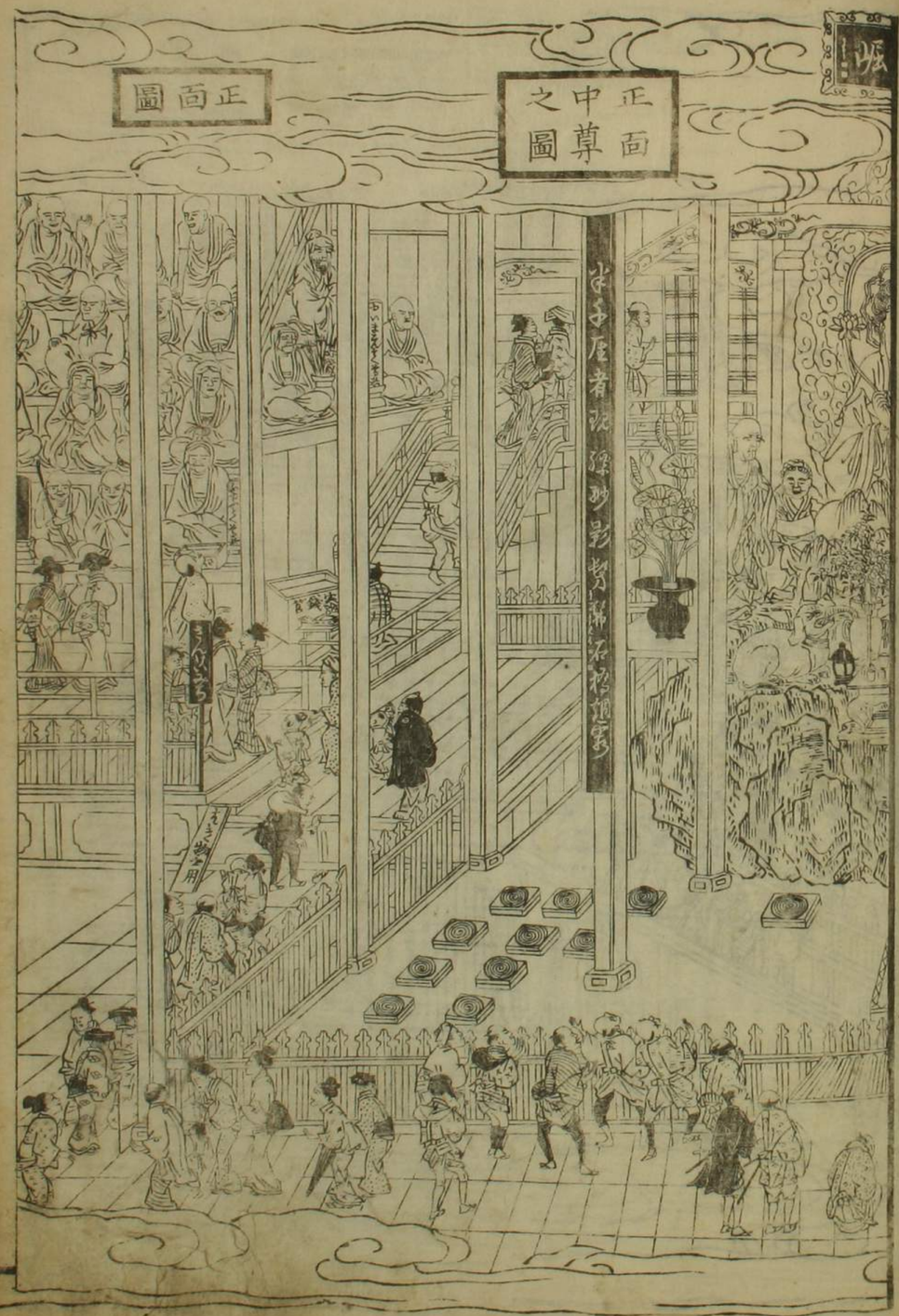
東羅漢堂東面之圖

正面圖



正面圖

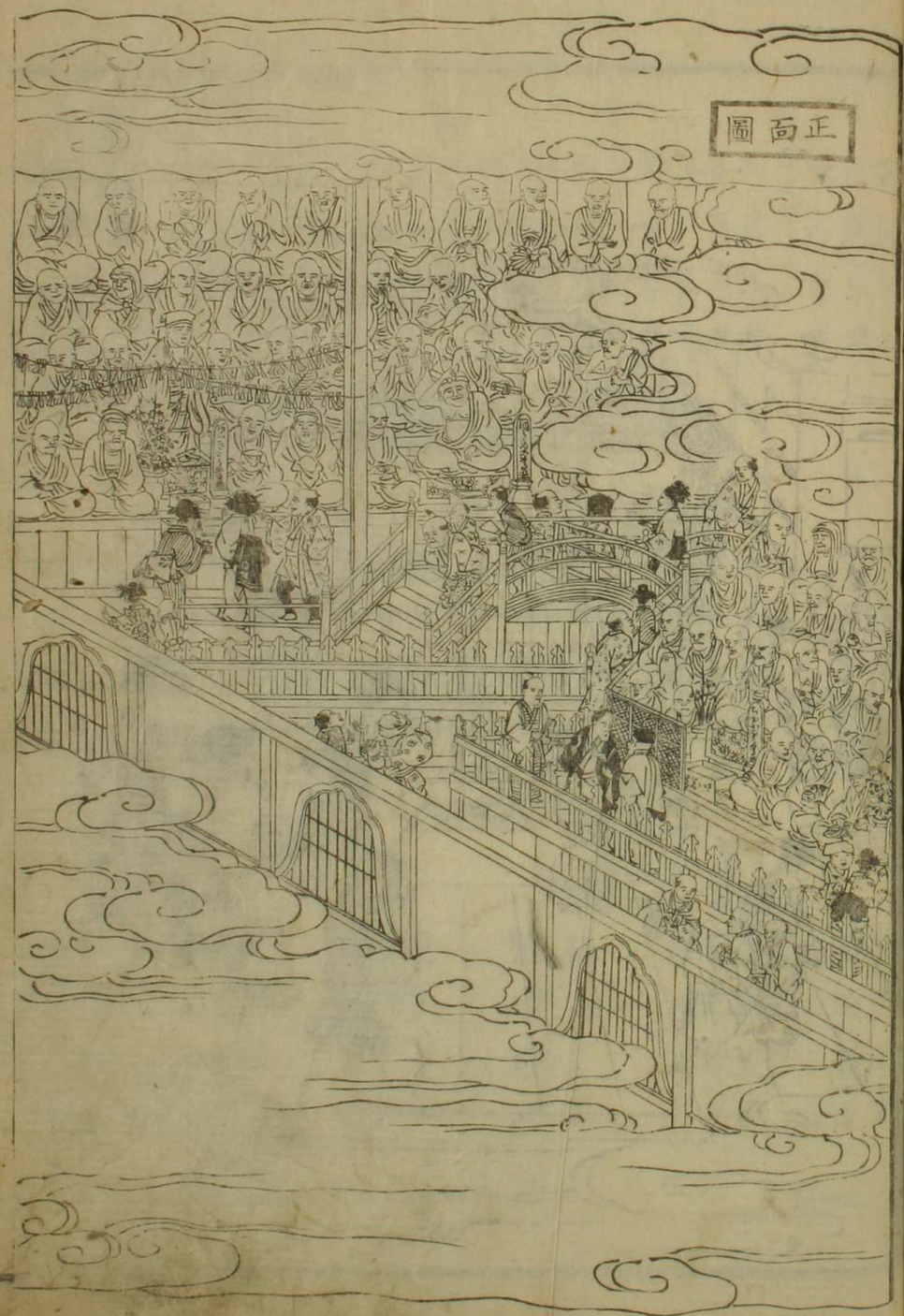
東漢西之
羅堂面圖

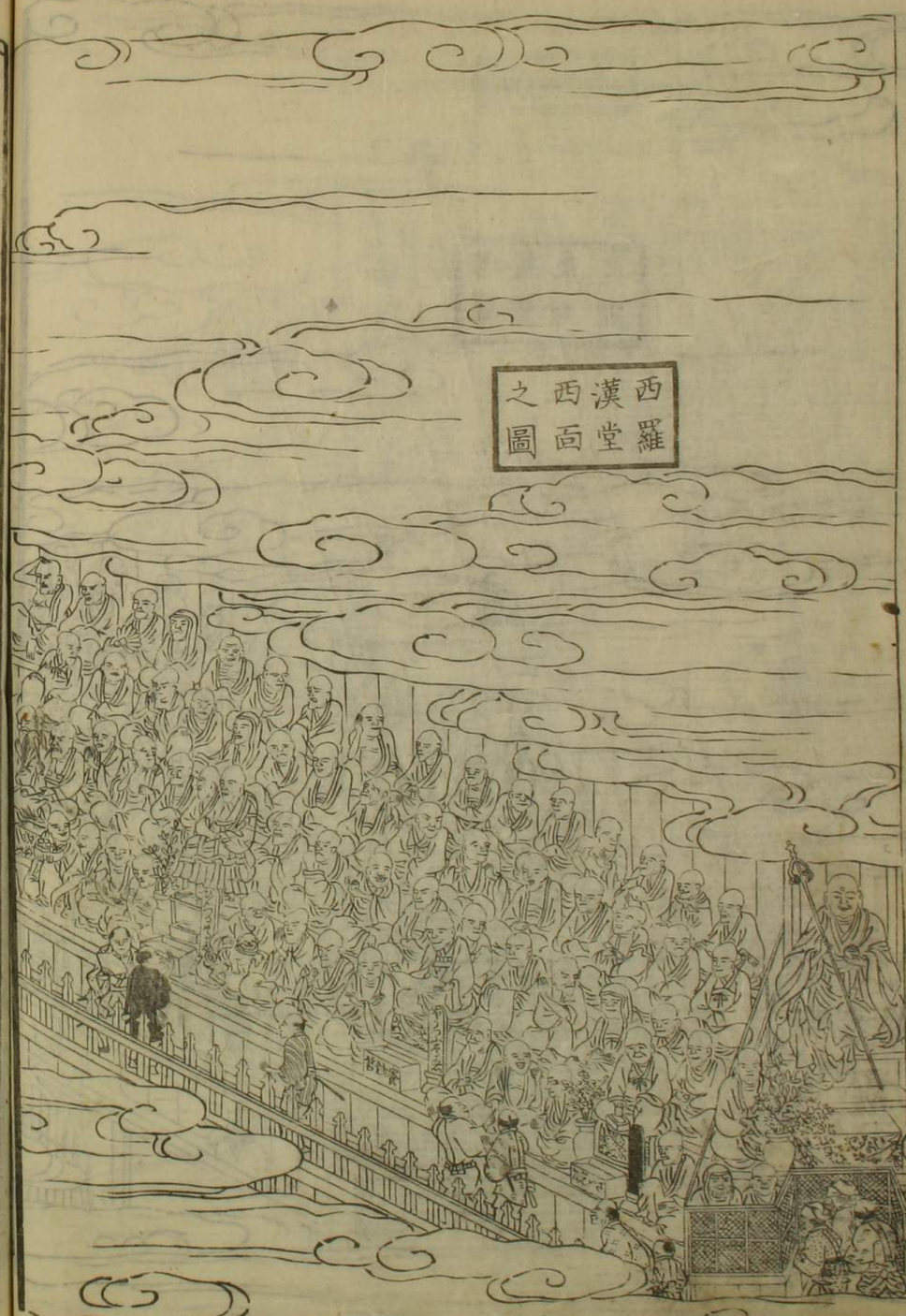

正面圖
正中面之尊圖

正面圖

西羅漢堂東面之圖

正面圖


正面圖


西羅漢西堂西面之圖

慧作尊者　助歡喜見尊者　難勝尊者
善德尊者　寶涯尊者　觀身尊者
花王尊者

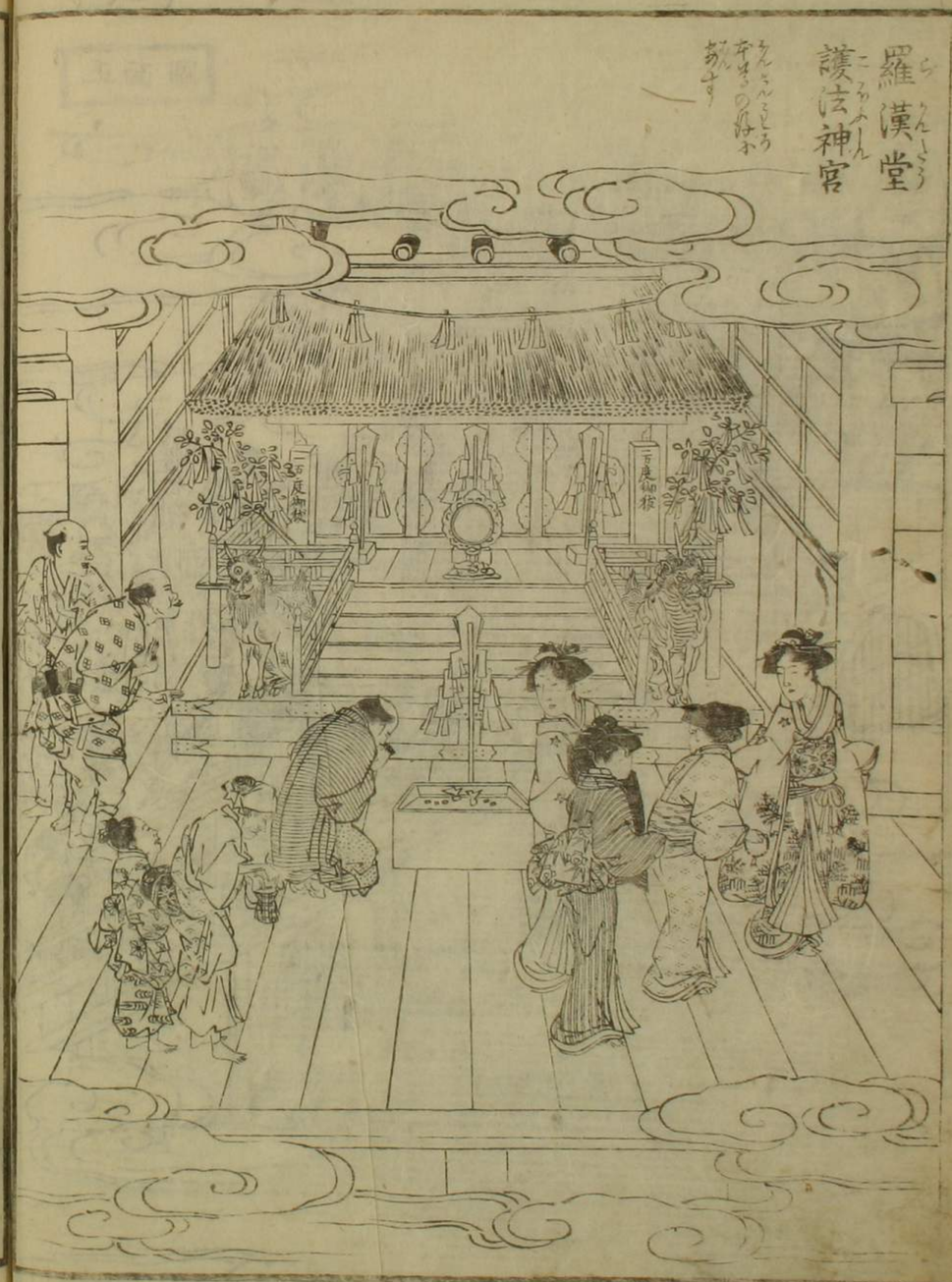
第百七十一
德首尊者　喜見光尊者　善宿光尊者
善意尊者　愛光尊者　花光尊者
善見尊者　善根尊者　德項尊者
妙臂尊者

第百八十一
龍盌尊者　弗沙淨尊者　德光尊者
散結尊者　慈地尊者　善觀尊者
大力尊者　滿宿尊者　賢伏尊者
善星尊者　大天尊者

第百九十一
羅旬尊者　倶吉祥兄尊者　慶友尊者
世友尊者　那含尊者　闡陀尊者
月淨尊者　首尊者　淨藏尊者
淨眼尊者

第二百一
波羅密尊者　三昧聲尊者
菩薩聲尊者　鉢多羅尊者
無邊身尊者　金剛味尊者
來味尊者

第二百十一
婆私吒尊者　不可比尊者
樂覆藏尊者　頗羅墮尊者



斷煩惱尊者　薄俱羅尊者　利婆多尊者

第二百二十一
寂勝意尊者　彌沙塞尊者　須彌燈尊者　善圓滿尊者　楠檀藏尊者

第二百三十一
阿濕卑尊者　利婆彌尊者　摩尼寶尊者　舍遮獨尊者　乾陀羅尊者

第二百四十一
持善法尊者　歡喜智尊者　須彌望尊者　提婆德尊者　尼耶伽尊者

第二百五十一
智慧海尊者　彌遮仙尊者　淨菩提尊者　梵音天尊者　精進山尊者

第二百六十一
曼殊行尊者　衆和合尊者　如意輪尊者　因地果尊者　無量光尊者　阿逸多尊者　阿利多尊者　法無住尊者　首光燄尊者

多伽樓尊者

第二百七十一
利婆多尊者　威德聲尊者　阿那悉尊者　行化國尊者　普賢行尊者　利婆多尊者　普勝山尊者　持三昧尊者　名盡尊者　財王尊者

第二百八十一
聲龍種尊者　行傳法尊者　光普現尊者　首飲光尊者　誓南山尊者　香金手尊者　慧依王尊者　冨伽耶尊者　摩訶羅尊者　降魔軍尊者

第二百九十一
持大醫尊者　眼龍王尊者　義法勝尊者　汪住道尊者　藏律行尊者　闍夜多尊者　施婆羅尊者　德奈摩利尊者　闡提魔尊者　自在尊者

第三百一
無垢行尊者　禪定果尊者　達磨眞尊者　心勝修尊者　可波羅尊者　不退法尊者　持善法尊者　聲皈依尊者　僧伽耶尊者　受勝果尊者

第三百十一
會法藏尊者　頭陀僧尊者　無垢藏尊者　金冨樂尊者　常歡喜尊者　護洗腸尊者　降魔尊者　威儀多尊者　德淨怡尊者　阿僧伽尊者

第三百二十一
頻恰尊者　周陀婆尊者
燈導首尊者　住世間尊者
須達那尊者　甘蔗泫尊者
十慈眞尊者　自在王尊者

第三百三十一
堅固心尊者　聲響應尊者　應赴供尊者
塵劫空尊者　光明燈尊者　執寶炬尊者
功德相尊者　忍生心尊者　阿氏多尊者
白香象尊者

第三百四十一
戴自生尊者　讚歎願尊者　定拂羅尊者
聲引衆尊者　離淨誥尊者　鳩舍尊者
鬱多羅尊者　福業除尊者　羅餘習尊者
大藥尊者

第三百五十一
勝解空尊者　修無德尊者　喜無著尊者
月蓋尊者　摩羅檀尊者　心定論尊者
菴羅滿尊者　項生尊者　薩和壇尊者
直福德尊者

第三百六十一
須那刹尊者　喜見尊者　韋藍王尊者
提婆長尊者　成大利尊者　泫首尊者
蘇頻陀尊者　衆德首尊者　金剛藏尊者
瞿伽梨尊者

第三百七十一
日照明尊者　除垢尊者　除擬網尊者
無量明尊者　除衆憂尊者　無垢德尊者
光明網尊者　善修行尊者　坐清涼尊者

第三百八十一
無憂眼尊者　藏尊者　自明尊者　和倫調尊者
去蓋障尊者　去諸業尊者　慈仁尊者
淨除垢尊者　蜨陀尊者　那羅達尊者
無盡慈尊者　怒尊者
行願持尊者

第三百九十一
天眼尊者　無盡智尊者　編貝足尊者
寶蓋尊者　神通化尊者　思善識尊者
喜信靜尊者　摩訶南尊者　無量光尊者
金光慧尊者

第四百一
伏龍施尊者　幻化空尊者　金剛明尊者
蓮花淨尊者　拘那意尊者　賢首尊者
利亘羅尊者　調定藏尊者　無垢稱尊者
天音聲尊者

第四百十一
大威光尊者　自在主尊者　明世界尊者
最無上尊者　金剛尊者　燭慢意尊者
最無比尊者　絕倫尊者　月菩提尊者
持世界尊者

第四百二十一
定花至尊者　無邊身尊者　最勝幢尊者

棄惡法尊者　無礙行尊者
無盡慈尊者　常悲愍尊者
光焰明尊者　普莊嚴尊者
大塵障尊者

第四百三十一
智眼明尊者　堅固行尊者
不動羅德尊者　普光明尊者
那羅德尊者　師子尊者
精進辨尊者　澍雲雨尊者
心觀淨尊者　法上尊者

第四百四十一
樂說果尊者　觀無邊尊者
破邪見尊者　無憂德尊者
慧金剛尊者　義成就尊者
信證尊者　師行無邊尊者
善住義尊者

第四百五十一
行敬端尊者　德普洽尊者
行忍慈尊者　無相空尊者
勝清淨尊者　有性空尊者
法自在尊者　師子勇猛尊者
淨那羅尊者

第四百六十一
師子頻尊者　大賢光尊者
音調敏尊者　師子臆尊者
分別身尊者　淨解脫尊者
智仁慈尊者　摩訶羅尊者
壞魔軍尊者
質直行尊者

第四百七十一
具足儀尊者　如意雜尊者
却賓那尊者　普燈光尊者
大熾妙尊者
高遠行尊者

得佛智尊者　寂靜行尊者
破宛賊尊者　怡真常尊者

第四百八十一
滅惡趣尊者　性海通尊者
慾不息尊者　摸衆心尊者
常隱行尊者　菩薩慈尊者
尋聲應尊者　法通尊者
導大衆尊者
拔衆苦尊者

第四百九十一
數却定尊者　法水尊者
慧廣增尊者　六根盡尊者
思薩埵尊者　注茶迦尊者
願事衆尊者　得定通尊者
拔度羅尊者
鉢利羅尊者
目揵連尊者
以上第五百竟　迦旃延尊者

十大第子
大迦葉尊者　舍利弗尊者
阿那律尊者　須菩提尊者
阿難陀尊者　富樓那尊者
優波離尊者　羅睺羅尊者

十六阿羅漢
賓度羅跋囉墮闍尊者　迦諾迦跋黎墮闍尊者
諾矩羅尊者　跋陀羅尊者
伐闍羅尊者　蘇頻陀尊者
多羅尊者　戍博迦尊者
羅怙羅尊者　那伽犀那尊者
婆斯尊者　因揭陀尊者
伐那婆尊者　迦諾迦伐蹉尊者
迦理迦尊者
半羊諾迦尊者
注茶半託迦尊者
阿氏多尊者
以上十六竟

三帀堂　経門の内左の方天王殿より白衣観音奥院観音をうつし孫陀勢至
観音の霊験を模擬して百躯の彩色をなすこと一繞い西國中繞い坂東十繞い秩父巡上百番の札所
當寺中興衆先和尚工夫を凝し全上の法式い右繞三帀より最勝第一と称すること意を
とりて寛保元年辛酉冬を造立せられたり右繞三帀堂を造の規範とも其機巧称するに堪さり
俗間呆螺堂と唱へ後世三帀堂を造の規範とも其機巧称するに堪さり

額　向拝の内に掲る當寺雪村和尚の筆なり

吟繞三帀堂

額　同堂の二階の軒に掲る當寺衆先和尚の筆なり

閻通閣

天王殿

旧呼右より並に内より紀山寺の布袋和尚護法関帝をうつし停默天昆沙門潙長老の三天をうつし
より緊那羅王の木像を安置せり各松雲禅師の作なりて享保十六年の造立なり

額　天王殿の軒に掲る當寺室列和尚の筆なり

天恩山

禁石　羅漢堂のうしにあり

剎竿　旧呼左右ともに享保十三年三月より建初るといつり

額　旧呼右の方の後にあり

禅堂

額　旧呼左の方の後にあり

遊佛場

摂待所　旧呼左にあり

額　軒に掲る細井九皐の筆なり

玄奘

藤棚　所腰掛の傍にあり元四年己未夏を栽しめたりといつり

鐘楼　庫裡の前にあり元孫九年牧野備後侯成貞の令室高祥院殿ふれを建
弘福寺の鐵牛和尚撰すり所なり

天恩山五百大阿羅漢禅寺鐘銘並引
武蔵國天恩山五百大阿羅漢寺者元祖年中沙門
松雲創建也辛未春松雲従京師來謂老僧云夫子
自幼好彫像今發志願欲刻五百應真爲衆生之福
老僧嘆曰此願甚難得成與不成必不在福縁多少
田然福菲縁微仰冀和尚慈悲運大方便俯賜冥庇
全在願心實與不實耳厥志誠實則福縁在衆生莫
慮之矣老僧應爲子發軫也遂捨衣資彫茅一尊又
勸諭瑞聖極泫筭彫一尊至癸酉孟春成五十尊請
老僧黙眼供養有震動飄雪之瑞此日経始丈六拈
華之像甲戌三月國毋桂昌院大夫人得賜金彫宮
十尊也自爾展轉勧化三五年之間其願殆乎成實
不可思議哉功既聞上乙亥秋七月遂至賜地八月
高泉和尚偶在官府請點眼供養丈六拈華之法會
黄檗丙子夏四月就新開大阿羅漢寺啓建旬日之
項禮三千之聖號普請四衆大伸供養亦請老僧
拈香凡百士庶長幼皂白皆趨赴勝會而隨喜之
豈非希世之盛事乎哉松雲者乃予之旦爲人淳朴
色若不如是馬得全這般大度百支競來絶芽無鐵疲倦和尚之
経于千古亦何遷乎茲牧野氏從四位下備前守
成貞公室氏法諱高祥院殿靈亡銘曰爲姥捨銘曰金
銅鐘成貞之日請老僧始撞之旦亡慈大姥捨別鑄大
欲鑄蒲牢鳧氏丕大千是口山河倒呑
武陵海上新創禅園
大冶鑄就響震鯨鯢

一音纔動警覺曉昏　修洪規範解塵勞煩
観音大士如入此門　回通無礙卻怨闇根
幽明莫滯功德難論　由聲生悟直證本源
存没俱利消融百億　國平民泰斯子斯孫
雲禪功烈函蓋乾坤

元禄九年丙子四月穀旦　牛頭鎌牛機謹誌

掬樹

境内よりの〳〵えぶ五年庚申掬樹九十餘株を　挑のゝ手　元文紀元丙辰
の方のこゝもよられを　當寺の境外南
載しめのことゝ

閑山堂

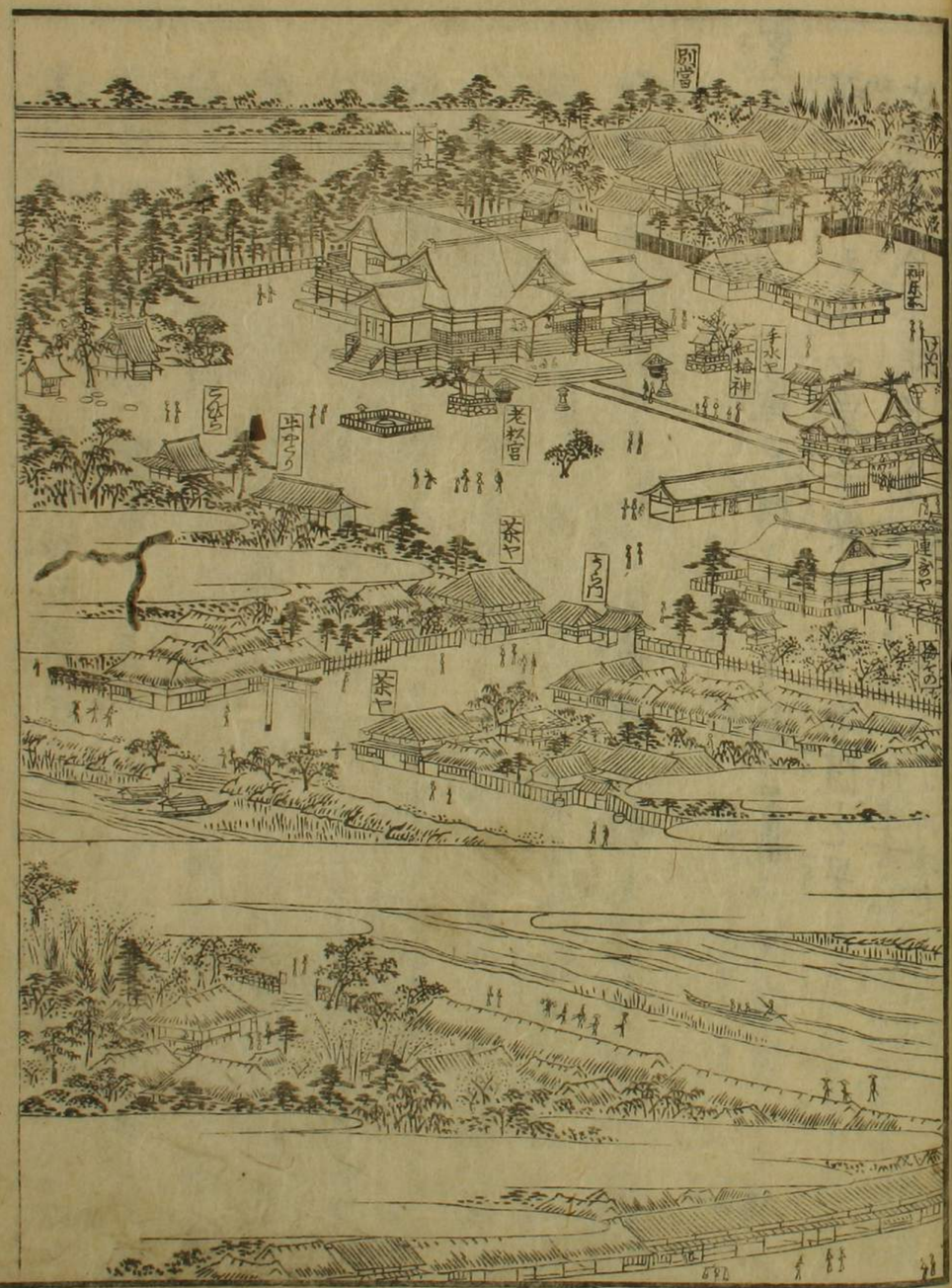
丈の東よりあり此に享保十八年の頃鐵眼禪師當寺を退玄の後
隱栖の地すゝとゝり鐵眼師をゝひ象先和尚をゝひよ松雲老人ホ
の像を置家よ三代堂とも唱へ鐵眼
禪師の行狀列祖秘寺の碑文に詳す

中興象先和尚

黄檗四世の法孫ゝして鐵眼禪師の法脈たり
當時松雲禪師化寂の後い假堂も破壞〳〵佛像も雨露の
侵されたり〳〵を深く患ゝ正德三年癸巳本師鐵眼
和尚の命を受始て大江戸よ来り當寺よ住ゝて享保二年丁酉
正月より十有餘年の間心肝を碎ゝて寒暑風雪の厭ゝ
日〳〵に麻布の街市よりて行乞〳〵既ゝて勸進の功成募財受
る所の一握一投の米錢を積て甚料に充同十年乙巳より今
存ちる所の佛殿僧房悉く建立成就せり依同十四年巳
酉二月閑堂惣供養の大法會を行ひゝて盂蘭盆の大施餓
鬼會を閑く當寺閑山い象先和尚たるゝ甚だ顯盛たり
とゝとも故ゝて鐵眼禪師を開山とゝ自の師寶刹和尚
を二代とゝ又松雲禪師創業の大功あるを以一代開基と稱〳〵
自三代の席よ坐ちる隱え禪師歸化の後い持齋一食ゝて
深く貧者をのゝれ佛像經卷と古た袈裟の外ゝい聊も
所よ貯ゝる事なゝ日〳〵の勤行ゝい般若經疏分五卷と花嚴
經行願品百五十卷とゝを讀誦〳〵觀音の尊号を書寫ゝるゝ
甚数積て山の如〳〵又大般若經一部六百卷一字百禮ゝて
是を書寫ゝ甚先出家得道の時掬樹和尚ゝ入て法道成

就の誓願を發し三年の間双手の指紙切八十巻の花嚴経を
血書し其後當寺殿堂の造営大手成といへども宗門の坐禪
夏冬の結制行れさるを関東より依後住栄朝師命
を受て文二年丁巳の冬洞海両首座を立て五千指の僧を
集め江湖の大會を行ふ此時　大樹より西園寺せられ
坐禪の行相城ゝ[illegible]則江湖の僧財として米五百俵
をたまふ丈ゝ後般若の全文を真讀して御れを救す
竟に寛延三年巳丑六月五日七十三歳にして涅槃の大定
に入貴殘香花を捧ひとはゝ来るゝ三日三夜奕暑甚
しといへども遺骸彫変る色なく茶毗して全身舎利となる
甚香根の宝塔に収て今狩
中興堂に存せり
當寺の黄檗風江戸最大の禪園にして佛閣の巍こたるゝ
月城にめしとなり元禄年間寺領山号等を賜り享保九

亀戸
宰府天満宮
當社の門前貨
食店多く名
生例を構へ鯉魚を
高く葉手間もの
此の名を[illegible]
むに美味なり


別宮
本社
老松宮
茶ヤ

其二
本社
柵
徳門

年甲辰十二月　大樹始て當寺へのぜられ其後同十五年正
月晩課　御聽聞翌年十月方丈より於隆坐住持象先曼を
勤む同十九年甲寅三千畝の地紙添あり同二十年乙卯境
内より新殿を營せられまよりの後此地より　御放鷹のあるを
かるるとて當寺へ立寄せあらるるとなれり月毎の朔日より
觀音懺法を修行し十四日より大般若經轉讀あり七月
より毎夕施餓鬼を修し十六日廿一日廿五日晦日の殊より
道俗群參を象先師より已来當寺の住持い風雨寒暑
を厭いを見ずに大江戸の市中を行乞するをもつて勤行
とせり

宰府天滿宮　亀戸村より故より亀戸天滿宮とも唱へ
別當を天原山東安樂寺聖應院と号を司務分兼宮司
大鳥居氏奉祀せり

所い當社の南竪川通北松代町四丁目にあり　祭礼の時神輿を此処より迎しまつるを
本社　祭神　天滿大自在天神　相殿　天穂日命　土師宿禰
紅梅殿　本社の前右の方にあり流前太宰府より裁を呼の赤梅の雅木あり　老松殿　社の左の方に並の花咲北野の一夜にして裁し
回廊　瑞門　回廊の四面の内をいろ左右より隨身の木像を置　御嶽社　本社の右にあり嶽山の座主法性坊なる意僧正の靈を勧請
を菅神の所へ移るとなり天文卯の日を以て鎮目とせり　清雅集せり　頓宮明神　日所よりあり昔菅神流罪の時同國板橋まで夕陽より到りたりと所伝もさ
十四前を拝殿とせり　花園社　流罪の時同
まで孤より織の家を求めさせ給へるに一の翁左近の人とて年
情の厚きを甚の老女いたるの者あて一の翁
麹の飯を松の葉より盛て捧たるに志の深きを
たり頓宮とは其老媼をさしていう老夫の縄をすて
へのの人新薦を敷て清しにてまほり
遷神　祠　日所よりあり菅神をひたすらあの河童
をあるたりという水中守護の神とも　連歌家　をひて連歌を奥行せ
延宝五年丁巳二月十二日　大樹より四　御放鷹の時此連歌家より立ようせあひしとなり
享保の頃も宮廟より彼紀を如へられたりしとなり
裏白連歌會　四月二日連歌家より若菜神供　日七日今朝より菜の餅をたくく
をひて奥行せ　二月廿五日菅神の御忌より二十四日遍夜連歌
裏行二十五日午時より五り神前より社人等梅の
面るまて毎朝宮司社人ホ神供を奉る　菜種神事

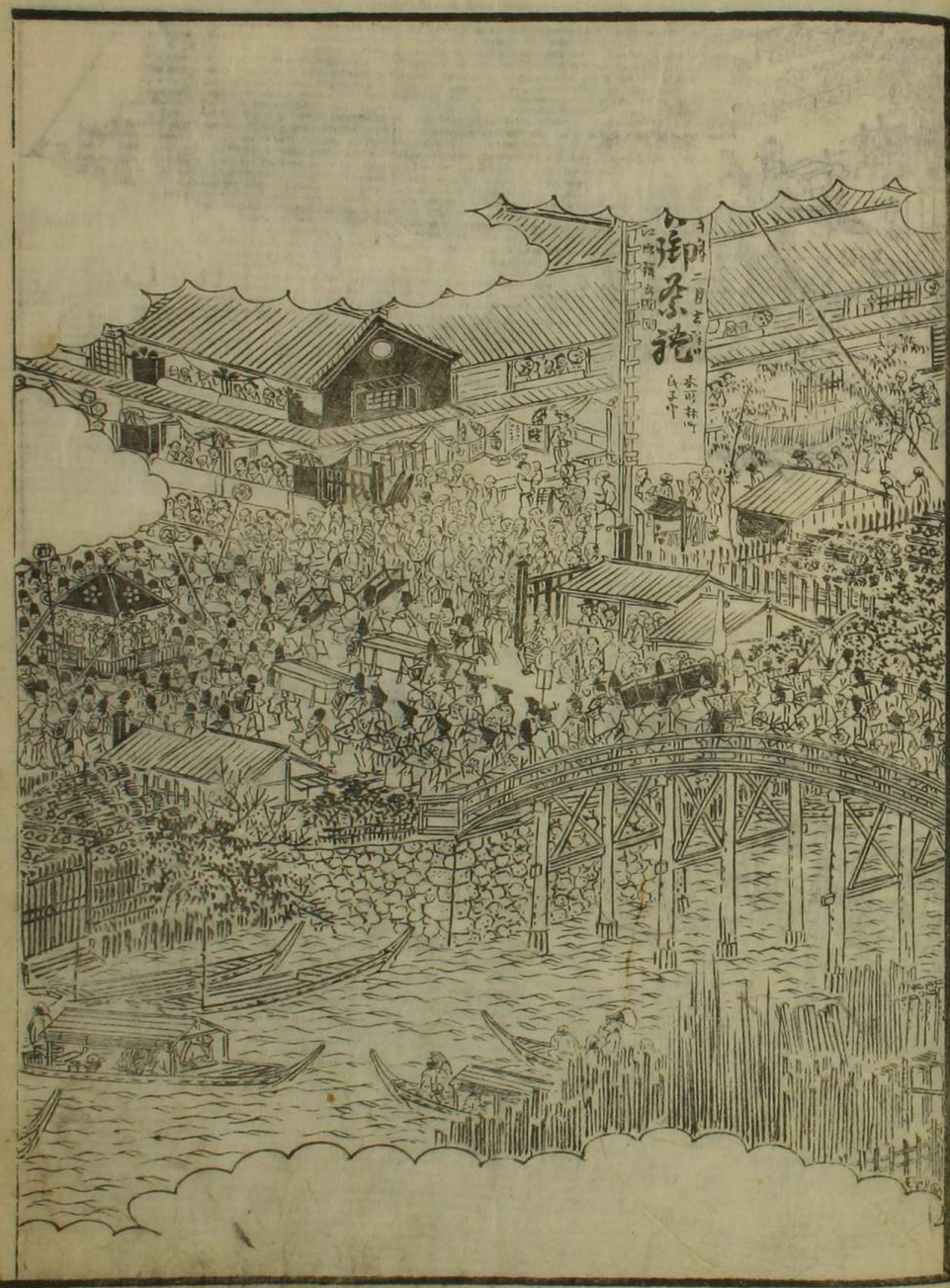
五元集

元禄十四年
二月二十五日
聖廟八百齢
御年忌於
亀戸御社詩
歌連俳令興
行一座

梅松や

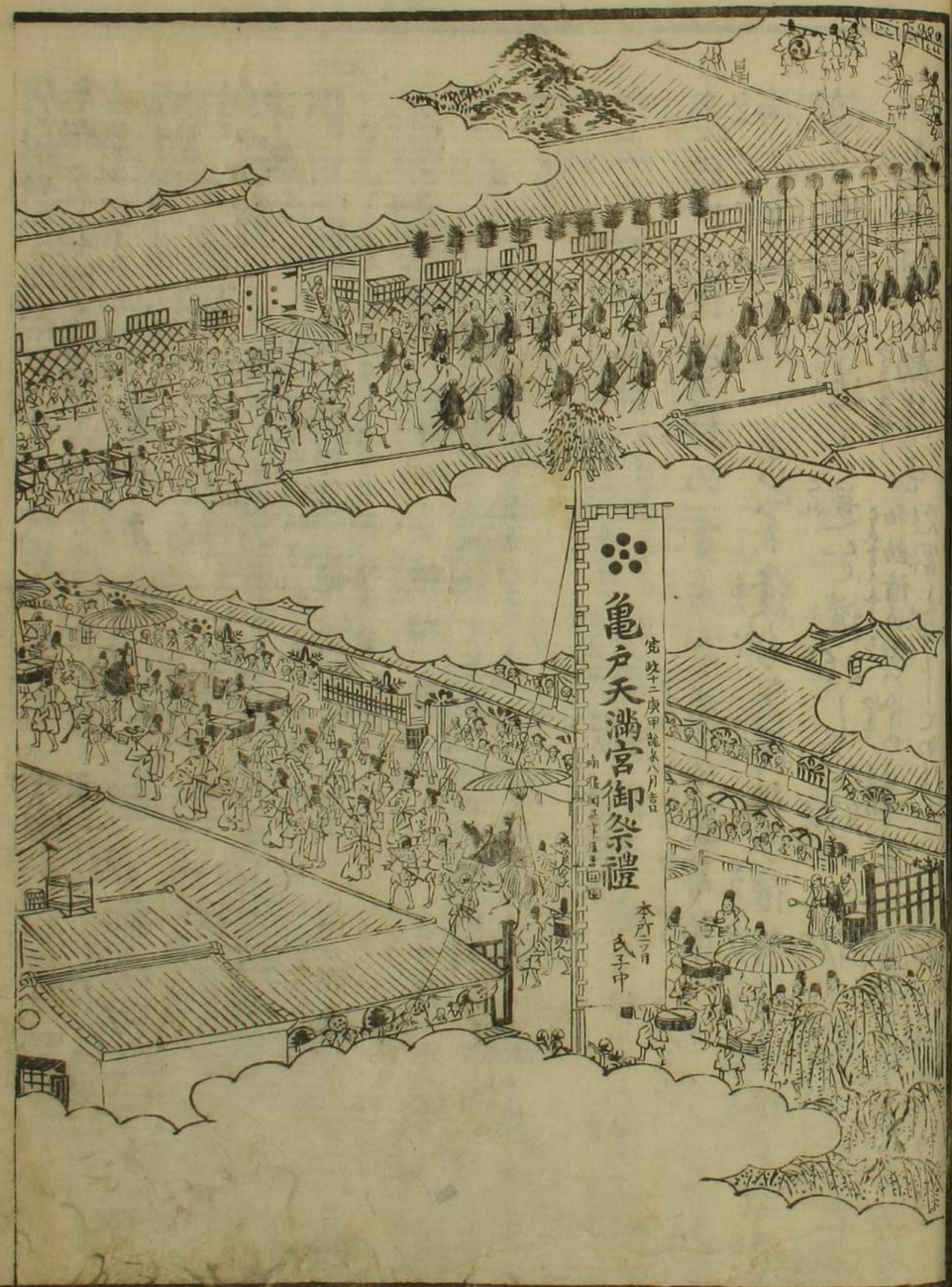
二月二十五日
菜種神事

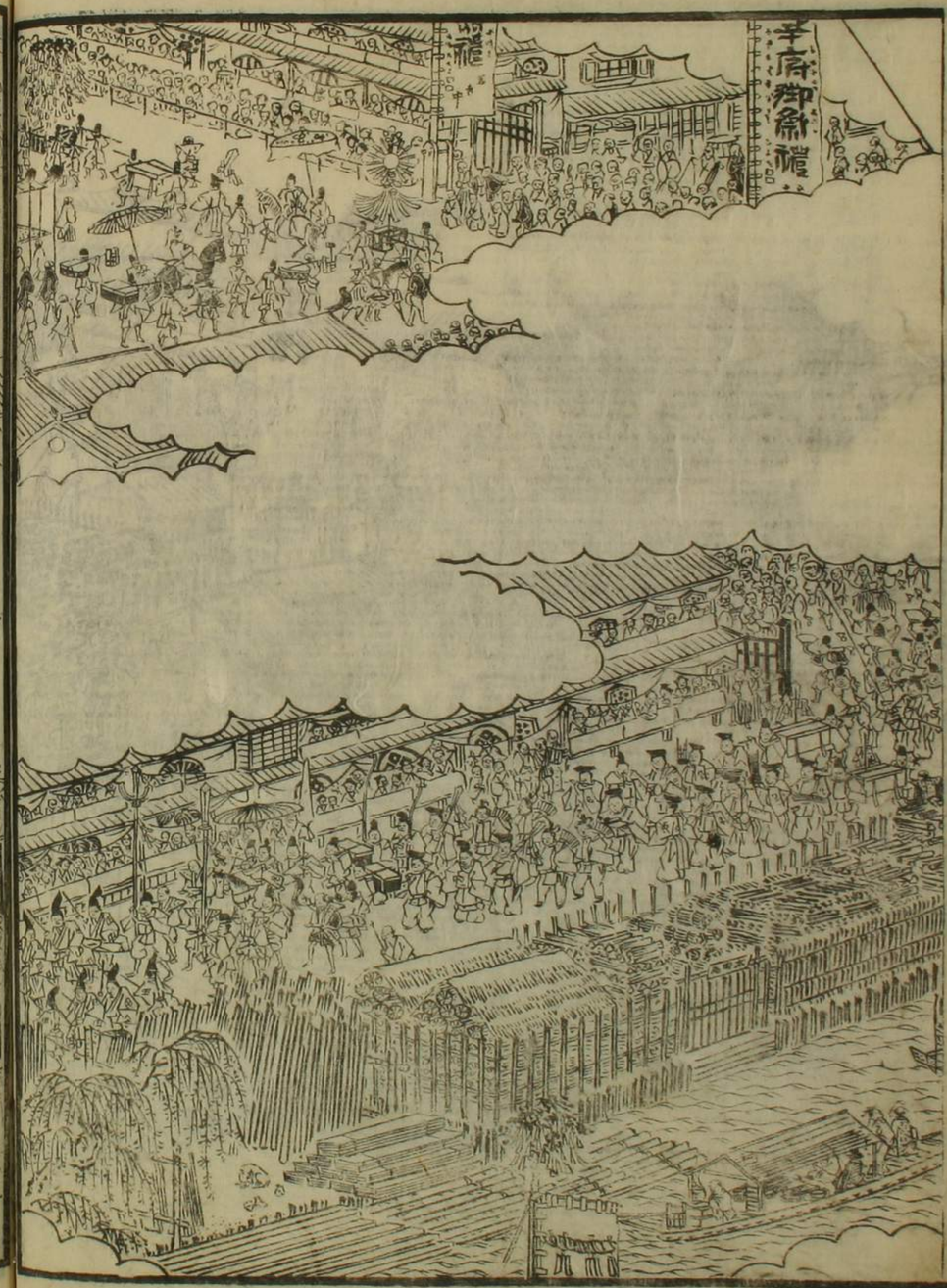
あわむる
枝も
八百不
其角



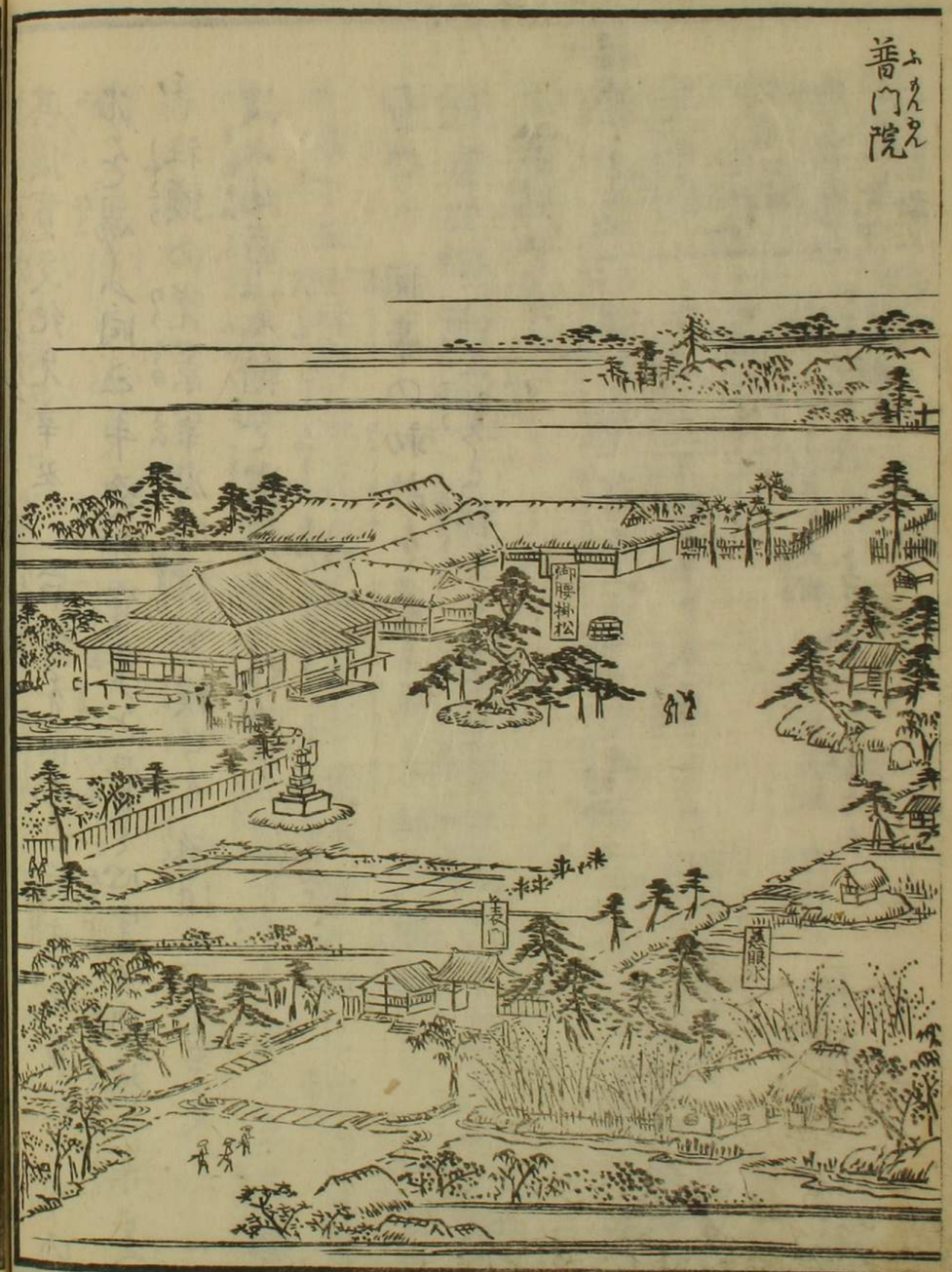
亀戸天満宮祭礼
神輿渡御行列之圖

毎歳八月廿四日ハ代町の四社ハ神幸いのりて行粧賑まゝ
産子の町も練物に世都鄙のまゝ繰群集てさの一盛りなり


亀戸天満宮御祭禮
寛政十二庚申歳六月吉日
本所二ツ目
氏子中


芋洗御祭禮

枝を折梅花の神徳二十八首を披講せ又夜より宮司社人松明を燒し榊と帶とを
神樂と本社より北宮の池をめぐり橋を渡て鳥居門より入社前より松明を積て是を焼
ちの祭りの八宰府の形を　雷神祭　四月朔日より七月日に至
うつせ所うつと　神御衣　四月晦日と九月
なくまの　名城祓　六月二十九日　晦日の夜御衣を
はらる　よりて　七夕和歌連歌會　七月七日これ
祭禮　隔年八月二十四日より　後水尾帝の勅許よ當日陸三川通小松代町の御旅所へ神幸す日歸輿
進ぜ也壯觀　列當大鳥居氏梁車を生ずの所くうつも　濱物車樂等を出し　を真行
ゆきうつる　翌二十五日より　よりて神輿講社頭よりをひく行ふ
月見連歌會　九月十三日　火燒神事　十月廿五日より　年越神事　十二月晦日
追難神事　節分の夜　當社の祭式い也て宰府の例に准ふる一社の法式あり
雖ども　社記云用祖信祐　菅原善外　始祝前大宰府よりし須正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る甚夢中　十立て榮ふる
梅の椎枝うれ　とめる發句を得たり依其後悲梅を以て
新よ神像を造り是を護るして江戸より彼天滿宮を今
の亀戸村よ勸請せ　初勸請の地は今の宮居より東南の方耕田の中よりあり
其後寛文紀元辛丑　台命を蒙り同年壬寅　始て今の
地を湯の同三年癸卯宮居を營ム心字の池樓門ホ
ム社頭の光景宰府の体を摸せり依は十一年辛亥
後水尾帝震翰を灑ぎ菅神のる號をやしめ又え祿
十年丁丑一社の神事法式等宰府本宮の例よ准せ
む　同帝の勅許を蒙る爾来神威顯赫として靈驗眼
著あり當社至寶と稱せるの菅神佩せるところの天國
の寶劍なり
福聚山普門院　善應寺と号せ同所一丁ばかり東の方よあ
其云宗の　て今大日如来を本尊とせ
得て寺産若干を湯せ永く　慶安二年巳丑住持沙門栄貞情
香燭の料よ充しなとなん　給の誓ありとて
沖腰懸松　堂前よあり昔　大樹　沖放雲の初　沖腰を
よ用ひ普門慈眼の意を　慈眼水は所よめ
とりて名とせ　故よこの名あり



身代観世音菩薩 当寺ハ安置する所ハ聖観音なり

縁起云大永二年壬丑千葉氏中興自胤兼胤の孫なり季胤の二男なり三膳の城中より

一宇の梵刹を開き此霊像を安置し長賢上人をして始祖

今の普門院なり三膳とハ隅田川綾瀬川荒川の落合ひ三俣なり

なりしむ

なり始れとも後紀火よりて堂宇焼没し其仏を奪つて逃る

此を以て寺院を今の亀戸の西に移し当寺新堂の縁起に詳なり

牧当寺縁起に云ひ当寺新堂の縁起に詳なり

善次盛光 後薙髪して慧と号す

往古千葉自胤の臣佐田

不の此霊像の加護よりて其白み段々に壊し危難を逃れたり

此霊端より自胤三膳の城中より当寺を

創し長賢上人を導師とし旦開祖

又天文三年国中大に疫疾流行

し死亡する者少なからさりし此霊像を念する輩い悉く病

平癒し病人臨さる者い病者と床を等しくとも敵て深

延の患なし其後住持長栄上人睡眠の中一老翁の来るあり

吾い是施無畏大士なり多くの人に代り疫病を受故に病苦

毎歳正月十四日
よりこれを奥行き
此地の童子多く
あつまりて菱垣
造りよしたる
小き船よ彩の
幣帛を建松竹杯
をも組飾り其中
夫より宝舟とのる文字
を染くる幟を建
たるを行燈の音よ
唄ひ連て此辺を
持歩行きり其夜
童子集會して祝ひ
戯るゝを
恒例とす

一身に逼まり上人願い我法一千座を修して予ら救世の加彼
力となるべしと夢覚て後益数車を加く幸そを祈り奉る
佛躰より汗ながして蓮臺より法る感涙肝に命しう昼夜不
退に一千坐の観音供を修しかれい四中頓に疫疾の患ひを
逃れることを故に世俗身代観世音と唱へるとなり

卧龍梅　日呼清香庵にあり俗間梅屋敷と称し其花一品
にして重瓣絜白なり薫香至て深く形状宛も龍の蟠卧る
如し園中四方殺十丈ら間に蔓て梢高く枝毎に半ば
地中に入地中を出て枝莖を生し何れを幹とも弁きそなり
なれども屈曲なりて自其勢を彰と仍卧龍の号あり
梅譜に所梅梅就杯いとるとあるなり

梅譜曰　会都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐物也謂之梅竜好事者載酒遊之云云

神明宮　日呼にあり宮居い一堆の塚上にあり相伝へ上古此地い
一の小嶋にして其繞りい海面なりしと其頃渡海の船風浪の
難に逢ひて伊勢両皇太神宮の加護により命を全ふせし
報賽のため此地に社神を勧請なしまり宮居を営しし
といふ往古い此地船を失ひ海に入と唱へ今も古社を失ひ海に入と唱へ

細干摸　と云ハ社の傍にあり神木にして昔は辺ひとはくきの海なりし頃漁者の網を
穿てい土中より漁網に具なる不の種と名つくるなり依海辺なりしとする
ようなる人云ひけるいとり山摸の一名を大平摸と称せり社地をも大平塚と称せり

明王山東覚寺　同呼南の方にあり真言宗にして寺鳴の蓮
義寺に属して本尊い弥陀観音勢至の三そなり当寺創禄
四年辛卯草創なる呼の寺院にして開山を玄賞法印と号し
不動堂　当寺に安置し良弁僧都の彫像にして相列大山寺の幸そと日称
縁起曰当寺往古草庵なりし頃開山玄賞法印こに住せられる拠て享禄四年
辛卯或時頁笈の優婆塞来りて投宿をもとむ法下許諾し其夜日床に安卧
ぬ翌朝法下疾起て仏間に入ひとすると傍に一人の壮夫の壮然として行
法下怪み其名を問といふとも壮夫い聾唖の如くさしに答なる不るし其時投

梅屋敷

白雲の
龍を
ゆ
む
や
梅の
花

嵐雪

如月の花盛
よい容色
強の雪彼
敷さ餘香い
芳ことして四方
馥まる花の
後実をひろ
を採収て日よ
乾し陰漬
として常これ
を賣へ味ひ
殊こよ甘美
あれいろよ
捨賞すう人
くれらを
佳て
郷土産
とを

術の優婆塞これを学ぶ〳〵年〳〵と云〳〵られ我笈の中より安すの不動尊の霊像
不ゐ〳〵んと云て即笈の蓋よりさまりいた漸行念ずに不例に彼止支身躰の自由なる
ゐを知ゐえこゝより杖ゐて詣を發せるゐを聞ゐ〳〵方より故〳〵四盗賊なりゐすを示し
其罪を謝して紅く良ぶよひゐゐ〳〵法印られを奇とし甚ゐるの由縁
を問優婆塞こゝ云〳〵ひ〳〵良弁僧都相列大山を定基〳〵ゐの〳〵せ前路を定通〳〵僧給をして山頂に
ゐ安村より伴せ〳〵の其時伴給を供奉〳〵ゐの〳〵せ前路を定通〳〵僧給をして山頂に
ゐ〳〵むられ相列大山寺の真基ゐ〳〵甚後伴給隨後の労を謝して此本尊を我坊迫
に附属ゐ〳〵たひ告〳〵云〳〵人界の大患い盗難難のふゐ〳〵ゐ〳〵ゐへひ〳〵山霊像を優婆
せい永く妙ゐ子孫ゐよひ見守結縁の輩も又其難を逃れゐめんとゐ〳〵ゐの〳〵ゐり
紀寿より相伝ゐ〳〵ゐ今ゐ〳〵ゐりて二十五代ゐり田四の間も路中危難と逃れ〳〵ゐ屢多
ゐり〳〵もこの霊像の感度によるゐ所ゐり〳〵と詣りれい法印深く感歎〳〵この霊像を永く
此地ゐよりゐめ一宮を建立〳〵普く衆生を結縁せんと欲し頻に此霊像を乞求む
優婆塞も強ゐよ其意ゐ〳〵ゐの霊像を玄学ゐ附ゐよと玄学ゐ歩ゐ一宮の香堂を
営ひゐく此霊像を安ゐ置ゐ寺ゐられゐり故ゐ世人盗難除不動尊と称〳〵ゐの〳〵せ

香取大神宮　同所二丁許乾の方にあり

此地も昔い大平榎ゐ繁〳〵く海
ゐて一の離嶋ゐり亀の窟ゐ系
然ゐりゐを四方を亀使鳴と
唱へたりゐといゐ

本社　祭神　經津主命　武甕槌命　鹿嶋大神宮
　　　

香取大神宮

亀戸邑の常光寺い江戸
六阿弥陀回の第六番目
ゑり雲秋二度の彼岸
中都鄙の老若参詣
群集
浅草寺

賽
本堂建立

祭礼を行いもとせ〜頃い此辺なくて海面すり〜うい春を流し
甚止る地を以猿所と定へ〜と誓ひたり〜小其春めとよ止を
〜とせり故よ今も昔の例よりよりて僅の間なるも十間川よ迄り
て神輿を船よ移〜猿所へ神幸なり〜めり〜を

東林山寶蓮寺　毘藏院と号を真言宗にして寺鳴の蓮を毘
寺よ属を寺そる虚空藏菩薩い行基大士の作なり（江戸三虚空藏の一負なり小岡）
（白山西福寺 品川 養願寺 茅場）　当寺い吾嬬権現の別当寺なり相傳嘉元元年
癸卯俊鏤法印草創を所の精舎にして始い相別小田原よ
ありしとなり鎌倉北條家の時此地よ移をとなり

西歸山常光寺　同所一丁あり巽の方にあり曹洞の禅刹
にして摂陽の總泉寺に属を開山い行基大士中興い勝庵最大
和尚と號す本尊阿弥陀如来の像い即行基大士の作なり
（六阿弥陀第六番目なり）　来迎松い佛殿の前よ存せり（中古火災大の時当寺の本堂火焔と共に樹上よりなりとなり）

（時に樹上へ竜燈揚りそり）　毎歳二月八月の彼岸
就炬松い同〜左の方にあり

中条詣寺〜

亀命山慈光院　同所十間川を隔て向よあり当寺も洞家の
禅林にして同〜く總泉寺に属を永正十年甲戌葛西出雲守
某の令室慈光院殿草創を所の寺院なり開山い嵐巖和尚
本尊観世音菩薩の像い此地より東の方の土中より出現
あり〜とい又境内よ安置をる辨財天の像い智證大師の作
にして葛西出雲守某の尊信あり〜霊像なりとい

吾嬬権現社　同所十間川の湾よあり此地を吾嬬森又深川森
とも號〜別当宝蓮寺なり

本社　祭神　茅橋媛命　一坐

（日本書紀神代巻曰日本武尊初至駿河其處賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之情放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒

而得免

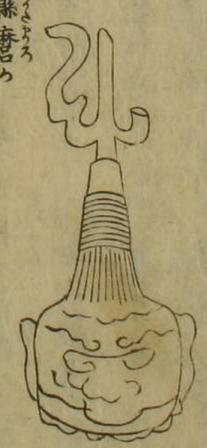
一云王所佩釵蘘雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故號其釵曰草薙也蘘雲此云武羅玖乞王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其處曰燒津亦進相摸欲往上總望海高言曰是小海耳可立跳渡乃至于海中暴風忽起王舩漂蕩而不可渡時右從王之妾曰妾是王之身賤王之命而入海言訖乃披瀾入之暴風即止王曰今風起浪泌王舩欲沒是必海神心也願以妾之身贖王命而入海曰馳水下畧

舩得著岸故時人號其馳水

相生樟 本社の前右の方よりすこし東に離るゝこと四尺ばかりにして二股よりなる社記に往古日本武尊弟橘媛の神靈を埋まつり之御食しあひし時樟の御箸をなりて未代平天下するゝんまつりに御箸二ツなりに當るべしと宣ひ御子に自御廟の東の地よりさをもひしよ後枝葉を生じ今に至りて榮茂也又其傍より樟の蘖あり是も二根二幹なり

神寶古鈴一口 銅色黒ゝ長さ八寸ばかりあり是よりしきりの常陸の鹿嶋正等寺ちもめり又息男縣磨ら家のも藏せり其形状大同小異なる故よりを臨しかよのゝ

鹿嶋正等寺藏



藤原縣磨藏

社記曰人皇十二代景行天皇の御宇四十年皇子日本武尊東夷を征伐しの時相摸國より上総國よ往むとゝ王船よ乘たまふ海中に至りの頃暴風忽起り王船漂蕩て渡るへきに時て妾弟橘媛曰今風起浪泌して王船沒むと欲と是必海神の心なり願ハ妾か身を以て王の命を贖ひて海よ入むと言訖て淵を披て入ぬ暴風即止て王船よ着る成得ぬ 今走水と作る

其後弟橘媛の御骸此邊の海上よ浮ひ流れ尊群臣よ命して此所よ収め壇を築うしめ端羅を巡して御廟とかしの

又其御櫛の寄る所を櫛形と云 櫛の寄りを取揚て御陵を造る今の相列梅沢の五人妻明神是なり 當社古ハ

荒陵のみなりしを以承久元年北条泰時の幕下鈴木重人四神尾

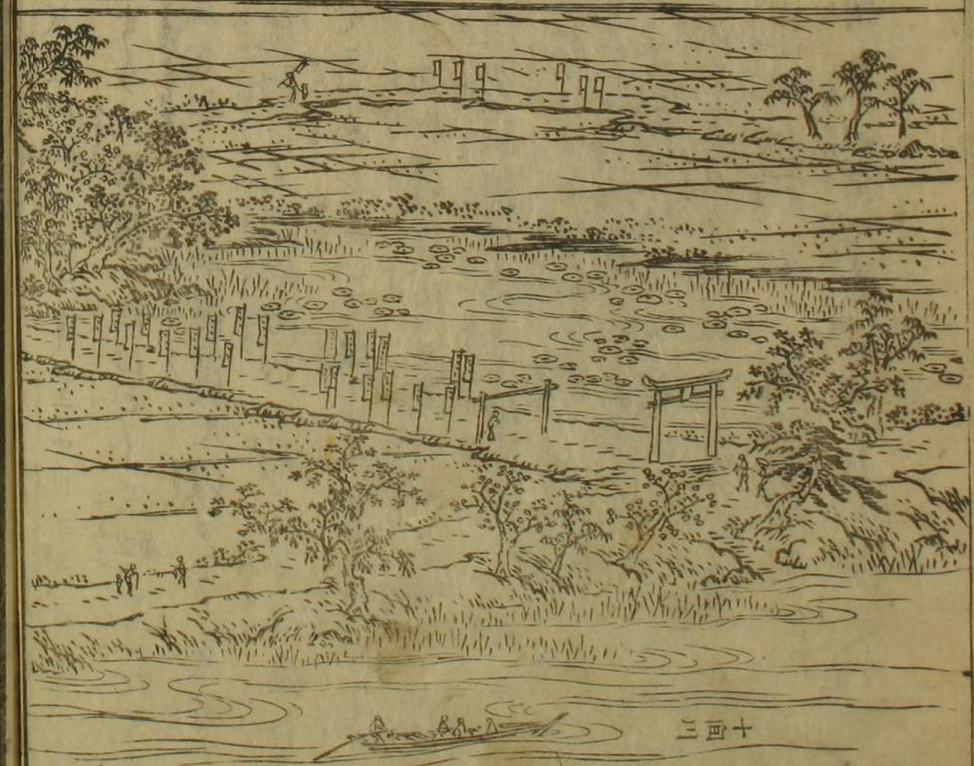
采女井出大學等の諸士小祠を創營し神領三百石を附しなり

しとなり其後永禄の頃も小田原北条氏の臣を山丹波守當社

を再興ちしとなり

吾嬬森
吾嬬權現
連理樟

鳥うゝ
の川まの
夏秋
ゝもゝせい
月い



入江の
波そ
ゝゝ
ゝえる

蘭東恭之
入戸

此和歌は戸田義勝
入道のゝらんせ
鳥のゝとゝゝる和歌
の集ゝ載たりし
自の詠ありその
ちにこの奇妙の
歌は東人とゝゝる
住ゝゝゝとゝり
この東人はゝゝる
人なやゝゝまる
考へを

日本武尊東夷征伐し
たまふの時相模國より上總
國へ往んとしゆひし
其海上暴風忽に起つて
王船漂蕩て危うかりし
うへ妾弟橘媛自の御身
をもて贖ひ尊
の命をたすけ
ようのらせんるのを
海神へ抗言ひ
竟に渦を披
て入たまひ
ぬるゆへ
日本紀に

按ずるに田原北条家の所領殺生禁断の中に葛西小村井の亀戸村に接して則此社の北の人村をいう昔の社地の辺も丹波守の所地なるべし故に当社の縁起にもしかなり

殖髪聖徳太子堂　同所亀戸天満宮の裏門の通り川端に傍て慈雲山乾眼寺という天台宗の寺境に安置せり聖徳太子の御影は太子自親彫造なりとて御長二尺五寸なり其霊験の頃に太子妃との髪を殖させたりしと云ふ故に殖髪太子と称せり

当寺蔵太子縁起云推古天皇十一年癸亥太子御齢三十二歳同年十月廿八日檜隈宮よりおひて霊夢を得て自親影像を作り班鳩の夢殿に納たりしを太子傳暦等に此年影像を造るなりと載せり其後代々の帝王大寺をなし世々の君子堂に移せり仍天智帝の七年に百済寺を営むて安置奉る慶長七年壬寅に至る迄の間南都大安寺及ひ花洛蓮花王院高雄の神護寺あるひい豆別田方の般若王寺相別鎌倉の法華堂武別小菅の最明寺江別滋賀菅原寺祺別金昭寺等に移し奉り竟に宝暦十二年壬午十月武別荏原郡の清谷寺より移し奉り当寺に安置し奉るという

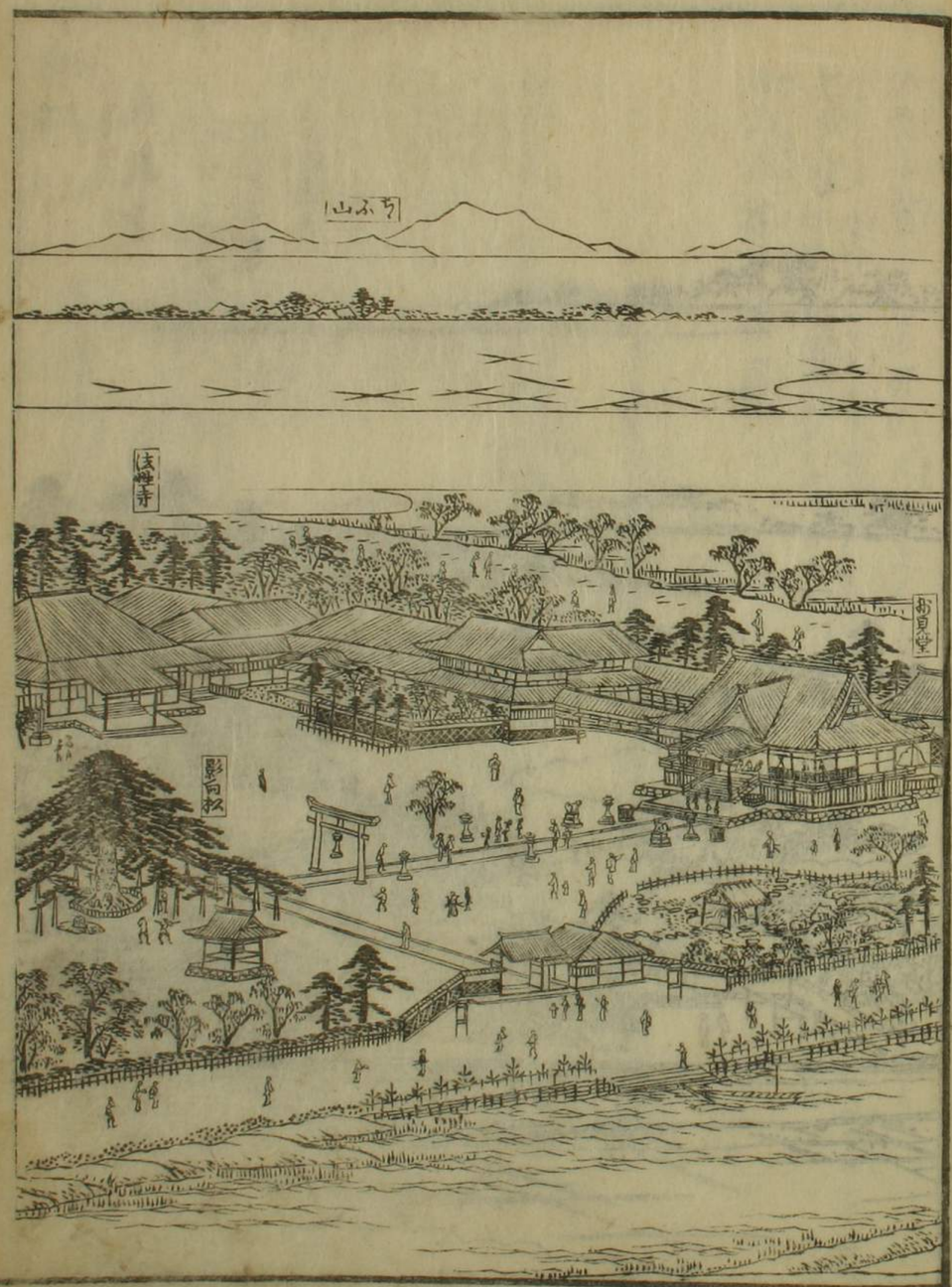
当寺の後園萩を多く栽て中秋の頃開花の時節い壮観せり

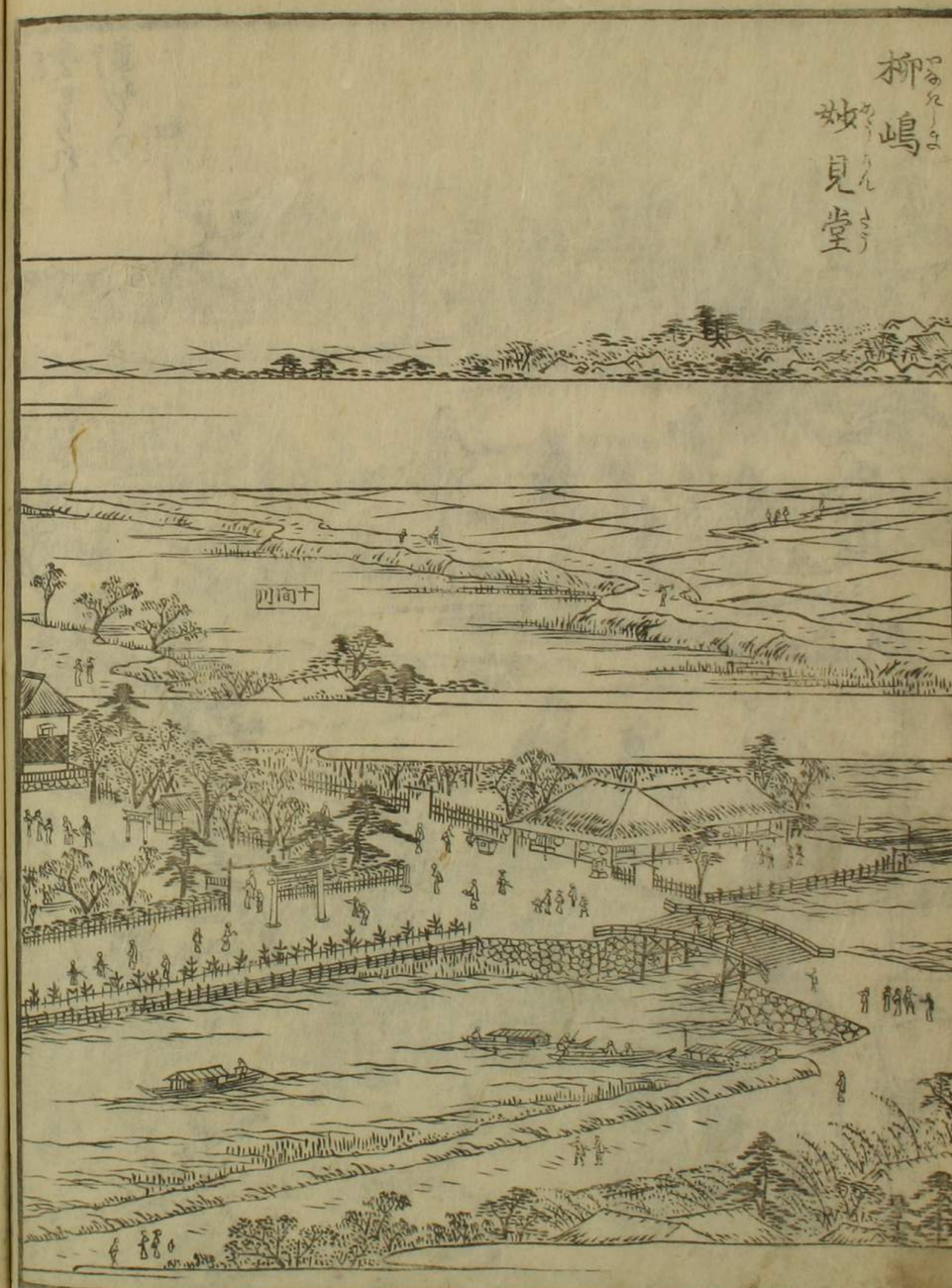
妙見大菩薩　はし川階橋を越て向の角にあり日蓮宗法性寺に安置本尊の来由詳なる迹門霊験著しく諸人常に絶ず堂前に影向松と号る霊樹あり本尊初て此樹上に降臨ありしという故に星降松とも千年松とも呼ぶ元和の頃大樹此地に倒れしに頃更て境の松と号を揚げしと云傳へり

天松山最教寺　同所三丁ばかりを隔て西の方にあり日蓮宗にして本尊に釋迦如来の像を安置寛永年間延山二十七世道心院日境上人開基に当て鎌倉将軍惟康親王蒙古鎮制

龍眼寺

庭中萩を多く栽て中秋の一奇観たり故に俗呼て萩寺と称せり萬葉集茅渟の宮作り和名抄鹿鳴草に作る續日本後紀に仁明帝嵯峨天皇八月清涼殿に内宴を曼陀羅華の燕とありて皇朝古より萩を愛せられし事かくの如し


富士山
浅草寺
観音堂
影向松

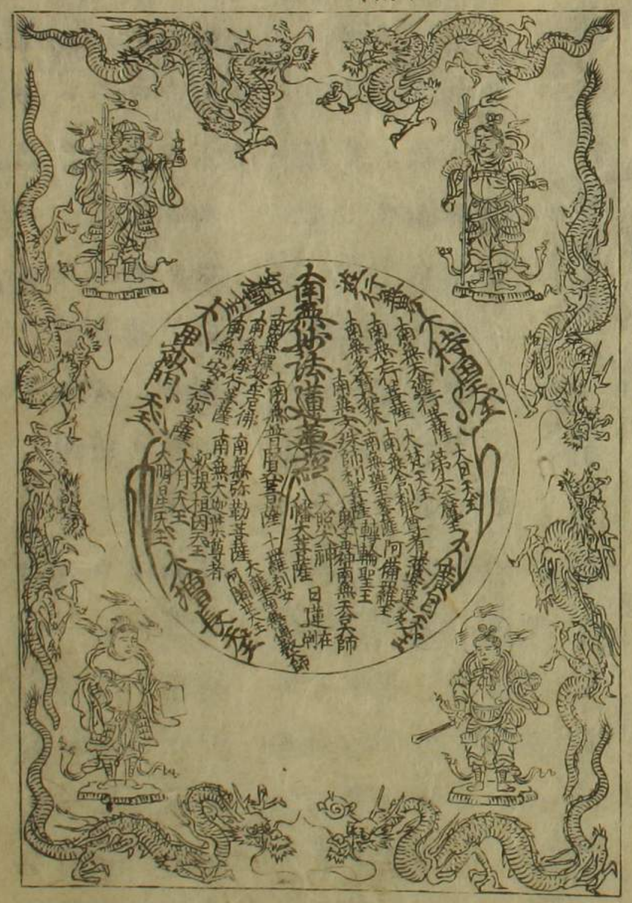

柳嶋妙見堂
隅田川

押上
最教寺
當寺ハ蒙古退治の護曼荼羅あり

の為に書しむる所の日蓮上人真蹟の曼荼羅の旗あり
境内よりあり本山身延同躰の霊像なりと云三澤流祈禱の本そなりて當寺第二世の
七面堂 伝持伝能院日宗学師二百日加行して沖の傍に祠殿を建立せと云
日の丸旗曼荼羅 一幅

毎歳七月十六日より初れ一ヶ月二日まで虫拂とて七面堂に掲て諸人に示さしむ
月の丸の曼陀羅ハ身延山よりあり

竪六尺五寸



兩面之大旗來由記

弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船四千余艘人數二十四万余責來七月於九列防戰其時這八大龍王之御旗凶中日蓮聖人爲祈禱之大漫荼羅令書此御旗先立向親王九列給時某爲武之大將至九列則日本霊神擁護有神風吹彼賊船其人數等不殘破異國江追拂給目出度旗成故我家是預給畢

這兩面之大旗者惟康親王所持之御旗也弘安十二月二十一日

四年五月二十一日從大元國蒙古來船四千艘人數二十四萬人也于時朝親王此旗四方八大龍王四角四天王中凶相内十眼大曼荼羅日蓮聖人仰而令書是爲持九列向襲蒙古災給御旗是也

武列池上村

右衛門太夫宗仲判

正應元年十月十三日

蒙古退治鎮曼荼羅来由

人皇九十代後宇多帝御宇弘安三年庚辰春二月

七年ニ當ル元至元十

鎌倉ニおいて元使杜世忠を殺ス日本元史

元王憤て阿剌罕

五倫書巻二十一阿剌罕ニ作ル阿剌罕途ニて病ニ係

范文虎及忻都洪茶丘等の四將ニ師十萬を率

東國通鑑巻の三十八高麗記ニ茶丘忻都蒙麗漢四萬の軍を率て合浦を發し范文虎蠻軍十萬を率て江南を發し俱ニ一攻鳴ニ會ると太平記

元至元十八年日本文永七年ニ當ル

傳ニ元の世祖の至元一年高麗人趙彝等日本國ニ通ぜんと欲し者を擇ぶの同三年八月兵部侍郎黒的殺伯郎弘等に命じ日本に使せしめ書を齎し來る

安元年近元使日本へ書を齎し來る

元史日本傳六月海ニ入る七月平壹岐ニ對馬

元至元十八

三百萬騎と云縁起二十四万人と太平記

同四年辛巳夏五月

元至元十八年ニ當ル

蒙古の賊

東國通鑑巻の三十八高麗記ニ茶丘忻都蒙麗漢四萬の軍を率て合浦を發し范文虎蠻軍十萬を率て江南を發し俱ニ一攻鳴ニ會ると太平記

招

東國通鑑巻の三十八高麗記ニ茶丘忻都蒙麗漢四萬の軍を率て合浦を發し范文虎蠻軍十萬を率て江南を發し俱ニ一攻鳴ニ會ると太平記

餘艘と縁起四千餘艘と一云元史

の二鴉及ひ筑前肥前ニ入る

ようつる八月一日風雨を破るとあり異称日本傳

比羅度と云三韓會

天下の人民戰慄

せしなり

ニて鎌倉ニ征夷大將軍惟康親王蒙古退治

の為自九州ニ向ひ給ふ宇都宮貞綱を以て先陣の大將た

らしむ日蓮上人に命して日月の旗の印中ニ大曼荼羅を

書し其旗を貞綱ニ與へ西海ニ發向せしむ其時同年閏七月

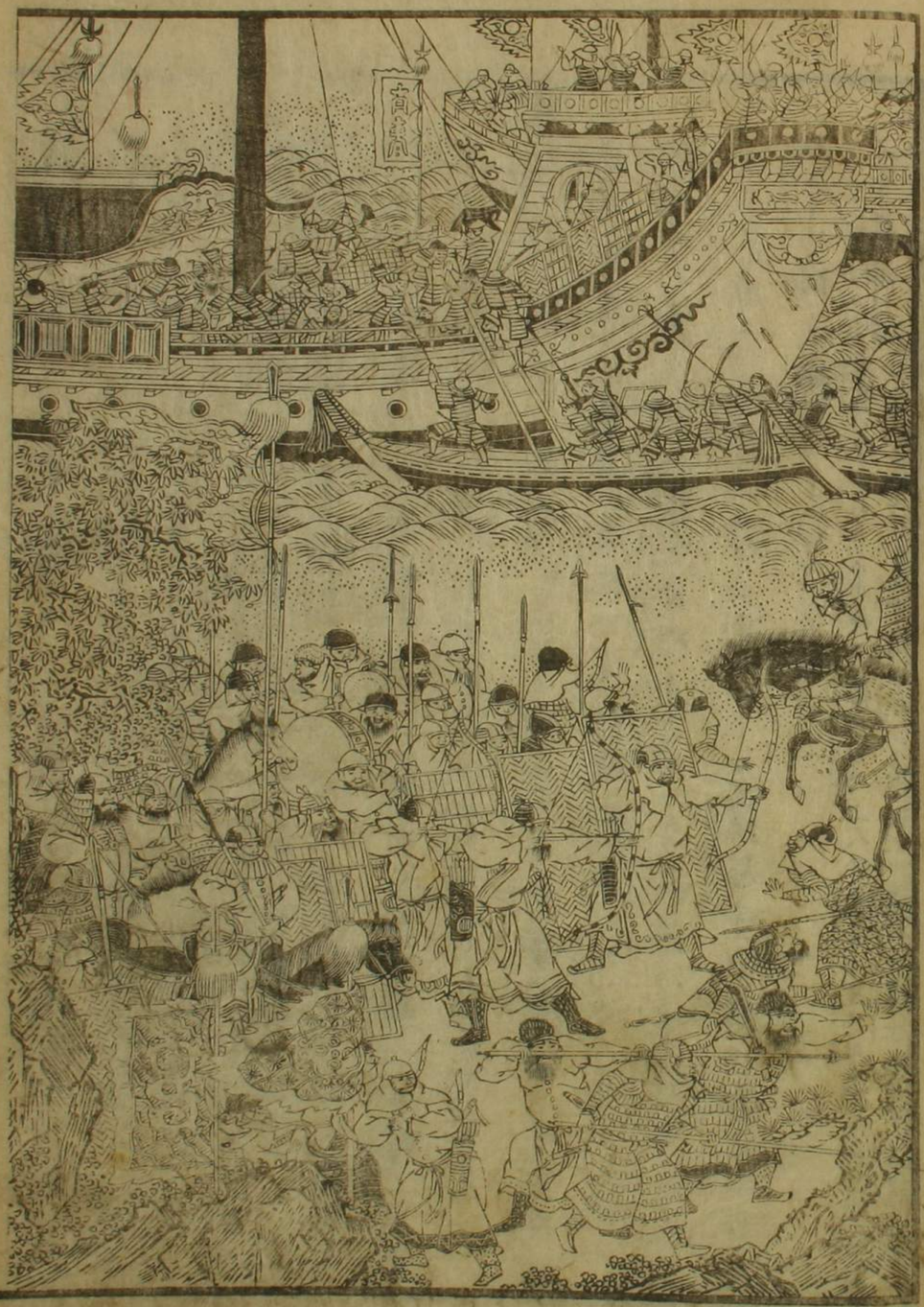
一日より貞綱海濱ニ至り彼旗を押立るニ颶風俄ニ起り逆

浪天を浸し賊船漂蕩し或い巖崖ニ觸て多く壞し蠻軍

溺死して奥腹に葬られるものの其數を知らと元師大に敗北

を擄ニする者凡三萬人悉く是れ梟首と其餘于閭莫青呉

鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夷賊
退治の図

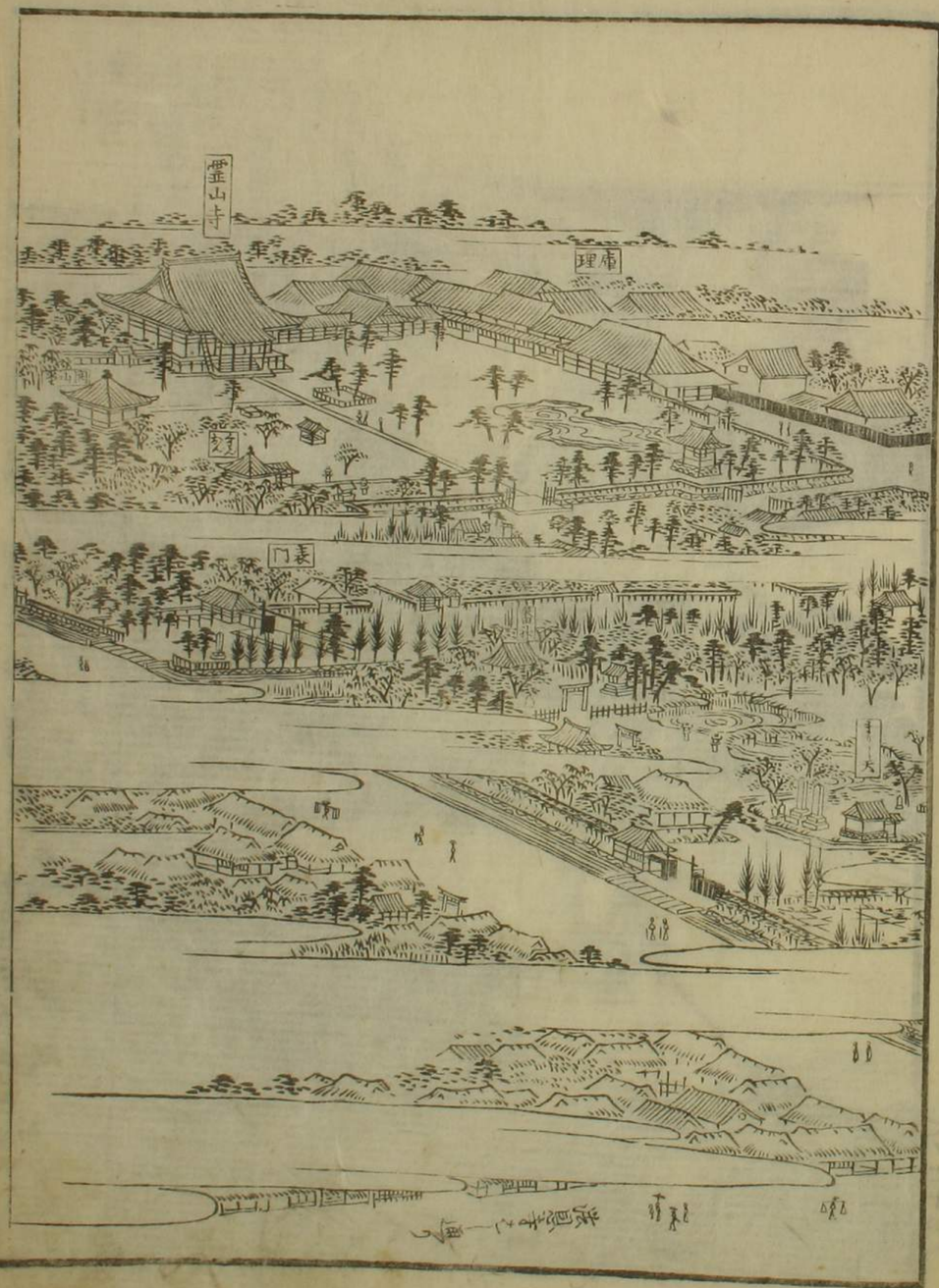


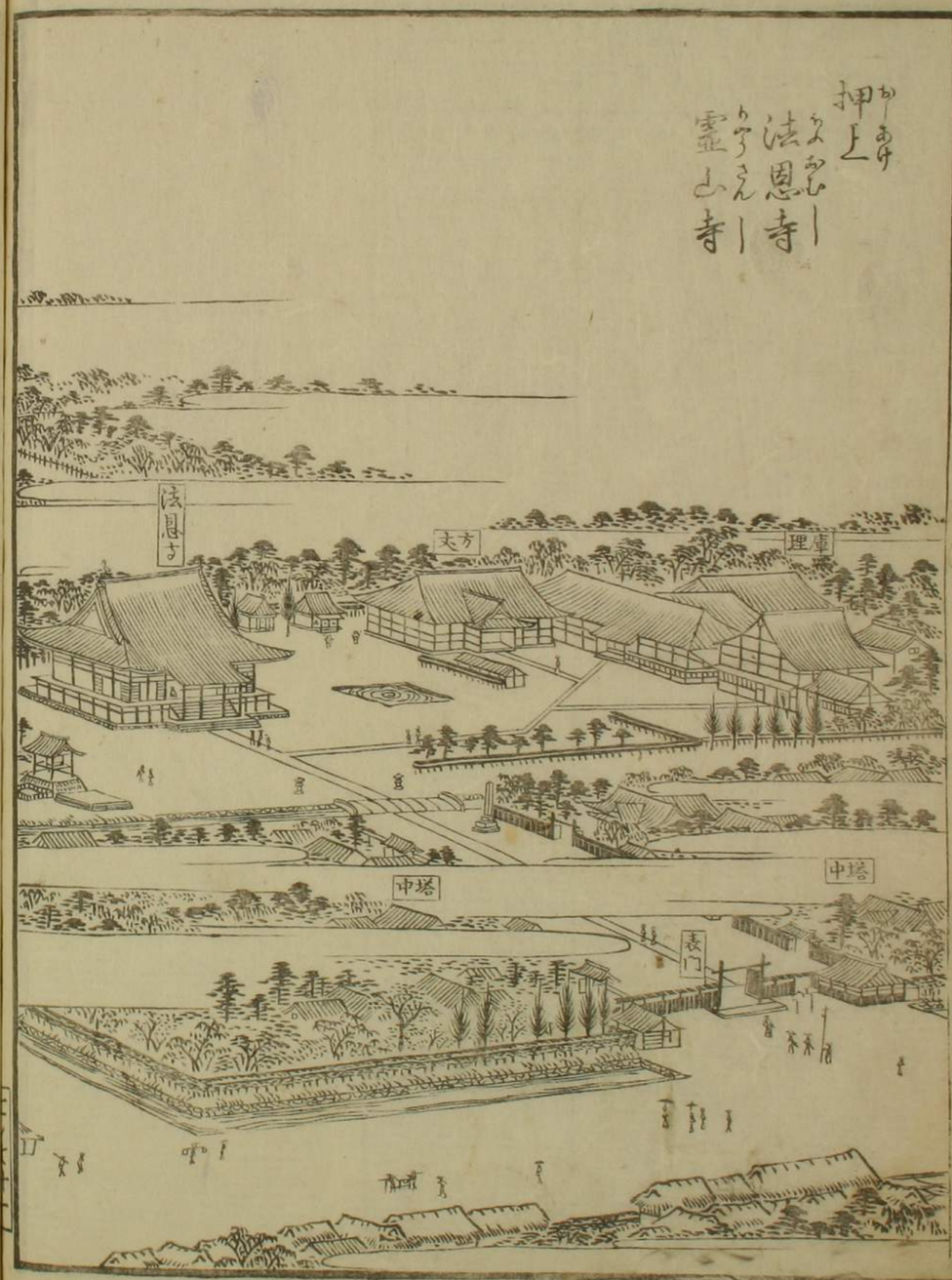
其二

萬五等を赦して國に還らしむ是此事に元主よりたしめんら
ゐるより蒙古の敗卒還るるを得る者僅に此三人のみ
云えの世祖の至元十八年日本を擊兵十餘萬海渡して敗を得る者僅に三十人とある
を異称日本傳に三十人の十のまはり衍りとあり元史に十萬の兵還るを得る者三人のみと
のりて三人の名を挙たり曰く千間曰く莫青曰く呉萬五等なり以上元史日本傳東國
通鑑続資治通鑑綱目大学衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺
縁起等の要を摘　依凱陣の後勅賞らして永く此旗を貞綱に賜の貞
綱来由を書して身延山に納む然を當寺開山日澄上人
延より携来るる永く當寺の什宝たらしむるとなり

寶聚山大法寺　同三丁ばかり西にあり日蓮宗にて同所法
恩寺に属を當寺は大永六年丙戌創立の梵宇にて開山は
法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃は法恩寺と共に
今の御廟内平川の北にあり
同今の地に轉ずるとなり
二十番神堂　本堂の左にあり番神の像は日巧上人の作なり日巧は呼六歳の時疱瘡
を病ひ死せり又冊蘇して後其子を出家せしむ日巧點

忽に蘇生せ則鹿布石に番神の加護ありて後其子を出家せしむ日巧點
今狂夢想の疱瘡の守札當寺より出せり卵塔の中に其摸を置たり頂物は日蓮上人親筆
廣布石　當寺本堂に秘蔵せ今卵塔の中に云々此霊石亀戸村の北にあり
亀戸村黄い蝉倉の法華経の道たり建長五年日蓮上人伊豆流罪の時此霊石を
布石と号く其後千葉氏より相傳せり後千葉氏より頂物は日蓮上人親筆
葉氏より寺に寄進せり
創此石面に三十番神の名号を
彫流られ寺るとなり
常在山霊山寺　二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
浄家十八檀林の随一なり本尊阿弥陀如来の像は慈覚大師
の作釋迦如来の像は唐仏なり教院と号す開山は念蓮社專誉
上人大起和尚と号す中古寺院既に荒廃し檀林の統脈絶ん
とせしを最蓮社親誉俊應和尚深く此事を慨屢
官府に訴へて竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の浄
域に復せられしも功を後住に譲て武州能谷寺に隠る故に
光蓮社明誉遊安廓栄和尚を中興開山とせ廓栄和尚は一宗


靈山寺
庫理
方丈
表門


押上
法恩寺
靈山寺
法恩寺
方丈
庫理
中塔
中塔
表門

庖師
中之御の辺
庖師の家
多く見出
業と
まるりの
多し

の高徳碩学にして往生要集指麈抄を著し大に世に行はる
當寺昔は湯鳴妻恋坂よりして羽曆火災の後淺草に
移りて元禄年間今の地に移る（淺草にありし頃の地は今の鶯谷寺中安養寺の所なり）
知恩院尊空法親皇御廟（本堂の西にあり尊空親皇は涼川小名木川なり五本松に庵閑居あり甚故ありて）
浄土傳燈系圖曰　尊空天蓮社帝譽号照満伏見
宮氏所影堂は池中恩満院より
守邦親王子入于霊巌室剃染嗣法住洛知恩院元
祿元年十一月七日寂
観音堂（堂の前右の方にあり本尊は慈覚大師の作なり）
桂昌一位尼公浄念持佛なりしとぞ
平河山法恩寺　押鳴出村町にあり日蓮宗にして花洛本圓寺
の觸頭江戸三箇寺の一員たり本堂は宗祖上人の像を安置
日法上人の作なり相傳ふる當寺は太田大和守資高（道灌の孫なり法名霊場記）
（資高は江戸城中法恩寺日曉なる霊なりと云々）　先考六郎左衛門尉資康入道法恩祢日恩と号
十三回忌追悼の為に田村の内を寄附し日住上人を開祖とし
則大永四年甲申武州江戸下平河に精舎を営建し一家の霊

牌を居ると云云

三十番神堂　本堂の前左の方にあり関東古戰録といつるものに云僧は三十番神の堂をもつぱらひ家筵所よりもまつ至てうと又北条五代記小田原実記等の書に資高北条家を背き里見義弘に力をあらそひ永禄豊鴻郡の地を加行ぜんとせしの時ものゝ番神堂の前にて神あらを呑はる思ひ定ぬうゝ再々をへゝと誓約ありしゝ記せり甚近い今の御城内平川の地にありゝなり

當寺往古い今の御城内平河にありて本住院と号せしとかり北条家の所役帳に本住院寺領三田内当所分の地を法恩寺と改しい後亦のもとに隠をとあり刹を役所い本住院のもを云ゝるゝしゝ

こえたり遥に天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の地に轉せられたりといつり境内に平河清水と称する稲荷の小祠あり

元禄の初今の地にひられたりといつり

是乃ち平河より流れ出る清水にて後まて

ふるつの地名をあらせるせるゝ中い称せるなり

葉平天神社　中の郷南藏院といつる天台宗の寺境にあり傳いか

在原葉平朝臣の霊を鎮ると云云　江戸名所記に葉平すでに都にのがれ

の舟にのゝうの浦まて覆り溺死せ乃里民塚に葬こあたりゝ故に塚のうちに舟の

ちゝなり甚在所を今も葉平村と云と又江戸鑑に作る冊るにも成平に作り相撲

とも紫の一本にも葉衡に作り武夫ともいつれも徒と

ちるふたゝも永涼亭云く此祠昔い今小梅の水府公に仕きの地にありゝとなり横川

按に當社の傳説紛くとして詳ならんなり南向亭の茶店に沉紙の三吉野の里い

在五中将の所にとなるとなるとのの里とありゝ此なれハにや後三吉野天

神の相殿に葉平の霊と菅神とを合せまつりされい此地も隅田川の流迫く

ちゝ彼伊勢物語に國ゝてるも葉平の霊を齋まつり菅神をも勧請せしなり

葉平天神とい称しるなりんをとあり此説の如く伊勢物語を作りたるものと

ちゝに後世に附會せしものなりんん

中郷八幡宮　同所南の方荒井町にあり南番場町天台宗泉

龍寺奉祀を相傳に文明七年乙未の鎮坐なりといつり

大六天祠　同北に隣る大川端普賢寺別當たり當社も文明五年

癸巳の勧請なりと云傳に

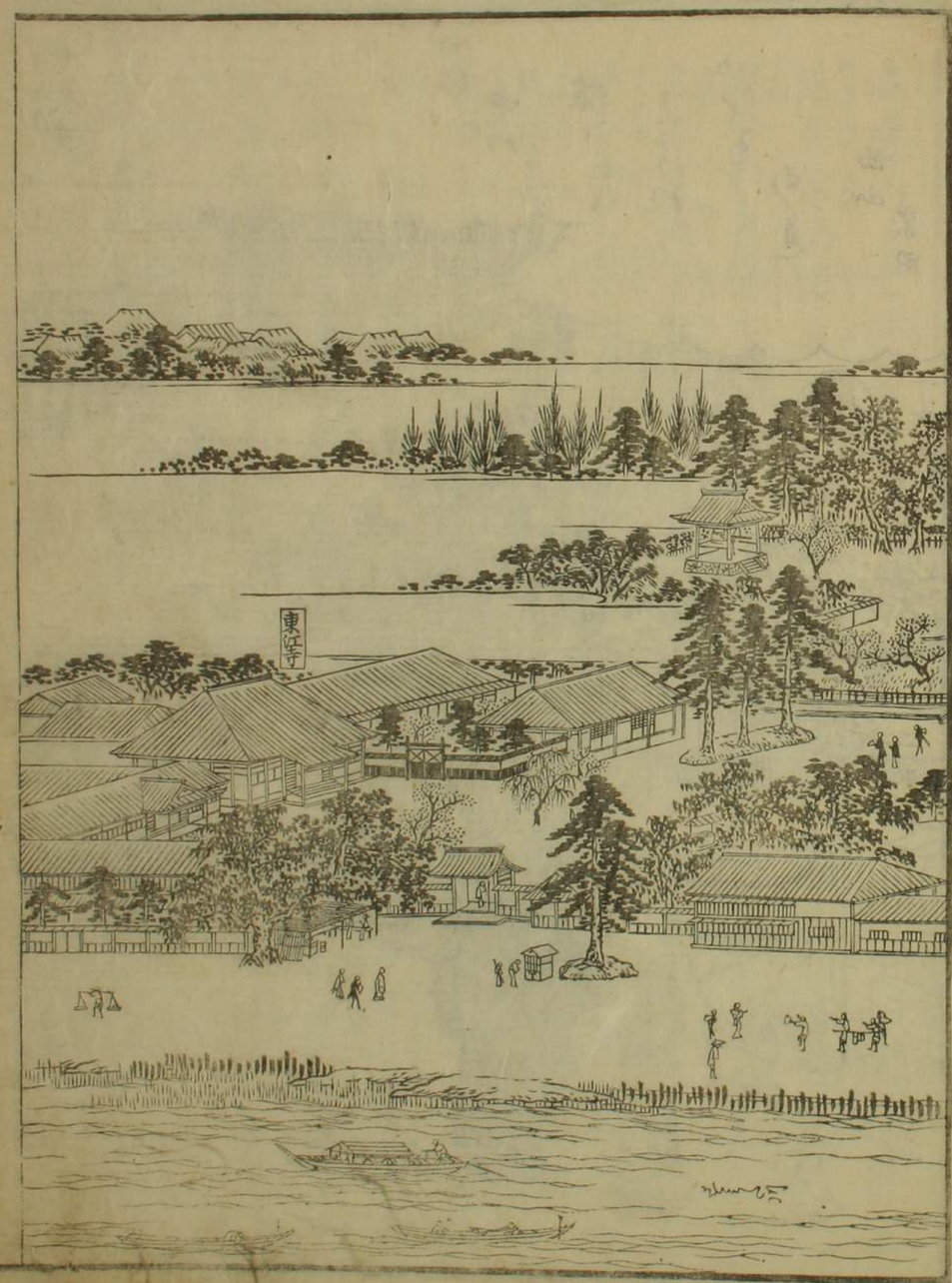
多田藥師堂　同所大川端にあり玉島山明星院東江寺と

号を天台宗東叡山に属を　懸門に掲る所の玉島山の額い韓人雪月堂

李之錫の筆なり本尊藥師佛の像い恵心僧都の作ゝ

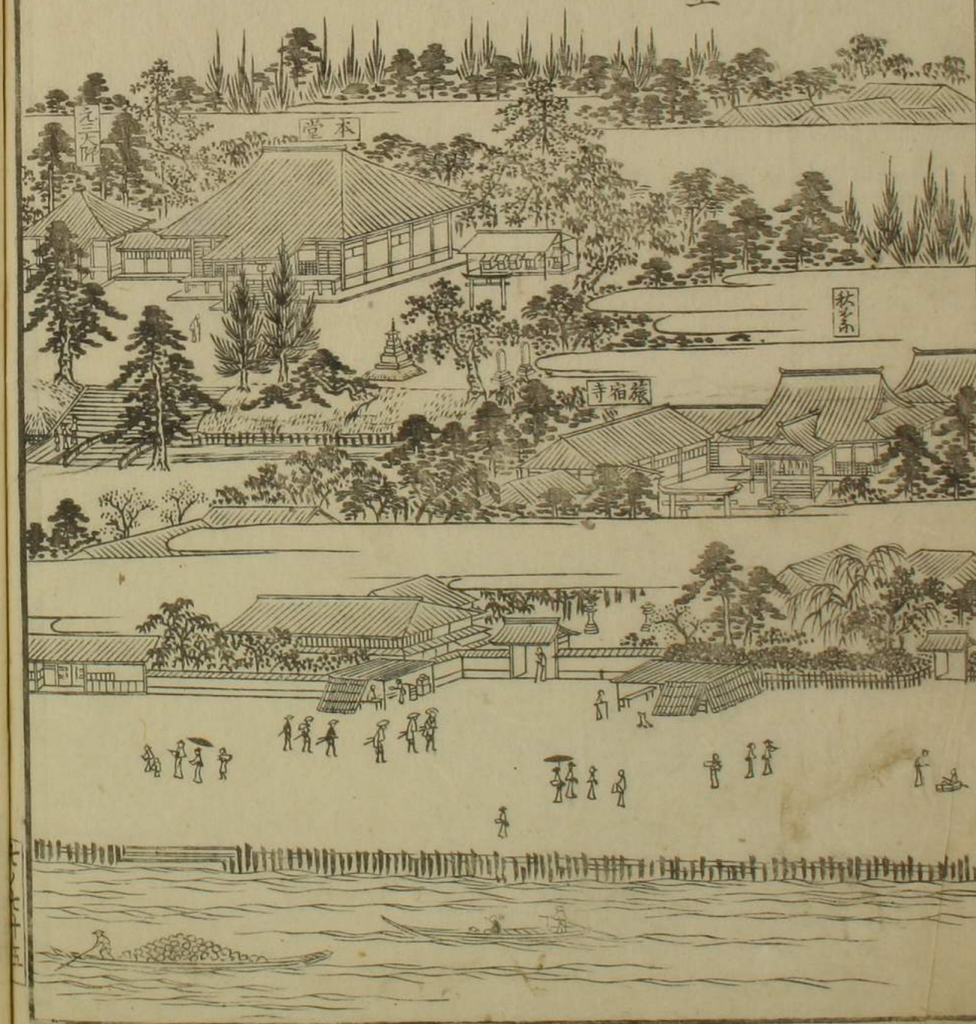
多田満仲公の念持佛なりといつり　左右の脇檀に十二神将の像を置

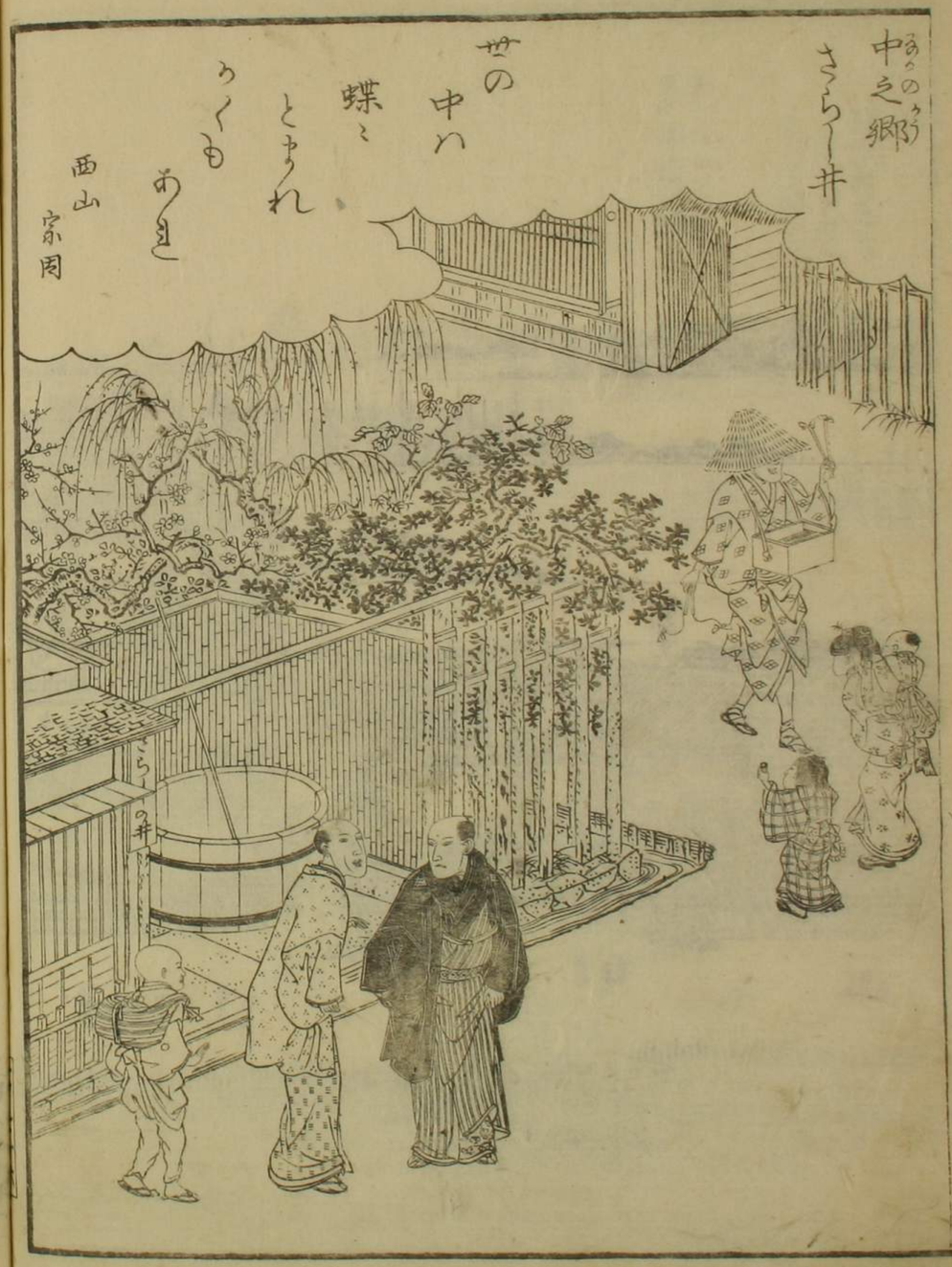
相傳に村上帝御宇天徳二年摂別多田郷に一宇の伽藍を



秋葉社八毎年
十月十六日ぞ礼
ありて旅くり

たくのやくし
多田藥師堂





造営あり て沙羅連山石峰寺と號し 此本尊を安置す其後文永の頃兵火に罹りて諸堂悉く田禄と依て一山の大衰られを悲み此本尊を石函に収めて山中に埋め奉り然る より後星霜を経て慶長元年郷民等沙羅山中におひて此石函を穿出せり蓋し沙羅連山石峰寺薬師の銘あり郷民等奇異の思ひをなし一宇を営て是を安置同八年其庵主宗玄と云者に本尊告ありて京師五条の因幡堂より暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の辺に堂舎を建て石峯寺と号す寶永の頃彼寺の黄壁の千呆和尚深草に移す其時故あり て本尊薬師佛を當寺に安置せり

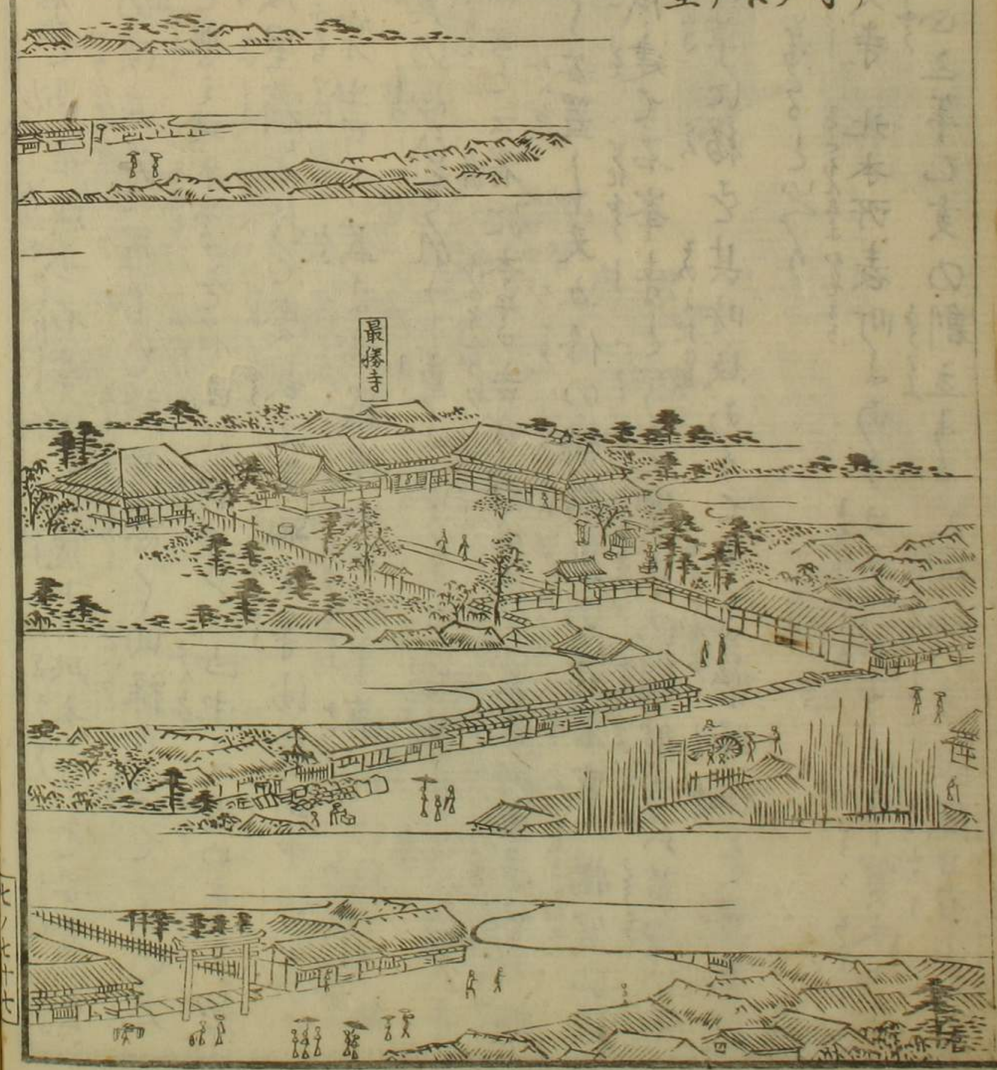
照法山本久寺　北本所表町にあり日蓮宗にして平賀本土寺に属す天正三年乙亥の創立にして岡山清眼院日有上人と

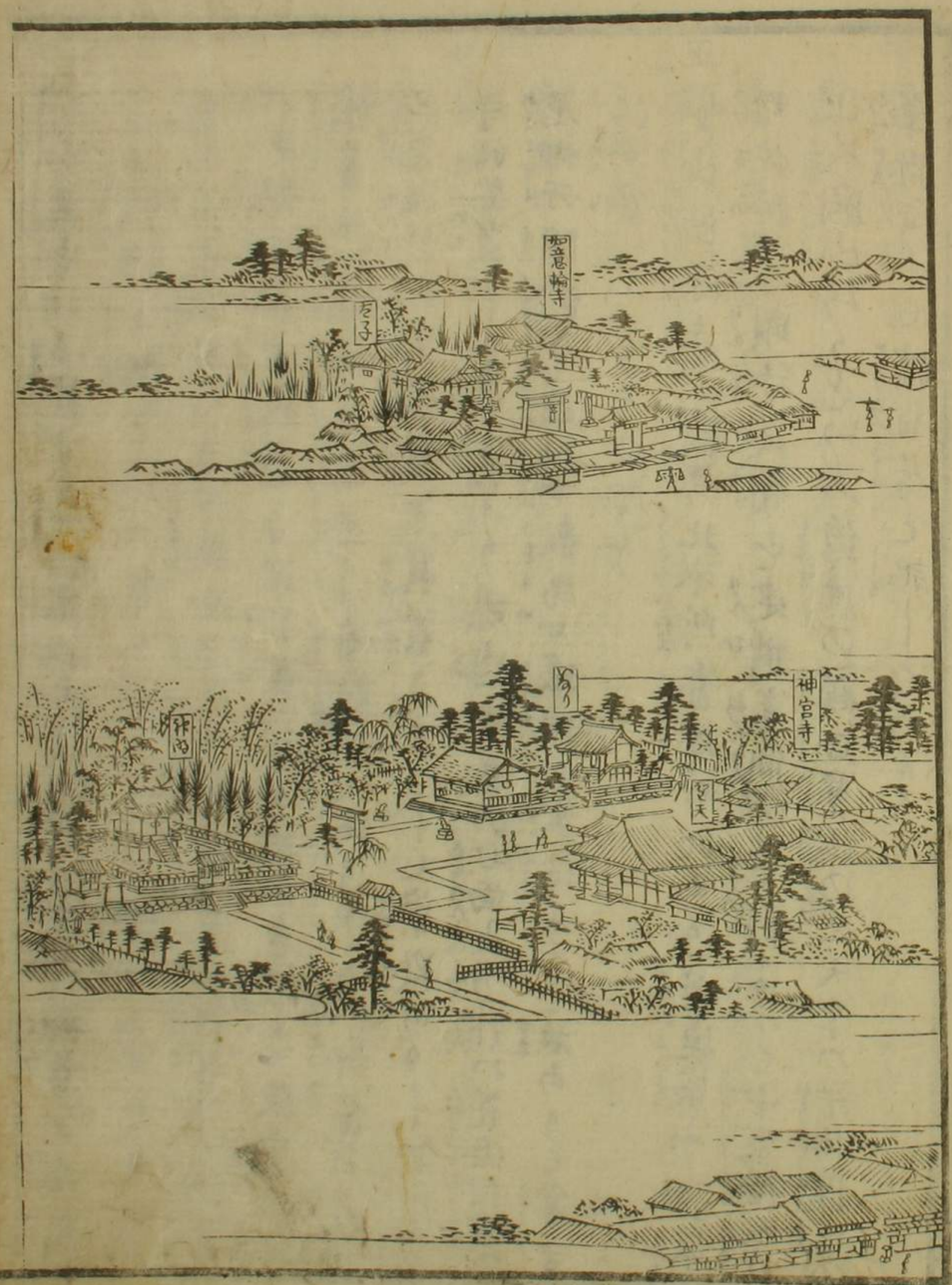
中郷

最勝寺

神明宮

老子堂





号を當寺に安置する所の宗祖大士の像は日朗所御首を彫刻
し日法所全體を造り添られしといへ體中三すに六すの首
題の札を收めたり日朗日法等の真跡なりといへり
此御影始谷中感應寺に安置を元禄四年彼寺改宗の時
檀家へ八牧弥宗と云る有信の人ありしか此影像をらひに
三光天子大黒天等を其家へようつして宗教ありしを後當
寺に安置しをるとなり境内安垂の七面大明神は花洛村雲の
尼御所隨新寺殿仕女數馬女感得の霊像にして故ありて當寺
に安置しをるとなり

正覚山妙源寺　同所北本所番場町にあり日蓮宗にして
野佐所妙顕寺に属を建武年間の草創にして中老僧天目
上人開山たりといへ總門の額正覚山の三大字は平林惇信の
筆跡にして洪日居と記してあり

牛寶山最勝寺　明王院と号し同所表町にあり天台宗にして
東叡山に属を本尊不動明王の像は良辯僧都の作なり當
寺は牛御前の別當寺にして貞觀二年庚辰慈覚大師草創
良本阿闍梨開山たり寛永年間　大樹　此辺御遊猟
の頃屢當寺へ　入御あらせられしより甚頃は假の御殿抔
営構なし置れたりとなり

牛嶋神明宮　同所に並の相傳は貞觀年間の法座なりと別
當を神宮寺と称して最勝寺に兼帯を
夢想大神宮の虚空蔵菩薩の霊験の文を唱へ我いにしへ伊勢の御社を勧請し奉りしに
元禄の頃社を

の像は十六歳にて御自親造りあらせられ常寺に傳和
天皇の嘉祥年間慈覺大師東國遊化の頃の創建なりて帝百
畝の水田を寄附しあり天文の頃此地稅蝕氏の災に
あらも太子の靈像は自火焔を逃れ出ひて恙なりしよ
江戸名所誌よりうつす

天人冊 六十九